

業務資料No.628

アルゼンチン国における 農牧林業の生産流通実績

国際協力事業団

移海外
J R
81-6

アルゼンチン国における 農牧林業の生産流通実績

JICA LIBRARY



1053925[2]

国際協力事業団

移 海 外
J R
81 - 6

国際協力事業団	
受入 月日 '84. 3.15	701
登録No. 00334	80
	ESE

目 次

1. 一 般 概 況	1
1.1 自 然 環 境	1
1.1.1 アルゼンチン国の位置, 国土面積, 人口	1
1.1.2 地勢, 河川	3
1.1.3 気 象	4
1.2 地方区分と各地域の概要	5
1.2.1 パノパ地方	5
1.2.2 エステッパ地方	6
1.2.3 東北地方(メソポタミア地方)	6
1.2.4 チャコ地方	7
1.2.5 西北地方	9
1.2.6 パンペアーノ山脈地方	10
1.2.7 クーロ地方	10
1.2.8 バタゴニア地方	11
3 1.3 経 済 概 況	12
1.3.1 歴史的背景	12
1.3.2 1976年以降の状態	15
1.3.3 現 状(統計)	16
1.4 農牧林業の概要	19
1.4.1 生産概要(統計)	19
1.4.2 農産物輸出及び輸入(統計)	21
2 生産流通実績	23
2.1 穀 物	25
2.1.1 小 麦	25
2.1.2 とうもろこし	34
2.1.3 ソルゴー	43
2.1.4 大 麦	51
2.1.5 からす麦	57
2.1.6 ライ麦	62
2.1.7 コウリヤン	67
2.1.8 米	70
2.1.9 アルビステ	75

2.2	油脂原料作物	79
	(A) <食油原料作物>	79
2.2.1	ヒマワリ	79
2.2.1.1	ヒマワリ種	79
2.2.1.2	ヒマワリ油	84
2.2.2	大豆	89
2.2.2.1	大豆(豆)	89
2.2.2.2	大豆油	97
2.2.2.3	大豆副産物	101
2.2.3	落花生	103
2.2.3.1	落花生(豆)	103
2.2.3.2	落花生油	107
2.2.3.3	落花生副産物	111
2.2.4	オリーブ	113
2.2.5	その他の食油原料作物	115
	(B) <工業原料油>	115
2.2.6	亜麻	115
2.2.6.1	亜麻種	115
2.2.6.2	亜麻油	120
2.2.6.3	副産物	123
2.2.7	油桐	124
2.3	工業原料作物	126
2.3.1	砂糖きび	126
2.3.2	綿	130
2.3.3	繊維用亜麻	134
2.3.4	フォルミオ	135
2.3.5	ブトウ	136
2.3.6	キャブ	138
2.4	嗜好作物	139
2.4.1	マテ茶	139
2.4.2	茶	141
2.4.3	コーヒー	142
2.4.4	煙草	143
2.5	野菜類	146
2.5.1	えんどう豆	146

2 5.2	レンズ豆	149
2 5.3	じゃがいも	151
2.5.4	ト マ ト	152
2 5 5	にんにく及びたまねぎ	153
2 5 6	マンジョカ	155
2 5 7	ポロット豆	155
2 6	果 樹	156
2 6 1	概 要	156
2.6.2	温帯果樹	158
2 6 2 1	りんご	158
2 6 2 2	梨	159
2 6 2 3	その他	160
2 6 3	柑 橘 類	160
2 6 4	熱帯果実	162
2 6 4 1	バナナ	162
2 6 4 2	パイナップル	164
2 6 4 3	その他の熱帯果実	164
2 7	牧 畜	164
2 7.1	国内牧畜地帯	164
2 7 2	牛	167
2 7 3	羊	176
2 7 4	豚	179
2 7 5	馬	180
2 7 6	鶏	181
2 7.7	山 羊	182
2 7.8	皮革製品	182
2 7.9	蜂 蜜	184
2.8	林 業	184

図 表 索 引

表	1	アルゼンチン国の面積	1
〃	2	アルゼンチンの人口推移	1
〃	3	州別面積及び人口	2
〃	4	気温及び雨量	4
〃	5	主要穀物の生産量比較	13
〃	6	アルゼンチンの農牧場数及び面積	14
〃	7	物価指数	16
〃	8	輸出入構造	17
〃	9	経済圏別貿易収支	18
〃	10	国際収支及び外貨保有高	18
〃	11	外債残高	18
〃	12	1975～80年の生産実績	19
〃	13	主要家畜の屠殺数	20
〃	14	農業生産高推移	20
〃	15	主要農産物の輸出実績	21
〃	16	農牧林業部門の輸出総額に占める比率	22
〃	17	農牧林業部門の輸入総額に占める比率	22
〃	18	小 麦 : 過去10年間の生産実績	25
〃	19	〃 : 州別生産実績	27
〃	20	〃 : 主要生産州の単収比較	27
〃	21	〃 : 世界の生産量と単収比較	29
〃	22	〃 : 小麦及び小麦粉の世界貿易量	30
〃	23	〃 : カンサス穀物市場における価格の推移	31
〃	24	〃 : 輸出推移	31
〃	25	〃 : (パン原料)仕向先国別輸出実績	32
〃	26	〃 : (製麺原料)仕向先国別輸出実績	33
〃	27	〃 : パン原料小麦の価格推移	33
〃	28	とうもろこし : 過去10年間の生産実績	34
〃	29	〃 : 州別生産実績	36
〃	30	〃 : 主要生産州の単収比較	37
〃	31	〃 : 世界の単収	38
〃	32	〃 : 世界の生産需給	39
〃	33	〃 : 輸出実績	40
〃	34	〃 : 仕向先国別輸出実績	41
〃	35	〃 : ノコギリ穀物取引所における平均価格	41
〃	36	〃 : 国内推定消費量	42

表	37	とうもろこし	: 最近の国内価格推移	43
ク	38	ソルゴー	: 過去10年間の生産実績	43
ク	39	ク	: 州別生産実績	45
ク	40	ク	: 世界生産とアルゼンチンの位置	46
ク	41	ク	: 世界貿易量	47
ク	42	ク	: 輸出実績	48
ク	43	ク	: 米国の在庫/需要と輸出価格	48
ク	44	ク	: 米国における需給関係	49
ク	45	ク	: 米国のソルゴ輸出価格推移	49
ク	46	ク	: ロッテルダム市場価格	49
ク	47	ク	: 最近の国内価格推移	50
ク	48	大 麦	: (飼料用)過去10年間の生産実績	51
ク	49	ク	: ク 州別生産実績	52
ク	50	ク	: (ビール原料)過去10年間の生産実績	53
ク	51	ク	: ク 州別生産実績	53
ク	52	ク	: アルゼンチンの輸出実績	54
ク	53	ク	: カナダにおける需給関係	55
ク	54	ク	: カナダWINNIPEG穀物市場価格	55
ク	55	ク	: イ)ビール原料の価格推移 ロ)飼料用の価格推移	56
ク	56	からす麦	: 過去10年間の生産実績	57
ク	57	ク	: 州別生産実績	58
ク	58	ク	: 主要生産州の単収量	59
ク	59	ク	: 世界生産と貿易量	60
ク	60	ク	: アルゼンチンの仕向先国別輸出実績	61
ク	61	ク	: ンカゴ市場価格の推移	61
ク	62	ク	: 最近の国内価格推移	62
ク	63	ライ 麦	: 過去10年間の生産実績	62
ク	64	ク	: 州別生産実績	64
ク	65	ク	: 世界の単収	64
ク	66	ク	: 主要生産州の単収	64
ク	67	ク	: 世界生産の推移	65
ク	68	ク	: カナダWINNIPEG穀物市場価格推移	65
ク	69	ク	: 国内価格推移	66
ク	70	コウリヤノ	: 過去10年間の生産実績	67
ク	71	ク	: 州別生産実績	68
ク	72	ク	: 世界の単収	68
ク	73	ク	: 主要生産州の単収	68
ク	74	ク	: アルゼンチンの輸出実績	69

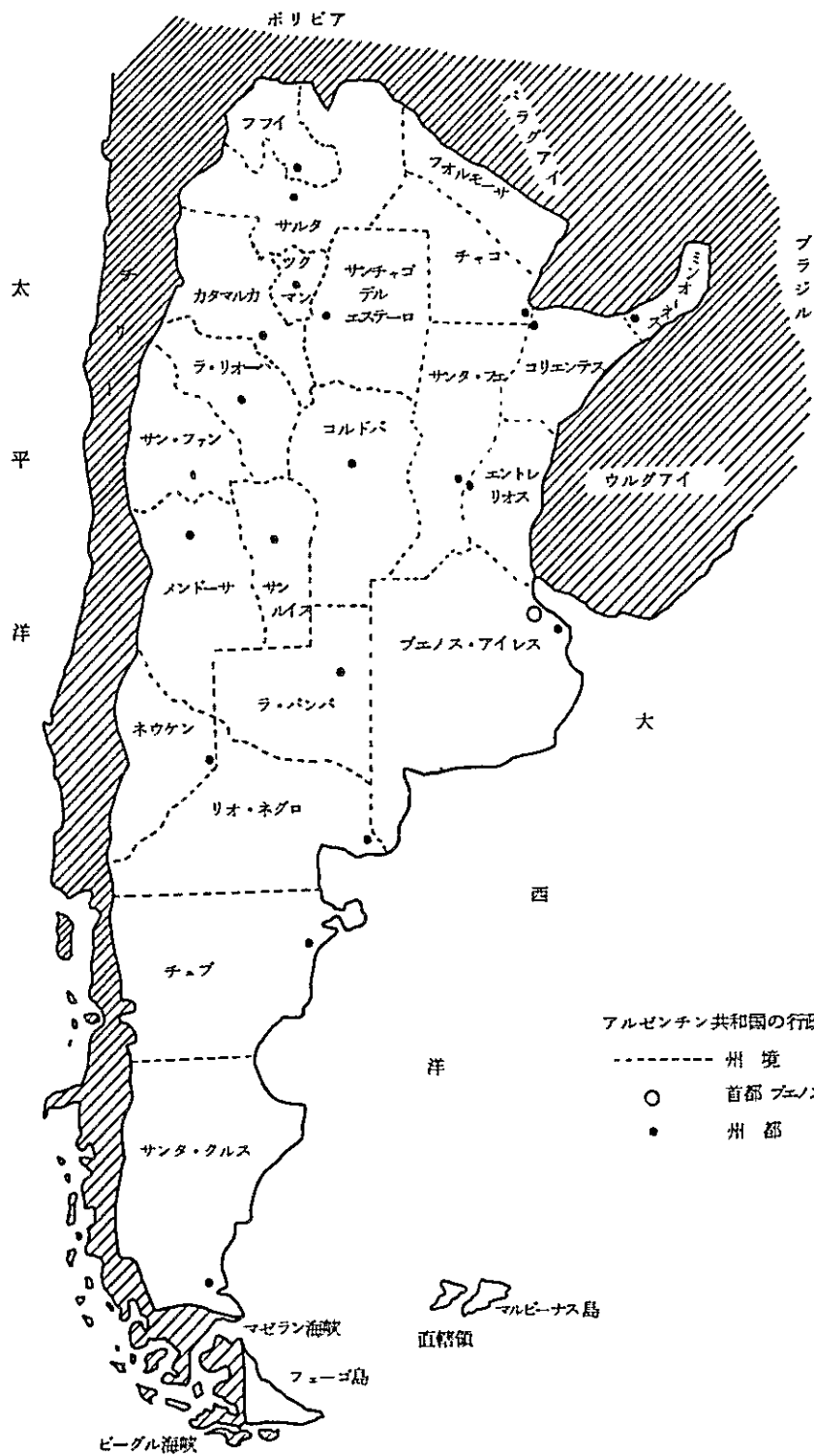
表	75	コウリヤン	・ 国内価格推移	69
ク	76	米	: 過去10年間の生産実績	70
ク	77	ク	: 州別生産実績	71
ク	78	ク	: 全国及び主要生産地帯の単収推移	72
ク	79	ク	: 世界生産国の単収	72
ク	80	ク	: 輸出実績	73
ク	81	ク	: タイの輸出価格	74
ク	82	ク	: 最近6年間の平均価格推移	74
ク	83	ノルビステ	: 過去10年間の生産実績	75
ク	84	ク	: 州別生産実績	76
ク	85	ク	: 国内生産量と輸出量	76
ク	86	ク	: アルゼンチンの輸出実績	77
ク	87	ク	: 国内価格の推移	77
ク	88	ヒマワリ	・ 過去10年間の生産実績	79
ク	89	ク	: 州別生産実績	80
ク	90	ク	: 主要生産州における単収比較	81
ク	91	ク	: 世界の生産	82
ク	92	ク	: 世界の輸出入	82
ク	93	ク	: アルゼンチンの輸出	82
ク	94	ク	: 世界の需給関係	83
ク	95	ク	: ロッテルダム市場価格の推移	83
ク	96	ク	: ヒマワリ油生産推移	84
ク	97	ク	: ク アルゼンチンの輸出	85
ク	98	ク	: ク ロッテルダム市場価格の推移	85
ク	99	ク	: ク 世界の輸出入	86
ク	100	ク	: 国内価格の推移	86
ク	101	ク	: 副産物の生産推移	87
ク	102	ク	: 粉の世界生産	87
ク	103	ク	: 副産物ペレットの輸出実績	88
ク	104	ク	: ク ク 国際価格	88
ク	105	大豆	: 過去10年間の生産実績	89
ク	106	ク	: 州別生産実績	90
ク	107	ク	: 世界の単収とアルゼンチンとの比較	91
ク	108	ク	: 世界の生産推移	92
ク	109	ク	: 最近の世界生産量	92
ク	110	ク	: 世界の需給	94
ク	111	ク	: (豆)の輸出実績	95
ク	112	ク	: シカゴ穀物市場の平均価格の推移	96

表 113	大豆	:	国内価格の推移	97
◇ 114	◇	:	大豆油：国内生産推移	97
◇ 115	◇	:	◇ : 世界の生産	98
◇ 116	◇	:	◇ : 世界の輸出入	98
◇ 117	◇	:	◇ : アルゼンチンの輸出実績	100
◇ 118	◇	:	◇ : シカゴ市場価格	100
◇ 119	◇	:	◇ : 国内市場価格	101
◇ 120	◇	:	副産物の生産推移	101
◇ 121	◇	:	◇ ベレット国際価格	102
◇ 122	落花生	:	過去10年間の生産推移	103
◇ 123	◇	:	州別生産実績	104
◇ 124	◇	:	アルゼンチンと世界の単収比較	105
◇ 125	◇	:	世界の輸出入	105
◇ 126	◇	:	ヨーロッパ市場における価格推移	106
◇ 127	◇	:	アルゼンチンの輸出実績	106
◇ 128	◇	:	(工業原料用)価格推移	107
◇ 129	◇	:	落花生油：生産推移	107
◇ 130	◇	:	◇ : 世界生産とアルゼンチンの位置	108
◇ 131	◇	:	◇ : 世界の輸出入	109
◇ 132	◇	:	◇ : アルゼンチンの輸出	109
◇ 133	◇	:	◇ : ロッテルダム市場価格推移	109
◇ 134	◇	:	◇ : 国内価格推移	110
◇ 135	◇	:	副産物の生産推移	111
◇ 136	◇	:	ベレットの国内価格	111
◇ 137	◇	:	粉の世界生産	112
◇ 138	◇	:	アルゼンチンのベレット輸出	112
◇ 139	◇	:	アルゼンチンの粗輸出	112
◇ 140	オリーブ	:	生産推移	113
◇ 141	◇	:	州別生産実績	114
◇ 142	◇	:	オリーブ油の生産量と輸出量	114
◇ 143	食油	:	生産量	115
◇ 144	亜麻	:	過去10年間の生産実績	115
◇ 145	◇	:	州別生産実績	117
◇ 146	◇	:	主要生産州の単州	118
◇ 147	◇	:	世界生産	118
◇ 148	◇	:	世界の輸出入	119
◇ 149	◇	:	アルゼンチンの輸出	119
◇ 150	◇	:	WINNIPEG穀物市場価格	119

表 151	亜麻	・ 国内市場価格	120
◇ 152	◇	: 亜麻油:生産推移	120
◇ 153	◇	: ◇ :世界の生産	121
◇ 154	◇	: ◇ :世界の輸出入	121
◇ 155	◇	: ◇ :ロッテルダム市場価格	121
◇ 156	◇	: ◇ アルゼンチンの輸出	122
◇ 157	◇	: ◇ :国内価格推移	122
◇ 158	◇	: 副産物の生産量	123
◇ 159	◇	: 副産物:アルゼンチンの輸出	123
◇ 160	◇	: ◇ :粉の世界生産	123
◇ 161	油桐	: 過去10年間の生産実績	124
◇ 162	◇	: 州別生産実績	124
◇ 163	◇	: 桐油:輸出実績	125
◇ 164	◇	: ◇ :国内生産	125
◇ 165	砂糖きび	: 過去10年間の生産実績	126
◇ 166	◇	: 主要生産州の単州	127
◇ 167	◇	: 州別生産実績	127
◇ 168	◇	: 砂糖の需給状況	128
◇ 169	綿	: 過去10年間の生産実績	130
◇ 170	◇	: 州別生産実績	131
◇ 171	◇	: 繊維の輸出実績	132
◇ 172	◇	: 綿実油輸出実績	133
◇ 173	◇	: 粗輸出実績	133
◇ 174	◇	: ペレット輸出実績	133
◇ 175	繊維用亜麻	: 過去10年間の生産推移	134
◇ 176	フォルミオ	: 過去10年間の生産推移	134
◇ 177	ブトウ	: 過去5ヶ年間の生産推移	136
◇ 178	◇	: 州別生産実績	137
◇ 179	◇	: 製品の輸出実績	138
◇ 180	◇	: 製品の品目別輸出内訳	138
◇ 181	ホップ	: 過去10年間の生産実績	138
◇ 182	◇	: 州別生産実績	139
◇ 183	◇	: 単収	139
◇ 184	マテ茶	: 輸出実績	140
◇ 185	茶	: 過去10年間の生産実績	141
◇ 186	◇	: 州別生産実績	141
◇ 187	◇	: 単収の推移	142
◇ 188	◇	: 輸出実績	142

表 189	コ ー ヒ ー	:	輸 入 実 績	143
ク 190	煙 草	:	過 去 10年間の生産推移	143
ク 191	ク	:	主 要 生 産 州 の 単 収	144
ク 192	ク	:	州 別 生 産 実 績	145
ク 193	ク	:	1977年生産の種類別内訳	145
ク 194	ク	:	ア ルゼンチンの輸出実績	146
ク 195	えんどう豆	:	(乾燥豆)過去10年間の生産推移	146
ク 196	ク	:	(青えんどう)	147
ク 197	ク	:	ア ルゼンチンの輸出実績	147
ク 198	ク	:	(乾燥豆)州別生産実績	148
ク 199	ク	:	(青えんどう)ク	148
ク 200	ク	:	国内価格の推移	148
ク 201	レノズ豆	:	過 去 10年間の生産推移	149
ク 202	ク	:	州 別 生 産 実 績	149
ク 203	ク	:	ア ルゼンチンの輸出実績	150
ク 204	ク	:	国内価格の推移	150
ク 205	じゃがいも	:	生産推移	151
ク 206	ト マ ト	:	州 別 生 産 実 績	152
ク 207	ク	:	ア ルゼンチンの輸入	152
ク 208	にんにく	:	過 去 10年間の生産推移	153
ク 209	ク	:	州 別 生 産 実 績	153
ク 210	玉 ね ぎ	:	ク	154
ク 211	にんにく	:	輸 出 実 績	154
ク 212	マンジョカ	:	州 別 生 産 実 績	155
ク 213	ポロト豆	:	ク	155
ク 214	ク	:	輸 出 実 績	156
ク 215	果 実	:	主 要 果 実 の 生 産 推 移	156
ク 216	りんご	:	州 別 生 産 実 績	158
ク 217	ク	:	ア ルゼンチンの輸出実績	159
ク 218	梨	:	州 別 生 産 実 績	159
ク 219	ク	:	ア ルゼンチンの輸出実績	159
ク 220	桃	:	州 別 生 産 実 績	160
ク 221	オレノジ	:	ク	160
ク 222	レ モ ン	:	ク	161
ク 223	マンダリーナ	:	ク	161
ク 224	グレープ・フルーノ	:	ク	162
ク 225	柑 橘	:	主 要 柑 橘 類 の 輸 出 実 績	162
ク 226	パ ナ ナ	:	州 別 生 産 実 績	163

長	227	パナナ	:	輸入実績	163
◇	228	牧畜	:	生産高の地方別比率	166
◇	229	牛	:	保有頭数の推移	167
◇	230	◇	:	州別保有頭数	167
◇	231	◇	:	牛肉生産量, 国内消費及び価格	170
◇	232	◇	:	牛肉の主要生産国と生産量	170
◇	233	◇	:	牛肉の主要輸出国及び輸入国	171
◇	234	◇	:	アルゼンチンの牛肉輸出推移	173
◇	235	◇	:	生きた牛の輸出	173
◇	236	◇	:	牛肉: アルゼンチンの輸出(仕向先別)	174
◇	237	◇	:	牛肉全体の輸出量及び価格推移	174
◇	238	◇	:	牛乳及び加工品の生産量	175
◇	239	◇	:	乳牛数と牛乳生産量	176
◇	240	羊	:	アルゼンチンの保有頭数の推移	176
◇	241	◇	:	世界の羊保有数	176
◇	242	◇	:	国内分布状況	177
◇	243	◇	:	屠殺量	178
◇	244	◇	:	羊肉(生肉)の輸出実績	178
◇	245	◇	:	羊毛生産量	178
◇	246	◇	:	羊毛地域別生産分布	178
◇	247	豚	:	保有頭数	179
◇	248	◇	:	屠殺数	180
◇	249	◇	:	飼育分布	180
◇	250	馬	:	保有頭数の推移	181
◇	251	◇	:	馬肉の輸出推移	181
◇	252	鶏	:	とり類1人当たり消費量	182
◇	253	山羊	:	山羊保有数	183
◇	254	皮	:	なめし皮生産量	183
◇	255	◇	:	なめし皮輸出実績	183
◇	256	◇	:	加工品の輸出	184
◇	257	蜂蜜	:	アルゼンチンの輸出	185
◇	258	木材	:	アルゼンチンの森林面積(A)(B)(C)	184-185
◇	259	◇	:	国家植林計画の目標	188
◇	260	◇	:	植林及び再植林の面積	188



1. 一般概況

1.1 自然環境

1.1.1 アルゼンチン国の位置、国土面積、人口

イ) 位置	北端	ノイ州	南緯	21°46'50"
	南端(大陸内)	フェーゴ島	—	55°58'35"
	東端	ミンオーネス州	西経	53°38'52"
	西端	サンタ・クルス州	—	73°34'32"

南米大陸の最南端に位置し、北部をパラグアイ及びボリビア、東部をウルグアイ及びブラジル、西部をチリーと接している。この中で南方のヒューグル海峡をめぐるチリーとの国境紛争は解決されていない。

ロ) 国土面積

フェーゴ島及びマルビーナス島を含めた南米大陸内の領土は2,791,8千 km^2 でフランスに次ぐ南米第2の面積を有し大陸面積全体の15.5%を占有する。他に南極圏とその周辺の諸島を合わせた969,5 km^2 が領土に加えられる。合計面積は3,761,3 km^2 である。

行政上の区分は22州1直轄領に分かれ、首都のブエノス・アイレス市は行政上連邦区としてブエノス・アイレス州とは切り離して取扱われている。

ハ) 人口

国勢調査による人口発表は1970年までで、その後は推定によっており、79年で26,729千人と見積られている。大陸内面積に対する人口密度は97人/ km^2 で南米大陸の平均値131人(78年FAO統計)を下廻り、人口増加率も1.3%と低い水準である。人口がこの様に稀薄なうえ都市への集中がはげしく連邦首都のブエノス・アイレス市だけで全国の13%、その周辺を含めた大ブエノス・アイレス圏には全人口の30%が集結する。それだけに1 km^2 あたり2人以下の州が7州に及ぶ状態にある。国民の大半はヨーロッパ系によって占められ中でもスペイン及びイタリー系が圧倒的に多い。人口の97%は白人系で南米の他の諸国と異なった人種構成である。18才以上の文盲率は7%で南米諸国の中でもっとも高い教育レベルを有している。

表1 アルゼンチン国の面積

区 分	千 km^2
大陸内	2,758,829
フェーゴ島	21,263
マルビーナス諸島	11,718
南極大陸内領土	964,250
周辺諸島	5,214
領土計	3,761,274

出所: ANUARIO ESTADISTICO
78

表2 アルゼンチンの人口推移

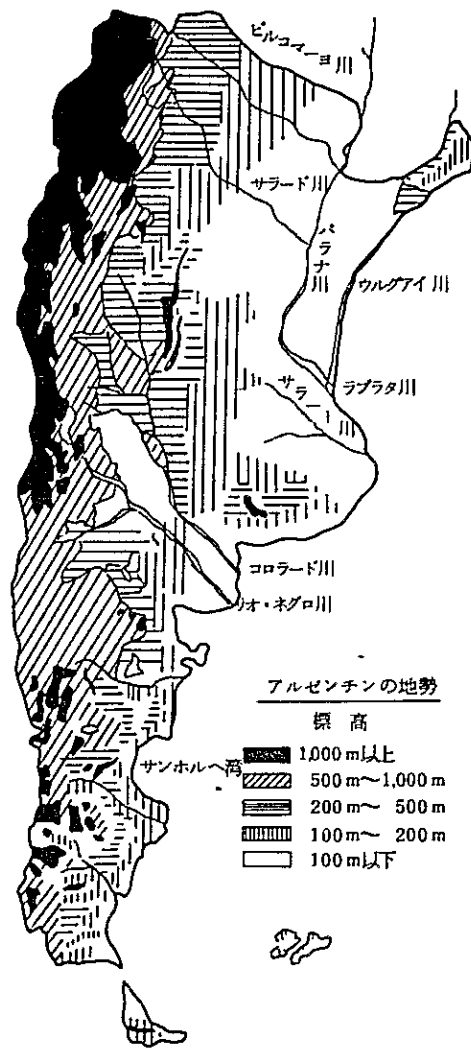
国勢調査年度	人口 1,000人
1869	1,737.1
1895	3,954.9
1914	7,885.2
1947	15,897.1
1960	20,013.8
1970	23,364.4
1979(推定)	26,729.0

出所: ANUARIO ESTADISTICO
78
1979年は INFORMACION
ECONOMICA 80

表3 州別面積及び人口

州別	首都名	面積 1,000km ²	人口(70年)1,000人	密度 人/km ²
連邦首都圏	ブエノス・アイレス	0.2	2,972.5	14,862.5
ブエノス・アイレス	ラ・プラタ	3076	8,774.5	28.5
サンタ・クルス	リオ・ガリエーゴ	2439	84.5	0.3
チュブ	ラウソーン	2247	1899	0.8
リオ・ネグロ	ビエドマ	2030	2626	13
コルドバ	コルドバ	1688	2,060.1	122
サルタ	サルタ	1548	5198	34
メンドーサ	メンドーサ	1508	9731	65
ラ・パンパ	サンタ・ローザ	1434	1720	12
サンチャゴ・デル・エステロ	サンチャゴ・デル・エステロ	1353	4954	37
サンタ・フエ	サンタ・フエ	1330	2,130.6	16.0
カタマルカ	カタマルカ	1010	1723	17
チャコ	レジステンシア	996	5666	57
ネウケン	ネウケン	941	1546	16
ラ・リオハ	ラ・リオハ	897	1362	1.5
コリエンテス	コリエンテス	882	5641	64
サン・フアン	サン・フアン	876	3843	44
エントレ・リオス	パラナ	788	811.7	10.3
サン・ルイス	サン・ルイス	768	1835	24
フォルモーサ	フォルモーサ	721	2341	32
フフイ	サン・サルバドル・デフフイ	532	3024	57
ミシオーオス	ボサダス	298	4430	149
ノクマン	サン・ミゲル・デ・ツクマン	225	7609	338
小計		2,758.9	23,348.7	8.5
南極圏及び近海諸島		1,002.4	157	0.02
合計		3,761.3	23,364.4	6.2

出所: ANUARIO ESTADISTICO 1978



1. 1. 2 地勢、河川

南米大陸の最高峰アコンカグア山(6,959米)を含む南部アンデス山脈とラ・プラタ川及び大西洋に面した大平原によって構成される。この中でアンデス山脈の影響地帯が乾燥地帯に傾し、平原が湿潤地帯その中間が半乾燥地帯となる。それぞれの国土に占める比率は24%、15%及び61%である。

主要河川としてはラ・プラタ川を形成するパラナ川(1,800km)、ウルグアイ川(1,100km)、北サラード川(2,000km)、ベルメーホ・テウコ川(1,000km)、ビルコマーヨ川(850km)のほかコロラド川(860km)、ネグロ川(635km)、ブエノス・アイレス・サラード川(700km)等があり、その周辺に平原を形成する。これら河川はとくに乾燥地帯において灌漑用水として重要な役割を果たしている。

1. 1. 3 気 象

表4 気温及び降雨(1977年)

地 区 (気象台所在地)	位 置		標 高 m	気 温 ℃		降 雨 量 年 間 mm
	南緯	西経		1月	6月	
ラ ・ キ ア カ	22°06'	65°36'	3,459	136	54	405
サ ル タ	24°51'	65°29'	1,220	218	106	732
ノ ク マ ン	26°50'	65°12'	420	250	127	1,617
ボ サ ー ダ ス	27°25'	55°56'	133	268	195	1,699
コ リ エ ン テ	27°27'	58°46'	62	268	182	1,060
サンチャゴ・デル・エステロ	27°46'	64°18'	199	267	134	572
カ タ マ ル カ	28°20'	65°46'	434	274	125	647
ラ ・ リ オ ー ハ	29°23'	63°49'	430	268	116	465
コ ル ド バ	31°19'	64°13'	474	234	106	912
メ ノ ド ー サ	32°50'	68°47'	702	249	82	323
ブエノス・アイレス	34°35'	53°29'	25	251	113	1,080
サンタ・ローザ	36°34'	64°16'	189	239	72	721
パ リ ロ ー チ エ	41°09'	71°10'	845	141	28	983
リ オ ・ ガ リ エ ゴ	51°40'	69°16'	19	131	07	232

出所：ANUARIO ESTADISTICO78'

アンデス山脈の高原とパンパの平原を持ち、南北約3700km、東西1700kmにわたるアルゼンチンの気象は地方別にそれぞれ異なり、北部の熱帯性気候より中央部の温帯性気候、南部の寒冷な気候へと変化する。国内主要部の気象統計は上表の通りであるが、地方別には次の通り区分される。

- イ 東北地方 年間平均気温：18℃～22℃ 軽い降雪がある。
年間雨量：東部2000mm、西部700mm、降雪は10月と春に多。
- ロ 西北地方 年間平均気温：18℃～22℃
年間雨量・東部600mm、西部500mm、夏に雨が多いモンスーン型、アコンキーハ山脈側だけ異なり、1,000mm以上となる。典型的な亜熱帯性気候で夏は暑く豪雨があるが、気温の高さに比して不十分であり農耕には灌漑に必要とする。
- ハ パンパ地方 年間平均気温：夏20℃以上、冬10℃以下、夏が短かく秋冬春を合わせた中間的気温が年間を支配する。
年間雨量：東部950mm、西部550mm
- ニ 西部乾燥、半乾燥地帯 年間雨量：東部700mm、西部100mm
年間平均気温：ラ・オリーハ及びカタマルカ州では20℃以上、日光が強く完全な乾燥型で冬は短い。メントーサ、リオ・ネグロ、中央パンパ及びサン・ルイス州の山岳地帯では冬は比較的寒く頻繁な降雪があり、雨量は農耕に必要とする量の5分の1程度。日光が強く乾燥がひどい。
- ホ 南部地方 年間平均気温：夏21℃(北部)～12℃(南部)、冬7℃(北部)～0.8℃(南部)、南部では南極圏の影響によって春35℃に上ることもある。

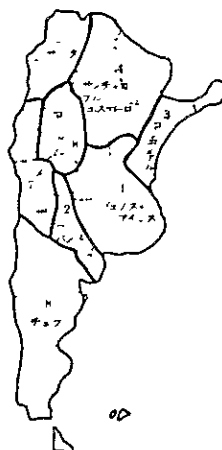
年間雨量：100～150mm，地区によって300mm。

1.2 地方区分と各地域の概要

連邦首都を含む2州と1連邦直轄領より成るアルゼンチンは経済地理上共通した特性を持つ各地方に分類される。分類方法は国内を4地方に大分類したもの、6地方に分類したもの、8地方に細分したもの等種々あるが本報告書では農業実績との関連から8地方に分類した方法について概説する。

- 1) パンパ地方
- 2) エステッパ地方
- 3) 東北地方(別名メソポタミア地方)
- 4) チャコ地方
- 5) 西北地方
- 6) パンペアーナ山脈地方
- 7) クーロ地方
- 8) パタゴニア地方

各地方の概要は次の通りである。



1.2.1 パンパ地方

ブエノス・アイレス州の大部分、サンタ・フェ及びコルドバ州の約半分、ラ・ハンパ州及びサン・ルイス州の一部を含む約63百万ヘクタールの大平原で国土面積の約20%を占め、1970年のセンサスによると国内人口の53%が集中する。パンパはケチュア語で“木のない平原”を意味するが、樹木の樹生がなくほとんど起伏のない一望千里の大平原はアンデス山脈、アマゾンの大森林と共に南米大陸を象徴する大自然の無限の広さを感じさせる地帯の1つである。地域内には首都ブエノス・アイレス市を始め、国内有数の大消費都市を含むほか輸出港に近く国内鉄道全線の55%、国内工業の80%、農業生産高の75%がここに集中する。

農業生産面では主要穀物がすべて全国生産量の80%以上を占め、油脂原料作物においても大豆、落花生の80%以上、ヒマワリの70%を産出する。果実生産の比重は低いが野菜類は大消費都市を控えるだけに大きく、全体的に全国生産の50%、中でも遅蒔き及びや遅蒔きのじゃがいもにおいて90%以上の生産が行われている。

穀物と共にパンパを代表する牧畜面では飼料アルファルファ種子の90～95%がこの地方に向けられているほか自然牧草に恵まれ、牛の68%、羊の45%、豚の82%、馬の大半がここに集中する。

地域内の主要消費市場としては次の都市がある。

ブエノス・アイレス市 BUENOS AIRES : 1970年のセンサスによる人口は2,972.5千人、近郊を含めた大ブエノス圏の人口は844万人に及び南米ではブラジルの大サンパウロ圏、大リオデジャネイロ圏と並ぶ一大消費市場を形成する。首都として司法、立法、行政の中心であるばかりでなく教育、文化面では西語諸国の中でも最も重要な都市であり、年間3千万ドル以上の消費をラテン・アメリカ諸国へ供給する文化の中心地である。工業面では全国工場数の40%、全国工場労働人口の50%が集中する。

輸送面ではブエノス市を中心とした交通網が放射状に奥地に向かって伸びており、これらの距離数はブエノス市を0kmの起点として表現される。

道幅の広さでは世界1といわれる14.4米幅のスーペー・デ・ソリーオ大通りを中心とした基盤目の整然とした町並みとそこに処々と建ち並ぶ厚い建物、アルゼンチンタンゴを生んだ下町の家並み、1920年代に早くも建設された地下鉄等

は新興国ブラジルのサン・パウロ市やリオ市にみられる近代的高層ビルや数年前に開通したばかりのモダンな地下鉄とは対象的な古さを感じさせ南米のハリートと呼ばれた今世紀はじめの繁栄の過去を彷彿とさせる都市である。

ロザリオ市(サンタ・フェ州)・ブエノス・アイレス市より北に約300kmのパラナ州沿岸の都市で、川岸が十分の水深を持つ良港やコルトバ、ツクマンに通ずる鉄道を持つため穀物類を始めとする農産物の集散地として発展した都市であり、70年センサスによる人口はコルドバと並ぶ798,3千人と有する。その立地条件により農産加工業が盛んであり、サンタ・フェ州内の農産物に限らずノクマン州やサンタ州産の原料による農産工場、ミシオーネス州を産地とするマテ茶の精製工場などもあるほか石油の精製所も有している。

コルドバ市(コルトバ州)：70年センサスによる人口は798,7千人でロザリオ市をわずかに上回る。国内奥地に通ずる交通の要所であり、とくに北部、東北部及び東部の鉄道がここに集結し、ロザリオ～ブエノス市へと連絡される自動車工業が盛んな都市である他、多くの大学を集める文教都市でもある。

ラ・フタ市(ブエノス・アイレス州)：1880年ブエノス・アイレス市が連邦首都に指定されて以降のブエノス・アイレス州の州都である。国立大学を含む教育の中心地であり、冷凍、造船等の工業もあるほか、最近では製鉄所や石油コンビナートの建設も行われている。人口は(70年センサス)479千人である。

サンタ・フェ市(サンタ・フェ州)：人口312千人(70年センサス)、パラナ川にサンタ・フェ港を持ち、対岸のハラナ市(エントレリオス州々郡)との間にはアルゼンチン人が自慢の種とする川底トンネル(エルナンダリアス・トンネル、HERNANAARIAS)がある。このトンネルの開通により従来パラナ川とウルグアイ川に挟まれた陸の孤島コリエンテス州の農産物が陸送によってサンタ・フェ港に集荷されるようになり、コリエンテス州の発展を促すとともにサンタ・フェ市の重要性も高めた。

マール・デル・プラタ市(ブエノス・アイレス州)：人口30万の海岸都市で国内最大の漁港を持ち、観光地としても有名な都市である。国立のカジノもあり、夏場には有名な海水浴場集まる観光客で市の人口は1時的にブエノス・アイレス市に次ぐ120万人に膨脹する。隣国ウルグアイのブンタ・デルエステと共に南大西洋岸では世界的な避暑地であり、南米のモンテ・カルロと呼ばれている。穀物類の輸出港としても重要であり、水産加工も盛んである。

バイア・フランカ(ブエノス・アイレス州)：ブエノス州南部及び西部とラ・パンパ州で生産される農産物の輸出港で、海軍基地がある。石油コンビナートがありネウケン州やサンタ・クルス州南部の石油地帯との間にパイプラインが設置されている。

1.2.2 エステッパ地方

ラ・パンパ州の3分の2、サン・ルイス州の3分の1、リオ・ネグロ東北部及びブエノス・アイレス州の一部を包含する約1,280万ヘクタールの地帯を指す。この地帯は別名パンパ・セカ(乾いたパンパ地方)と呼ばれる乾燥及び半乾燥地帯で、河川流域の灌漑地帯を除くと農耕には適さず地域内の人口も7万弱と少い。わずかに点在する灌漑地帯は“地域内のオアシス地帯”と呼ばれるコロラート川流域の一部でコロニヤ・ヘインテ・シノコ・デ・マヨ、リオ・コロラド、ペートル・ルーロなどの集団地がある。しかしながら農業生産は全般的に低調であり、住民の大半は羊及び山羊の飼育を生活の糧としている。

1.2.3 メソポタミア地方(東北地方)

東北地方のミシオーネス州、コリエンテス州及びエントレ・リオス州の全体を合わせてメソポタミアという名称が付けられている。面積は1,960万ヘクタールで国土の71%にあたり、70年センサスでは180万の人口であった。(全国の87%)パラナ川とウルグアイ川に囲まれたこの地方、とくにミシオーネス州には隣国のパラグアイ及びブラジルよりの移住

者が多く定住している。

地域内の地形はミノオネス州の岩石を含む高台よりラ・プラタ河口のデルタ地帯に向って緯度8度毎に低下していくため気候もミノオネス北部の亜熱帯型よりパンパ中央部の温帯型へと変化する。

(ミノオネス地方)：北部の森林に覆われるミノオネス地方は昔は自主マテ茶の採集程度の産業しか持たなかったが今世紀初めブラジルより転住したドイツ系移民によって農業の開発が行われ、マテ茶のプランテーションをはじめ、マンジョカ、油桐、煙草、柑橘類、茶等の栽培が拡大し、他にコーヒー、大豆、バナナ等の栽培も行われている。この地方ではパラグアイ国エンカルナンオン市のパラナ川対岸にあるミノオネス州の首都ボサダス(10万人)、中央部にあるオペラ市(58千人)、10キロメートルにわたるわずか1本の道路より成る線状の町エルトラード等が重要都市である。また最北端にはブラジル、パラグアイ、アルゼンチンをまたぐ世界最大級のイグアスの滝があり、アルゼンチン領内ではベルト・イグアスより遠達することが出来る。

(中間地方)：ミノオネス南部とラ・プラタ河口のデルタ地帯の中間にあり、クチャーリヤス地方(LAS CUCHILLAS)及びエステロス地方(ESTEROS)に分けられる。ここもブラジルより転住したドイツ系移民が農業生産の拡大に貢献した地域であるが、近年来パンパ地方の都市(とくにロザリオ市及びブエノス・アイレス市)への流出が多く1960～70年間に人口増加率はわずか0.7%の低い成長に止つた。

自然条件がパンパ地方の中央部と類似しているため地域内の経済活動は穀物と牧畜を組合わせた農業形態が支配的である。とくに、この地域に含まれるコリエンテス州では亜麻の生産が広く行われており80年度には植付面積において全国1位、生産量ではブエノス州に次ぐ2位の規模であった。

アルゼンチンでは小麦の栽培は南緯31度以南で可能であるといわれている。米の生産では次のエントレリオス州と合わせ全米生産量の80%近くを産出する。また地域の気象は柑橘類の栽培に最適な条件下にあり、中でもコンコルディア地区は国内最大のマンダリーナ生産地でミカンのジュース工場も有している。このほか煙草、茶、マンジョカの生産も大きい。牧畜面ではエントレ・リオス州の中央部がパンパと同様の条件下にあり、すぐれた自然牧草が豊富で牧牛飼育が広く行われている。北部は亜熱性気候のため気温が高く牛の疾病が増えやすく肉の質が落ちるためウルグアイ川河畔の町コロロンに設置されている肉のエッセンス工場に向けられる。コリエンテス州南部の三角地帯ではヘアーフォード種、アバーデン・アングス種やこれらとセプーの交配牛の飼育の他、ロミーマッシュ、コリエダール種等の羊飼育も盛んである。養鶏部門では肉鶏、卵とも生産が大きい。

地下資源としてはセメント原料となる石灰岩や石膏を産出するほか川底よりの砂の採集も盛んである。

地域内の輸送インフラについては水量の多い河川、起伏の多い地形や高地を覆う森林のため道路建設が遅れ長年にわたって地域の経済発展を阻外してきた。パラナ川とウルグアイ川に挟まれた陸の孤島であったこの地域が対岸に陸路で連絡されるようになったのは1936年にパソ・デ・ロス・リーブレスとブラジルのウルグアイヤーナ市の間にウルグアイ川を挟んで建設された橋を始めとし、1960年代に完成した3ヶ所の橋及び前述のパラナ市とサンタ・フェ市間を結ぶトンネルの建設以後である。

主要都市としてはエントレ・リオス州々都パラナ市(70年センサスによる人口は128千人)のほかパラナ川沿線にはディアマンテ、ラ・パス、エスキーナ等があり、またウルグアイ川沿線にはモンテ・カールロス、コンコルディア、コロロン、グアレグアイチュー等がある。

1.2.4 チャコ地方

チャコ州及びフォルモサ州全体、サルタ、ノクマン、サンチャゴ・デル・エステーロ、及びサンタ・フェ州の一部を包含する約4,400万ヘクタールの地帯で全国人口の7%にあたる約170万人を有する。

チャコとはケチュア語で“狩猟の場所”を意味し、スペインの統治時代は未開のインディオが森林に豊富に居た野生の動物を狩猟しながら住んでいたと記録されている。インディオ達の“狩猟の場所”はやがて“森林資源の場所”となり、国内でも数少ない熱帯農業地帯へと変っていく。この地帯は更に東部と西部に分類される。

(チャコ東部地方)：チャコ州及びフォルモサ州の東部地方とサンタ・フェ州北部を含む地帯を指す。この地帯の経済活動は植民の進展につれて進んでおり、パラグアイ国とこの地方にしかないといわれるタンニンの原料ケブラーチョ・コロラード・チャケーニョ (QUEBRACHO COLORADO CHAQUEÑO ~タンニンの含有がもつとも多い種類)の採集が植民のきっかけとなり、タンニン工場も設置されたが、原料の木材が切り尽されたあと生産までに長期を要する植林を行うこともなく、やがて原料不足から工場は閉鎖されて経済活動の第1段階を終る。第2の経済活動は今世紀の初めに開始され、森林内に点在するカンボと呼ばれる平原や、ケブラーチョ採集のために伏閉された土地を利用して農業開発が進められた。最初に導入された作物は綿であったが自然条件が合致して生産は拡大し、今日にいたるまで国内最大の生産地として継続している。後日綿のモノカルチャー形態は次第に多様化されチャコにおける柑橘、フォルモサにおけるバナナが新たに栽培されるようになり綿と共に同地方を代表する作物となり今日にいたっている。その他、小麦、とうもろこし、飼料用ソルゴー、ヒマワリ、マンジョカ、砂糖キビ、野菜類の生産も行われている。牧畜面ではゼブー牛が導入されて以来、ヨーロッパ系のアハーテン・アングス種との交配による新種が同地方に適した品種として飼育されている。ほかに河川を利用した漁業も行われ、工業面ではタンニン工場のほか綿綿、製糸工場、製粉、搾油工場などがある。

地域内を流れるパラナ川及びパラグアイ川は最も重要な輸送手段として昔から利用されてきたが、今日でもサルタ州に産出する石油の重要な輸送路である。鉄道は同地の綿栽培の開始と時を同じくして建設されており、チャコとパンパを連結するレジステンノア—サンタ・フェ間鉄道、パラノケラス市とメタン市間及びフォルモサ市とオラノ市を結ぶチャコ横断鉄道がある。道路はロザリオ市を起点とする国道11号がパラナ川に平行して走っており、ほかにサルタ州に通ずるトランス・チャコ (チャコ横断道路)の建設が計画されている。チャコ地方とメソポタミア地方はコリエノテス市とパラノケラス市を結ぶヘオラル・ベルグラーノ橋によって連結されている。

(チャコ西部地方)：チャコ西部地方と東部地方は、ハノハ地方とエステッパ地方の間にみられると同様に気象条件が明確に区別されるのを特徴とする。とくに西部の降雨量不足が両者の環境を完全にかえる。

この地方はチャコ、フォルモサ及びサルタ州の1部を含む地帯で約1千万ヘクタールの面積に及ぶが人口は稀薄で、各10人に8人の割合といわれ大きな都市もなく国内の他の地域と隔離された場所であり、住民の中に多くのインディオを含む。特記すべき農業活動もなく自給用の農耕が小規模に行われているに過ぎない。

従来植民が進まなかったのは東部地方のように最初の植民を促したケブラーチョ・コロラートが少なく、次の綿栽培にも適さなかったためであった。又広大な森林には杉を始めとする有用材もあるか、現地に到達するのが困難な地帯 (E.L. IMPENETRABLE)であるため開発されていない。

交通は既存のチャコ横断鉄道と今後予定されているトランス・チャコ道路の唯一のよりどころとする。

(サンチャコ・デル・エステーロ州の河川交錯地帯)：トウルセ川 (RIO DULCE) 及びサラード川 (RIO SALADO) によって形成される森林のない地帯でサンチャコ・デル・エステーロ州を北西より南東に向う帯状の地帯を指す。この地方が特別に取扱われるのはチャコ地方の中で独特の自然条件を持つためである。

豊富な水量の河川と森林周辺の平野によってすぐれた自然環境を持つ地域のため、スペイン人侵入以前よりケチュア族による村落形成のあとがあったと伝えられており、現在にいたるまで低地の洪水のあとに播種を行う彼らの農耕方法がひきつがれているという。地名にもケチュア語を由来とするアニャノヤ (AÑATUYA)をはじめ、その影響を受けた名称が多い。

この地方に侵入したスペイン人は (1555年) トウルセ川の周辺を適当な定着場所として村落を作るが、この村落が

現在のサンチャゴ・デル・エステーロ市でアルゼンチンにおける初期の村落の1つとされている。したがってこの地方の人口は他のチャコ地方に比して大きく、チャコ全体の15%にすぎない面積に57%の人口が集中している。同地方の産業は農業が主体であり、とくに熱帯果実と野菜類に適した条件を有している。緯度の差からパンパ地方の大消費都市へ端境期に出荷を行い得る強みを持ち、かぼちゃ、玉ねぎ、さつまいも、等の他、メロン、西瓜、柑橘類の栽培も行われている。牧畜面は森林のとぎれた場所で行われる程度であり、林業面ではタンニン度の少ないケブラチョ・コロラド・サンチャゲーニョの採集と木材の利用が行われ、工業面では同地方より産出する石灰岩を利用したセメント工場がある他見るべきものはない。

河川の水量が豊富なため水力発電と灌漑の可能性は大きく、オント川には地元の需要を満たす水力発電所がある。

交通は2本の鉄道と国道の他、河川輸送も重要な輸送手段となっている。

地域内の都市としては前述のサンチャゴ・デル・エステーロ市(70年センサスでは12万人)、ラ・バンダ(LA BANDA 38千人)、ラス・テルマス(LAS TERMAS)、ファリアス(FARIAS)、アニャノヤ(ANATUYA)等がある。

1. 2. 5 西北部地方

フアイ州の全体カタマルカ、サルタ及びツクマン州の一部で面積は約2,100万ヘクタール(アルゼンチンの7.4%)である。地域内にはそれぞれ異なった面もあるが住民の間には他の地域とは異なった独特の共通した点をもっている。この共通性はスペイン以前より地域内でインカの道路を利用して相互の交流が行われたためであろうと推測されている。この地方はさらに高原地帯、中腹溪谷地帯、アンデス山麓地帯及び低地溪谷に分類される。

(高原地方)：北西部の先端を含むもつとも標高の高い部分でプーナ・アルゼンティーナ(PUNA ARGENTINA アルゼンチン高原)と呼ばれる。プーナという言葉は近隣のチリー及びゴリビアにおいても用いられており、チリーではプーナ・デ・アタカマ(PUNA DE ATACAMA)、ゴリビアではプーナ又はアルティプラノ(ALTIPLANO高原の意味)と呼ばれている。

この地帯は次のクエヨ地方と共に国内のアンデス地帯で海抜が高く空気は乾燥して寒く急激な気温の変化がある上、土地は硬せており、牧畜の可能性も少いところから経済活動はごく制限され、人口も少く住民の生活水準も低い。フアイ、サルタ及びカタマルカ州内の一部を含むアンデス地帯の人口は平均10km²にわずか16人という稀薄さであるが、中でもカタマルカ州の高原だけに限ると極度の乾燥のため人口密度は100km²に対しわずか2人という無人地帯となる。

農耕活動としてはわずかながらじゃがいもと豆の栽培が行われている程度で地元の消費を満たすのみに止っている。低地溪谷では羊、山羊及び高山動物のリャーマが飼育されている。以前は高級毛皮を産するチンチーラ(アンデス特有の小動物)が捕獲されていたが無差別な捕獲が続いたため現在ではほとんど姿を消したといわれる。

地下資源としては耐熱ガラスの原料となる硼砂(BORAX)のほか鉛、硫黄、銀、鉛などアンデス全般に産出する鉱物がある。

地域内にはウマウアカ(HUMAHUACA)溪谷を通りゴリビアとの国境にいたる鉄道と、トーロ溪谷(TORO)を通りチリー国境にいたる2本の鉄道とこれに平行した道路がある。

(中腹溪谷地帯)：インカがその文化伝播のために用いた道路(CAMINO DEL INCAS)があることや気象条件が高原に比してすぐれていることなどのために農業も比較的発達しており、インカ農法を受け継いだ灌漑に現代の技術を加えたじゃがいも、豆、果樹、野菜の栽培のほか羊、山羊の飼育も行われている。中でも古代ウマウアカ(CHUMAHUACA)文明の遺跡を止めるウマウアカ溪谷とトーロ溪谷が重要な地区とされる。

地下資源としては鉄及びウランを産出しサパラーバルパル(ZAPAJA - PALPALÁ)の製鉄所は西北地方の重工業の中心的存在であり、高炉に使用するため近隣地区にユーカリの植林が行われている。

工業としては製糖、ぶどう酒、煙草、繊維、セメント等の工場がある。また地域内にはサルタ州のコラリット川 (RIO CORRALITO) を利用した水力発電所があり、同じくサルタ州内のフラメント川 (RIO JURAMENTO) を利用したダムは川南部地方の灌漑地帯を4万ヘクタールに拡大させ得る可能性を持つといわれる。

この地域内ではサルタの州都サルタ市 (70年センサス人口176千人) 及びファイ州都のサン・サルバドル・デ・ファイ市 (SAN SALVADOR DE JUJUY 人口82千人) が重要な都市である。

(アンデス山麓地帯) : 溪谷地帯よりチャコ平原にいたる部分をいい、ツクマン州の一部を包含する。この地域内の森林地帯は後述 (林業の項参照) の有用材を含むほか多量の雨と豊富な灌漑用水及び熱帯性の気象条件下にあるため、砂糖キビの栽培に適しており今日にいたるまで国内最大の砂糖キビ生産地となっている。また地域内のサンフランシスコ川上流で行われている熱帯果実栽培はアルゼンチンの中でもとくに注目されており、その原産地LEDESMA, CALLEGUA, CAIMANCITO, YUTO 等の名前はパンハ地方の消費市場にも知れ渡っているといわれる。以上のほかこの地帯は隣国ボリビアのアンデス中腹にあるユンガス (YUNGAS) 地方に自然条件が類似しており、ユンガスでは良質のコーヒーを産するところからここでもコーヒー生産が可能であるとの判断のもとに各種の研究が進められている。

この地方は石油の埋蔵地帯でもありサンフランシスコ川上流平原のマドレーネス (MADRE JONES), カンボ・ドゥラン (CAMPO DURAN), タルタガル (TARTAGAL) 及びカイマンシト (CAIMANCITO) 等の生産地帯を有している。これらサルタ石油地帯は国内生産の34%を産出するに過ぎないが、他に天然ガスの埋蔵も豊富であり、カンボ・ドゥランからブエノス・アイレス間には1740kmのパイプ・ラインが設置されている。

地方の主要都市としては次のものがあげられる。ソクマン市 (TUCUMAN 人口363千人 (70年センサス)), コンセプション市 (CONCEPCION 人口20千人), タフィ・ビエーホ市 (TAFI VIEJO 21千人)。

1. 2. 6 パンペアーナ地方

カタマルカ、ラ・リオハ、サン・ルイス、ノクマン、サンチャゴ・デル・エステーロ及びコルドバ州の一部を含む地帯約2,740万ヘクタールで国土の89%を占める地帯を指す。人口は70年センサスによると約120万人で全国の52%に相当する。

全般的に乾燥地帯のため村落は灌漑用水のある地域に限られるため広大な面積に対する人口密度は西北地方と同じ水準で10%相当り50人程度と低い。

農業面では耐乾性の作物や灌漑による栽培に限られ、ブドウ、オリーブ、桃等の栽培が盛んである。牧畜面では全般に粗放で少量の牛、山羊のほか高山動物のリャマ、アルパカが飼育されている程度である。工業面では地域内の農産物を原料とするフトウ酒や乾燥果実の製造がある。

低水準にある農業生産に比して地下資源は豊富であり、その開発は地域の経済を支える重要な支柱となっている。現在採掘されている鉱物は、金、銅、タングステン、ウラン、マンガンその他、大理石、石灰岩、岩塩等であるが、中でも金は可成り古くより採掘されており、抗道が深まるにつれ経済的な採掘は困難になってきたといわれている。

地域内にはカタマルカ市 (CATAMARCA 人口56.9千人), サン・ルイス市 (SAN LUIZ 人口5万人), ラ・リオハ (LA RIOJA 人口35千人), チレネト市 (CHILECITO 人口12千人) 等の都市がある。

1. 2. 7 クーヨ地方

サン・ファン及びメントーサ州の大半、ラ・リオハ州の一部を含む2,320万ヘクタールの地帯で136万人 (70年センサス) の人口を有する。

地域内はアンデス山岳地帯と東部溪谷地帯に大別される。前者は標高が高く岩石によって形成される乾燥地帯であり、後

者は同じく乾燥地帯ではあるがアンデス山脈を源流とする河川によって灌漑を可能とするため、ブドウを中心としたアルゼンチンでも特有の農耕地帯を形成する。

農業面では主要産物のブドウの他、オリーブ、リンゴ、梨、桃、いちじく等があり、野菜類ではたまきのじゃがいも及びトマト、飼料作物のアルファルファの栽培も盛んである。

地域内の林業は上記のブドウを中心とする果樹栽培を密接な関連を持っており、ブドウの支柱とする木材、出荷用箱の材料としてポプラの植林が盛んである。

牧畜面ではメンドーサ市南方の灌木の多い平原地帯で山羊の粗放飼育が小規模に行われている他、農耕に不適な地帯を利用した牛、羊の飼育が小規模に行われている。

工業面ではブドウを原料とする加工業を代表とする他、サン・ラファエル市を中心とした果実類及び野菜類の加工、メンドーサ地区で生産される大麦を原料とするビール製造及び製材、製箱等の農産加工業の他石油の精製、石油化学工業、ウラノの処理工場、特殊鋼材の製鉄所、繊維、電気電子製品工業等がある。

地域内には地下資源が豊富であり、中でも石油の存在が地域の重要性を高めている。メンドーサ盆地では前世紀より石油の存在が確認されていたが、本格的な生産に入ったのは1926年から現時点で国内生産の約28%を占めており、この石油を精製するルハン・デ・クーヨ(LUJAN DE CUYO)精製所は国内でも有数の規模である。天然ガスの埋蔵も豊富であり、ブエノス・アイレスに通ずる輸送管の建設が計画されている。これら石油、ガスのほか石灰岩、鉄、鉛、銅、タングステン、マンガン及びウラノの埋蔵もみらるべきものがある。

以上の農業及び工業を中心とするクーヨ地方の経済活動は1人当たりの生産及び消費水準でパンパ地方に次ぐ重要性を持つ。

地域内の主要都市としてはメンドーサ市(MENDOZA : 70年センサス人口124千人)、サン・ファン市(SAN JUAN 人口112千人)、サン・ラファエル市(SAN RAFAEL)、ヘネラル・アルベアル(GENERAL ALVEAR)等がある。

1.2.8 パタゴニア地方

アルゼンチン南部のネウケン、リオ・ネグロ及びサンタ・クルス州、フェーゴ島直轄領の全体及びメンドーサ州南端の一部を含む地帯で国土の28.5%を占める7,900万ヘクタールの面積を有する。70年センサスによる人口は全国の25%に当たる61万人である。面積が広大な上、長期にわたって植民が進まなかったため、人口密度はエステッパ地方に次いで低く、10戸当たり7人にすぎない。植民は前世紀の後半より開始されており、主に西部高台、河川流域、石油を中心とした工業地区、北部高原の観光地帯及び大西洋岸の港に集中する。

地域の経済活動は全国的、というよりも世界的といえる規模に達した羊の粗放飼育と石油を中心とする地下資源の採掘部門によって代表される。

農牧林業部門では上述の羊の他に牛の飼育も行われているが規模は小さく、農耕面積は地域全体の27%に相当する15万ヘクタールが河川流域に点在する。中でも最も重要な農業地帯はネグロ川流域で豊富な水量によって乾燥した気象を克服し、8万ヘクタールに及ぶ灌漑農業が行われているがこの地帯は日照時間が長く、又ポプラによる防風林を形成出来るなど、果樹栽培にも適しており、とくにリンゴと梨の栽培が大きい。その他、ネグロ川流域には劣るがチュブ川流域盆地も同地方では重要な灌漑農業地帯でアルファルファの栽培が普及している。

以上のほか地域内の灌漑地帯としてはMAIPU平野、NAHUEL HUAPI盆地、ホップの代表的生産地 EL BOLSON小麦の栽培が行われているESQUEL - TRAVELIN 地区等がある。

林業面ではアンデス山脈のアルゼンチン側に南緯37度以南よりフェーゴ島に続く森林があり、地域内最北部のネウケン

州ではこれらの木材が多く利用されている。森林木材の経済的価値は南下するに従い減少する。

以上のほか大西洋岸の大陸棚には漁類や甲殻類が豊富なため漁業が発達しており、SAN ANTONIO OESTE, PUERTO MADRYN, RAWSON, COMODORO RIVADAVIA, DESEADO, SAN JULIAN, 及び RIO GALLEGGO 等の漁港を有している。

工業面では主に羊肉の冷凍処理を行う工場や果実、野菜の缶詰、水産加工工場のほか各種鉱物の精製、石油化学工業などがある。

地下資源では石油及び石炭がもつとも重要である。石油については1907年まで国内西北部地方サルタ地区とクエロ地方のメンドーサ地区に限られていたが同年大西洋沿岸のサン・ホルヘ湾(GOLFO DE SAN JORGE)に面するチュブ州コモドロー・リバダビア(COMODORO RIVADAVIA)で地下水の非戸掘削中に新しい石油鉱脈が発見されて以来、この地方が国内でもつとも重要な石油地帯となっており、現在では石油国内生産の44%を産出している。パタゴニア地方にはこのほかネウケン州を中心としてリオ・ネグロ、ラ・オリバー及びメンドーサ州南部にまたがる CUENCA NEUQUINA と呼ばれる地帯(現在国内石油生産量の22%を産し、サン・ホルヘ湾石油地帯に次ぐ)とマゼラン海峡を挟んでサンタ・クルス州南部とフェーゴ島全般にわたるマゼラン石油地帯(CUENCA DE MAGALLANES)がある。この3地区で産出する石油及び天然ガスはネウケンよりはパイプ・ラインで、サン・ホルヘ及びマゼラン地区よりはパイプ・ライン及び海上輸送によりフェノス・アイレス州、パイヤ・ブランカの石油コンビナートに送られる。また、フェーゴ島よりサンタ・クルス州内のパイプに連結する海底パイプ・ラインが建設中である。ちなみに1980年度の石油生産量は28,581,7千³m、天然ガスは9,871,5千³mであった。(注:出所INFORME ECONOMICO)

石炭についてはアルゼンチン最南端のサンタ・クルス州南西部でチリー国境近く、チリー南部の港プルト・ナターレスよりわずか35km地点にあるリオ・トルボ鉱山(YACIMIENTO RIO TURBO)が国内唯一の生産地帯である。同鉱山はサンタ・クルス州都リオ・ガリエゴ港より西に257kmの地点でアンデスの支脈ドロテア山脈(SIERRA DOROTEA)にあり、そのために建設された鉄道によりリオ・ガリエゴ港に送られたのち中央市場へ海上輸送される。この地方に石炭が存在することは1887年頃よりすでに確認されていたが商業ベースの開発が始められたのは1947年からであり、その埋蔵量は今後長期の生産に耐えると報じられている。最近の生産量は1980年度精練もので389,9千トン(出所:INFORME ECONOMICO)であった。

以上のほか、鉄(リオ・オグロ州セラ・グランデ地区、推定埋蔵量200万トン)、石灰岩(ネウケン州COVNCO地区)、耐火粘土(チュブ州及びリオ・ネグロ州)、亜鉛及び鉛(リオ・ネグロ州)等がある。

地域内の重要都市としては次のものがあるビエドマ(VIEDMA):リオ・ネグロ州々都人口12,9千人、ネウケン市(NEUQUEN):オウケン州々都人口43,1千人、ラウソン市(RAWSON):チュブ州々都人口7,2千人、リオ・ガリエゴ(RIO GALLEGGO):サンタ・クルス州々都人口27,8千人、ウスタイア市(USHUAIA):世界最南端の都市フェーゴ島直轄領首都人口5,4千人。(注:人口は70年センサス)

1.3 経済概況

1.3.1 歴史的背景

アルゼンチンの過去の生産統計をみると代表的作物が今日までに最高の生産を記録したのは小麦が1939年、とうもろこし1935年、亜麻1927年、また、からす麦及びライ麦が1950年であった。一方輸出量で見ると1931年に行った主要作物11品目の輸出量は1977年まで破られておらず、1978年によく上廻ったものの1979年には再び31年の水準以下に戻っている。この間、1952年には100万トン台に没落した記録が残されている。大2次大戦後増大した世界の食料需要を前に米國を始めとする世界の農業國がそれぞれの生産を急激に拡大した中で、か

つては世界の穀倉といわれ繁栄を極めたアルゼンチンだけが1930年代を堺として以後停滞を続けたことはきわめて不可解なことであり、その理由を知ることはアルゼンチンの潜在的な農業生産力を知る上においても重要なことと思われる。

アルゼンチンの様に広大な農業適地があり生産実績を持つ国が需要増大をよそに生産が伸びなかったのはそこに何かの理由がなければならぬ。すなわち広大な土地を自由に耕作出来なかった障害は何か、農業者が農業生産に興味を失った背景は何処にあったのかを知る必要がある。

逆にいえばこれらの問題がなく、米国やブラジル並みに成長を続けたならば、いかに生産が拡大されたであつたらうか、という仮定への解答にもなり得る問題である。

各種の文献ではこの間の事情を次の通り解説している。

イ) 土地所有形態

広大な土地が自由に耕作されなかった理由として最初に考えられる問題は、アルゼンチンにおける土地の所有形態か一部の大地主によって支配されている点にある。16世紀にスペイン人によって植民が開始されたアルゼンチンは長期にわたって外国移民の導入を行わず、スペインより独立した1810年当時の人口はわずかに30万人といわれる程度であった。この人口に対しパンパ地方だけをとってみても、その広大な面積は余りあるもので、特に権力をもつもの、政府とつながりをもつもの、功績のあるもの等々の中に広大な面積を所有するものが出てきたのは当然であり、その土地に植生する自然牧草を利用する方法として粗放的な牧畜が増加した理由ともなっている。

外国よりの移民が本格化したのは1852年以降で、その後1930年までに約430万のヨーロッパ移民が導入され、アルゼンチンの人口は一挙に増加するが、これら外国移民が到着した時にはパンパ地方の土地配分はすでに終わった後であり、農地を求める移住者達は大地主より、土地を借用して農業を行う以外に方法がない状態であった。当時の借地契約は3年間を最高期限とし、契約満期時には飼料作物のアルファルファを植えて土地を地主に返す習慣であったと伝えられている。この移民導入と借地農の増加に伴って今世紀に入ると急速に農耕面積は拡大され、1930年の最盛期へと向っていく。

農業生産が最高潮に達した1929年に遭遇した世界的経済恐慌はアルゼンチンの不運というべき事件で、恐慌後沈滞した世界経済の中で各国、とくにアルゼンチンの輸出農産物の伝統的な仕向先のヨーロッパ諸国が一斉に輸入制限に踏みきったため30年以降アルゼンチンの輸出は急激に減少し、大打撃を避けるため政府が各種の方策を講じざるを得ない程であったという。輸出減少は貿易収支に影響し、国際収支を悪化させると同時に生産者への利益還元も激減したため、小資本の借地農はたちまち打撃を受け、農耕を放棄し仕事を求めて都市への流入が増大した。また3ヶ年後には他に移転を余儀なくされる借地農の中には、さらに安定した生活を求めて都市へ流れるものや大農場の給料生活者となるものか現われる傾向が生じていた。借地農より返還された土地はふたたび牧場となり、集約的な投資を必要としない粗放牧畜が継続されることとなる。各時代の政府は、このような農地制度の改革の必要を感じて種々の政策を試みるが大地主階級の強大な政治的圧力の前に実現せぬまま今日にいたっている。

表5 主要穀物の生産量比較

1,000トン

作物	1876~1980年間の生産記録	1930年	1980年
小麦	10,319 (1939)	4,425	8,100
とうもろこし	11,480 (1935)	7,128	6,400
からす麦	1,269 (1953)	981	522
大麦	1,364 (1957)	111	339
ライ麦	1,334 (1953)	602	202
アルピステ	107 (1970)	11	42
亜麻	21 (1927)	13	743
大豆	3,700 (1979)	—	3,500
ヒマワリ	1,650 (1980)	—	1,650

出所: BOLSA DE CEREALES

それでは、大地主自身がブラジルの様に労働力を利用した農耕の拡大を行おうとしなかった理由は何んであったのか、この疑問に対しては1946年以降登場したペロンの政策的背景が大きく影響している。

表6 アルゼンチンの農牧場数及び面積

区分 (ha)	場数	%	面積 (1,000 ha)	%
25 以下	211,088	41.4	1,820.7	0.9
25 ~ 100	131,946	25.8	7,780.3	3.8
100 ~ 400	101,940	19.9	21,068.2	10.4
400 ~ 1,000	32,349	6.3	20,468.1	10.1
1,000 ~ 5,000	25,816	5.1	57,238.6	28.1
5,000 以上	6,678	1.3	94,969.3	46.7
計	509,817	100.0	203,345.3	100.0

出所：国際協力事業団ブエノス支部

ロ) 工業偏重政策

大衆の支持をバックに政権を得たペロンは世界恐慌後に受けた国の打撃が農業に偏重した経済にあったことや30年以前の繁栄の時代でも農業生産による富の大半が一部の大地主に吸収されていた状況を反省し、輸出の多様化と国産品による輸入代替、所得格差の是正を目指す工業化への道を強引ともいえる方法で強行した。これによって国内の経済体質を根本的に変えようとするのかねらいであった。

同時にナショナリズムを標榜したペロンはそれまで英国資本の支配下にあった基幹部門の鉄道や通信部門を始めとする多くの部門の国有化を断行した。そのために必要とした巨額の資金は1部を国庫より、1部を農業生産の収益より支出するシステムをとっている。つまり農業部門の犠牲において工業部門を育成しようとする方法である。その1例としては当時輸出振興機関として設立された輸出振興公社に輸出農産物を売り渡すことを義務づけ、海外への輸出は同公社が行うシステムである。当時ようやく回復した世界の貿易の中で同公社は買上げた価格と輸出価格の差で巨大な利益をあげ、これを工業振興に廻したため工業界は見るべき発展を遂げていくが、当然この政策を不満とした地主階級が農業生産を縮小し、投資の方向を牧畜や非生産的な不動産、金融部門へと向けていったのも又当然の成り行きであったといえる。

他方多くの労働者にとってペロンの工業化政策とそれに伴う賃金の向上や社会保証制度の確立は神の福音であり、ペロンが密にねらったであろう労働者階級の掌握による政治基盤の強化は功を奏して熱狂的なペロン派と共に強力な労働組合勢力が台頭する。

ハ) インフレによる経済不安と国内投資の回避

ペロンの工業重視政策が国内経済を支配してきた大農場主の支援のもとに行われてきたものであったならば工業化と基幹産業の国有化はネガティブな経済現象を併発することなく成功したかもしれない。しかし現実にはペロンの政策に不満を抱き、労働者階級の台頭とその政治的圧力化に不安を抱いた地主階級は政策を支援するどころか逆の立場に立ったことはあらゆる意味において以後の問題発生の一の原因となっている。また60年代に入ると遅悪く主要農産物の国際価格が下落したため上記公社が巨額の赤字を作ったのを始め、国有化した基幹部門の能率は低下してこれ又赤字を生じ、鉄道においては農産物の輸送能力を落とすなどの問題がはやくも発生し始めこれを補填するために生じた巨額の財政赤字は通貨の発行を余儀なくさせ更に巨大化した労働者同盟の圧力による賃金の値上げはコストの上昇につながり、悪性インフレーションのプロセスを開始していく。物価の高騰をおそれた政府が物価を凍結した統制経済はヤミの横行

を促し、次第に社会不安をつのる結果となる。地主階級的手中にある巨額の資金はいきおい安全な外国の銀行や不動産投資に廻され国内での生産投資は減少していった。

一方目的とした工業化は、それなりに進められたものの国内資金の不足は補うべくもなく今日にいたるまで輸出の80%を農業部門に依存し、輸入の22%を資材を中心とする工業品に依存する輸出入構造にあきらかなように一部消費材の輸入代替を達したに止っており、目的を達せぬまま、ひずみだけを残し、その傷痕が今日に及んでいることをみると、アルゼンチン経済の悪循環の原因はペロンの政策にあり、この誤った政策は農業軽視の政策であったと、結論することが出来るようである。

産業の多様化により国家経済の体質を改善し、所得の格差を是正して富の配分、労働大衆の生活水準向上を図ろうとしたペロンの高い理念は完全に裏目に出て国を混乱におとし入れたか、この歴史をみるにつけアルゼンチンがあくまで農業立国であり、農業界を牛耳る大地主階級の存在がいかに強力な影響を持つかが理解される。

1. 3. 2 1976年以降の状態

以上の経緯を踏まえた通じた国内情勢の中で、1955年ペロンは失脚し以後3年間の軍政、フロンデシ、イリアによる8年間の民政、再びオンガニア将軍による第2次軍政と続くか、この間ペロン時代に育成された労働者階級を基盤とするペロン派の勢力は時の政府に対する強力な圧力団体として作用し、政府の施政は常に徹底を欠き、すでに慢性化したインフレと対外収支悪化の経済情勢の中にテロが頻発し社会不安を招くにいった。このため軍政に対する国民の不満は頂点に達しラセース大統領を最後に総選挙への道を選ばせることとなる。

1973年3月の総選挙の結果カノラを首班とするペロン派政権の誕生によって亡命18年目に帰国したペロンは同年9月の大統領選挙に62%という史上最高の投票率をもって奇跡の復活を遂げたことはいまだ記憶に新しい。しかしながらペロン派にとってようやく取戻した政権も困難な国内情勢に加え、その直後に襲われた石油ショックによって物価の上昇をおり、労働組合による賃金攻勢と継続するテロによる社会不安、国際収支の悪化、外債の支払延期など社会経済面の悪条件のほかペロン派内部の抗争が続き、76年9月ペロンの死後、後を継いだ夫人のイサベルでは事態を収拾する能力はなく76年にかけて無政府状態へと陥ってきた。ついに軍部が蜂起してイサベルを追放し、ビデラ将軍を長とする第3次軍政による事態の収拾が行われる。

軍政に引きつがれた同年3月の物価指数は過去1年間の指数で738%、5月には920%に達し、過去に類例のない極度の悪質なインフレと変化していた。国内生産活動も統制経済政策による価格の凍結や政策的な外国為替制度とヨーロッパ市場の牛肉買付制限による輸出市場の沈滞によって75年以後低迷を続け、国際収支の悪化はイサベル政権最後の日(76年3月23日)の外貨保有高が582百万ドルで、このうち直ちに債務支払いに引当て得る準備高はわずかに23百万ドルという状態であった。

イサベル政権最後の3ヶ月を含む第1四半期国家財政赤字は同期の国内生産高の13%に達しており、その裏付けとして同四半期における財政支出が財政収入の120%であったという数字も残されている。インフレと共に慢性化した財政赤字の原因は本来民間形態であるべき、企業まで含めて行きすぎた国有化とその後の能率低下～新しい国営企業の赤字～財政援助と支出が増大する一方能力不足によるバランスの崩壊によるものであったと評されている。

この困難な事態に対して軍事政権は従来の政策を根本的に改革する方針、すなわち過去の統制経済に対する自由解放型経済への移向を志向した次の12原則を打ち出して78年までを経済の再建を目指す第1段階、経済成長の安定化とインフレ抑制を目標とする79年以降の第2段階に分けた経済政策を推進しており、去る81年3月ビデラに代ったビオラ政権もその方針を継承して今日にいたっている。

1. 価格統制の徹底：価格統制又は作爲的な協定システムを廃止してヤミ市場を解消し潤沢な供給を図る。

- 2 為替市場の自由化：従来の為替管理制度を廃し、ヤミ又は平行市場を解消して資本の自由な流入を図る。
- 3 外国貿易の自由化：従来政府機関が統制してきた穀物類や肉類の輸出入を自由化する。
- 4 輸出の自由化：旧来の禁止条項を検討し、輸出税を廃止する。
- 5 輸入の自由化：旧来の禁止事項を検討し、輸入税の段階的引下げを図るプログラムを実施する。
- 6 金利の自由化と金融システムの改革：従来の金融部門に対する国の介入を避ける。
- 7 賃借料の自由化：都市における家賃、農村における借地料の凍結を解除する。
- 8 公共事業に対する政策的料金や燃料に対する補助的価格を廃止する。
- 9 経済の特定部門に対する保護援助を廃止する。
- 10 政府が定めた最低賃金をベースとした賃金決定を自由化する。
- 11 外国の投資家及び国家のそれぞれの利益に共通する規定により、外国資本の投資を自由化する。
- 12 技術移転に関する従来の障害を避け、これを振興する規則を設けて技術移転の自由化を図る。

1.3.3 現 状（統 計）

表7 物 価 上 昇 率

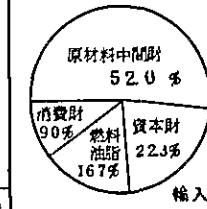
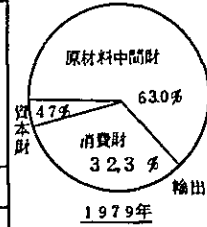
年 月	消費者物価 (%)	卸売物価 (%)
1976年	444.1	499.0
1977年	176.0	149.4
1978年	169.8	143.4
1979年	139.7	128.9
1980年		
1月	7.2	4.3
2年	5.3	4.1
3年	5.8	3.8
4年	6.2	3.9
5年	5.8	5.3
6年	5.7	7.3
7年	4.6	2.9
8年	3.4	2.9
9年	4.5	2.8
10年	7.6	5.5
(累 積)	(72.4)	(52.4)
(過去1年比)	(89.8)	(61.6)

出所：FIEL

表8 輸出入構造

単位 10万ドル

区 分	1975	1976	1977	1978	1979	1980
輸出						※
原材料中間財	1,961.9	2,501.3	3,606.5	4,028.5	4,923.3	---
消費財	699.8	1,118.4	1,700.5	1,999.3	2,517.3	---
資本財	299.6	296.4	344.8	371.7	369.3	---
計	2,961.3	3,916.1	5,651.8	6,399.3	7,809.0	7,975.0
輸入						
資本財	562.0	502.9	1,110.9	1,096.2	1,500.0	2,100.0
原材料中間財	2,737.9	1,933.8	2,238.2	2,053.4	3,487.0	6,210.0
燃料油脂	515.0	530.8	676.9	471.9	1,125.0	1,040.0
消費財	13.6	65.5	135.5	212.2	600.0	1,050.0
計	3,946.5	3,032.5	4,161.5	3,833.7	6,711.5	10,400.0
貿易収支	- 985.2	883.6	1,490.3	2,565.8	1,098.4	- 2,425.0



出所：中銀 ※資料未発表

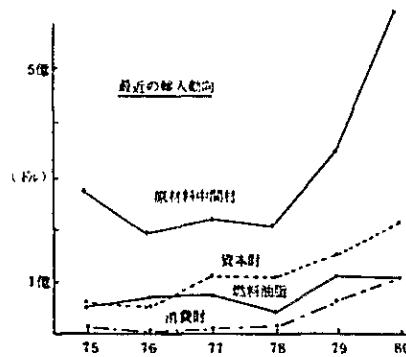
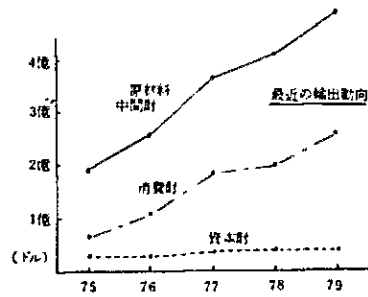
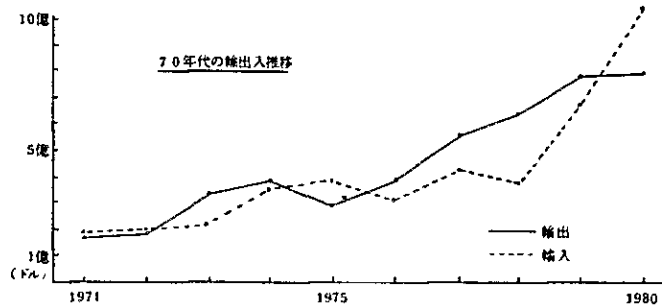


表9 経済圏別貿易収支

単位 100万ドル

経済圏別	1977			1978			1979		
	輸出	輸入	収支	輸出	輸入	収支	輸出	輸入	収支
ラフタ	1,371.9	983.7	388.2	1,513.0	832.2	680.8	1,852.0	1,326.0	526.0
E C	1,774.3	1,092.5	681.8	2,146.3	1,192.2	954.1	2,522.0	1,819.0	703.0
米 国	382.6	771.5	- 388.9	536.6	704.4	- 167.8	569.0	1,408.8	- 839.9
スペイン	280.7	1,110	1,697	330.6	1,244	2,062	420.3	2,920	1,283
日 本	307.8	364.0	- 56.2	380.6	2,673	1,133	3,955	3,563	39.2
ソ 連	211.0	203	190.7	385.0	111	373.9	415.3	307	384.6
その他の国	1,323.5	818.5	505.0	1,107.4	702.1	405.3	1,635.8	1,467.3	1,685
計	5,651.8	4,161.5	1,490.3	6,399.5	3,833.7	1,565.8	7,809.9	6,700.1	1,109.8

出所：INDEC

表10 国際収支及び外貨保有高

単位 100万ドル

項 目	1975	1976	1977	1978	1979	1980
經常収支						
貿易収支	- 985.2	883.6	1,490.3	2,565.8	1,098.4	- 2,425.0
輸出 (FOB)	(2,961.3)	(3,916.1)	(5,651.8)	(6,399.5)	(7,809.9)	(7,975.0)
輸入 (CIF)	(- 3,946.5)	(- 3,032.5)	(- 4,161.5)	(- 3,833.7)	(- 6,711.5)	(-10,400.0)
サービス収支	- 301.0	- 252.0	- 231.7	- 780.6	- 1,683.5	- 2,470.6
運賃、保険料等	(1,256)	(2,405)	(3,468)	(- 998)	(- 7,635)	(- 9,365)
外国送金	(- 4,296)	(- 4,925)	(- 5,785)	(- 6,808)	(- 9,200)	(- 15,341)
その他	46	185	313	484	35.0	40.5
計	- 1,284.6	650.1	1,289.9	1,833.6	- 550.1	- 4,855.1
資本収支						
民間	1,168	- 281.9	1,135.6	713.8	4,222.5	1,921.6
長期	(- 414)	(- 515)	(6,767)	(2,269.6)	(2,620.6)	(3,741.2)
短期	(1,582)	(- 2,304)	(4,589)	(- 1,553.8)	(1,601.9)	(- 1,819.6)
政府	961	- 1,834	- 82	5,250	5,286	9,297
連邦政府	(- 25)	(- 36)	(- 94)	(- 13)	(4.3)	(2,490)
州政府	(986)	(- 1,798)	(12)	(5,263)	(5,243)	(6,807)
金融システム	- 21.8	- 515	1,591	95.1	- 246	- 3,713
相殺勘定	2,969	1,084.1	- 261.8	- 1,367.4	- 1,404	- 1,422
為替調整他	65	- 160	93	1,660	204.5	- 1,394
計	4,945	551.3	1,034.0	1,325	4,790.6	2,198.4
誤びの訂正	- 10	- 90	- 97.4	32.3	201.9	- 1,394
収 支 計	- 791.1	1,192.4	2,226.5	1,998.4	4,442.4	- 2,796.1

年度末 外貨保有高	6,199	1,812.3	4,038.8	6,032.7	10,479.6	7,683.5
-----------	-------	---------	---------	---------	----------	---------

出所：中銀

表11 外債残高

単位 100万ドル

区 分	1975	1976	1977	1978	1979	1980
公 共	4,941.0	6,647.5	8,126.7	9,452.8	9,960.3	14,459.0
民 間	3,143.8	3,090.5	3,634.5	4,210.2	9,074.4	12,703.0
計	8,084.8	9,738.0	11,761.2	13,663.0	19,034.7	27,162.0

出所：中銀

1.4 農牧林業の概要

1.4.1 生産概要(統計)

表12 1975年~80年の生産実績

作物別	植付面積 1,000ha						生産量 1,000トン					
	1975	76	77	78	79	80	1975	76	77	78	79	80
イ. 穀物類												
小麦	5,183	5,753	7,192	4,600	5,230	5,000	5,970	8,570	11,000	5,300	8,100	8,100
とうもろこし	3,871	3,696	2,980	3,100	3,300	3,310	7,700	5,855	8,300	9,700	8,700	6,400
ノルゴ	2,612	2,358	2,780	2,650	2,530	1,884	4,830	5,060	6,600	7,200	6,200	2,960
からす	1,201	1,342	1,471	1,480	1,545	1,680	327	433	530	570	676	522
ライ麦	2,370	2,408	2,300	2,140	1,722	1,494	306	273	330	170	210	202
大麦	950	977	967	890	761	592	430	523	538	353	554	339
ウリヤ	278	319	350	340	345	278	200	294	340	330	310	188
米	89	97	91	96	100	116	316	351	309	320	310	312
アルビステ	49	45	47	75	60	56	25	33	39	60	51	42
計	16,603	16,995	18,178	15,371	15,593	14,410	20,104	21,392	27,906	24,003	25,111	19,065
ロ. 油粕原料作物												
大豆	370	443	710	1,200	1,640	2,100	485	695	1,400	2,500	3,700	3,500
ヒマワリ	1,196	1,411	1,460	2,200	1,766	2,000	732	1,085	900	1,600	1,430	1,650
麻	520	471	722	950	893	1,070	381	377	617	810	600	743
落花生	383	335	370	452	400	287	263	237	420	260	470	206
油桐	49	44	53	52	52	52	61	55	100	82	58	81
計	2,518	2,704	3,315	4,854	4,751	5,509	1,895	2,449	3,437	5,252	6,258	6,180
オリブ	(資料未入手)						89	79	94	75	95	112
ハ. 工業原料作物												
綿	513	433	543	621	702	591	172	140	160	220	174	160
ブドウ	342	345	343	343	342	342	3,100	3,760	3,400	2,800	3,500	※
砂糖	348	351	360	356	351	337	15,600	14,310	16,000	13,600	14,120	15,000
フォルミオン	3	3	3	2	3	3	48	60	60	50	42	43
繊維用	3	2	3	2	3	2	3	2	3	9	6	9
オリーブ	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.2	0.2	0.3	0.3	0.2	0.2
計	1,209	1,134	1,252	1,324	1,401	933	18,272	19,624	16,679	17,842	15,212	
ニ. 嗜好作物												
煙草	93	82	81	70	78	65	98	95	90	63	70	62
茶	41	44	39	43	41	41	165	133	140	103	125	153
計	134	126	120	113	119	106	263	228	230	166	195	215
ホ. 野菜類												
ジャガイモ	151	151	250	190	235	241	109	171	180	170	232	178
レンズ	8	9	30	82	46	32	13	16	41	40	12	17
トマト	36	34	32	33	31	31	610	491	533	574	552	546
マッシュルーム	※	23	22	22	22	※	※	225	230	182	183	※
えんどう豆(乾燥)	15	19	23	49	21	21	19	36	30	46	12	19
にんにく	13	14	15	17	18	19	68	69	73	79	81	95
たまねぎ	17	17	9	16	17	18	331	390	172	263	270	278
えんどう豆(青)	15	22	25	18	17	14	34	84	51	34	35	49
計	255	394	517	543	517	490	1,184	2,868	3,107	3,002	2,962	1,182
ヘ. 果実類												
りんご							608	577	820	810	972	958
オレンジ							729	743	740	670	685	700
レモン							339	247	320	380	267	394
桃							251	288	283	250	282	238
マンダリーナ							230	229	259	255	219	296
梨							97	123	160	150	160	155
グレープ・フルーツ							185	180	170	145	135	153
バナナ							374	278	333	129	144	※
計							2,813	2,665	3,085	2,789	2,864	2,894

出所: S. E. A. G 注: ※資料未入手 (1)※を除いた合計

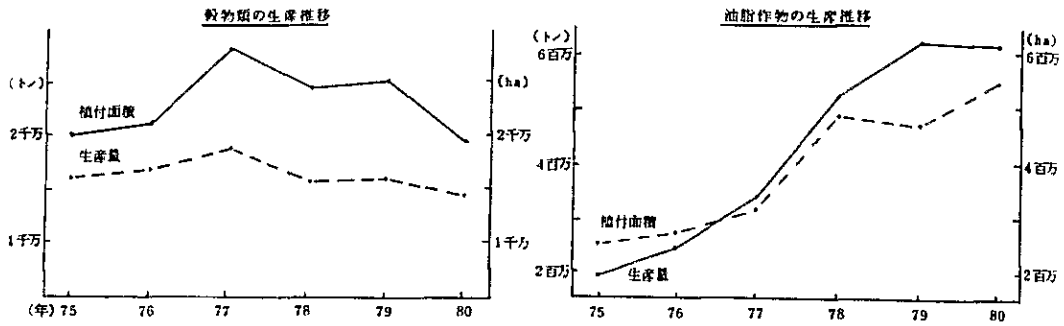


表13 主要家畜の屠殺数

単位 1,000頭

区 分	1975	1976	1977	1978	1979	1980
牛	121460	138680	147481	16250.2	156166	140525
羊	81070	80983	82951	79411	78615	69452
豚	31045	31121	2767.8	2420.6	28287	30345
合 計	23,357.5	25,078.4	25,811.0	26,611.7	26,306.8	24,032.2

出所: J N C I INFORME ECONOMICO

表14 農業生産高推移

項 目	生産高(1970年価格) 単位100万ペソ						構 成 比 率 %					
	1975	76	77	78	79	80	1975	76	77	78	79	80
農業部門												
穀 類	2139	2386	2431	2509	2385	2150	183	196	193	197	181	168
油 脂 作 物	579	752	1121	1311	1619	1426	50	62	89	103	123	111
工業原料作物	1621	1641	1575	1503	1585	1690	139	135	125	118	120	132
果樹及花卉	850	833	893	878	955	945	73	68	71	69	72	74
野菜類	797	778	786	802	820	814	68	64	63	63	62	63
計	5986	6389	6805	7004	7364	7025	51.3	52.3	54.1	55.0	55.8	54.8
牧畜部門												
牛	3767	3869	3843	3896	3873	3897	329	318	306	306	294	304
羊	106	123	98	91	89	84	09	10	08	07	07	07
豚	96	31	87	80	119	128	08	02	07	06	09	10
馬	39	57	50	31	44	44	03	05	04	03	03	03
羊毛	261	265	262	258	282	275	23	22	21	20	21	21
牛乳	826	815	771	745	758	765	71	07	61	59	58	60
とり類	179	171	168	180	174	192	15	14	13	14	13	15
計	5273	5332	5279	5279	5340	5385	45.2	43.8	42.0	41.5	40.5	42.0
林業部門	119	136	139	132	135	126	1.0	1.1	1.1	1.0	1.0	1.0
その他(水産、狩猟等)	298	307	353	321	354	281	2.5	2.6	2.8	2.5	2.7	2.2
合 計	11,676	12,164	12,576	12,736	13,193	12,817	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

出所 INFORME ECONOMICO RESEÑA ESTADISTICA

1. 4. 2 農産物輸出又輸入（統計）

表15 主要農産物の輸出実績

単位 百万トル

品 目	1975		1976		1977		1978		1979	
	金額	%	金額	%	金額	%	金額	%	金額	%
牛 肉	1124	38	2508	64	3310	59	4255	66	7373	94
大 豆	-	-	162	04	1819	32	4547	71	7029	90
とうもろこし	5159	174	3625	93	5178	92	5871	92	6056	78
小 麦	3007	101	4315	110	5414	96	1739	27	6047	77
なめし皮	619	21	1329	34	1854	33	2505	39	4259	55
加工食品残率	1378	46	2217	57	3713	66	3656	57	4088	52
肉類加工品	1165	39	1765	45	1983	34	2617	41	3498	45
ノルゴ	2059	69	3346	85	3410	61	3584	56	3016	39
羊 毛	930	31	1054	27	1793	32	1844	29	1841	24
ヒマフリ油	-	-	181	05	832	15	944	15	1577	20
りんご	892	30	936	24	1178	21	1517	24	1439	18
亜麻油	530	18	546	14	921	16	760	12	885	11
果物、野菜加工品	227	08	431	11	692	12	847	13	856	11
大豆油	104	04	275	07	227	04	359	06	515	07
タンニン原料	238	08	290	07	317	06	358	06	430	06
粉 製 品	391	13	413	10	585	10	383	06	404	05
生 皮	97	03	192	05	251	04	275	04	355	05
皮靴加工品	201	07	487	12	962	17	1550	24	336	04
茶（紅茶及マテ茶）	188	06	206	05	454	08	328	05	299	04
タバコ	313	11	197	05	226	04	264	04	196	04
柑 橘 類	63	02	90	02	164	03	194	03	248	03
乳 製 品	386	13	773	20	700	12	419	07	179	02
そ の 他	1,054.2	35.8	1,382.3	35.4	2,047.6	36.3	2,487.9	39.3	2,717.1	34.6
輸 出 総 額	2,961.3	100.0	3,916.1	100.0	5,651.9	100.0	6,299.5	100.0	7,809.9	100.0

出所：INFORME ECONOMICO

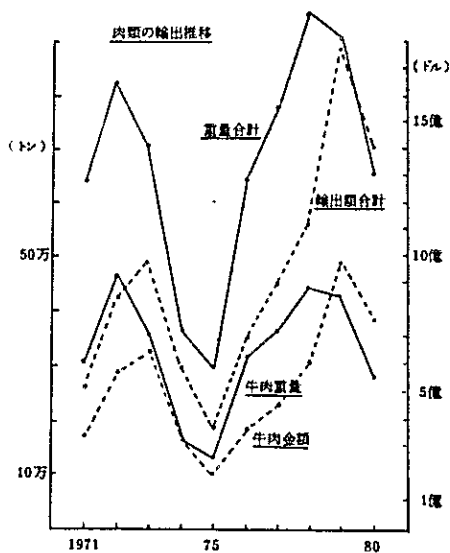
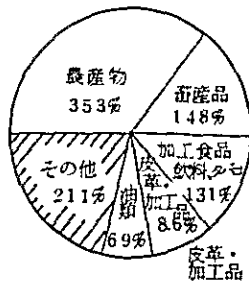


表16 農牧林業部門(含加工品)の輸出総額に占める比率

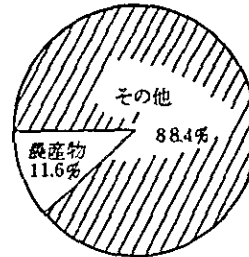
単位 百万ドル

区 分	1975		1976		1977		1978		1979	
	金額	%	金額	%	金額	%	金額	%	金額	%
畜産品(含魚)	2396	81	4780	122	6212	110	797.8	125	1,153.8	148
農産物	1,285.1	439	1,465.3	374	2,071.1	366	2,200.2	344	2,775.6	355
動植物油	914	31	1,757	45	3,698	65	3,906	61	5,402	69
加工食品、飲料、タバコ	443.6	150	574.2	147	857.3	152	8,449	132	1,014.1	131
皮革及加工品	917	31	2,010	51	3,068	54	4,33.2	68	670.5	86
木材及加工品	0.2	-	0.2	-	0.5	-	1.2	-	0.9	-
小計	(2,151.6)	(727)	(2,894.4)	(739)	(4,226.7)	(747)	(4,667.9)	(730)	(6,155.1)	(789)
その他	809.7	273	1,021.7	261	1,425.1	253	1,731.6	270	1,653.9	211
合計	2,961.3	1000	3,916.1	1000	5,651.8	1000	6,399.5	1000	7,809.0	1000

出所: I N D E C



輸出(1979年)



輸入(1979年)

表17 農牧林業部門の輸入総額に占める比率

単位百万ドル

区 分	1975	1976	1977	1978	1979
畜産品(含魚)	173	37	250	29.6	69.9
農産物	1329	1193	1596	1422	2563
(コーヒー)	(631)	(762)	(1046)	(753)	(71.9)
(バナナ)	(288)	(181)	(180)	(215)	(44.3)
(ココア)	(66)	(46)	(188)	(188)	(29.4)
動植物油	76	50	62	61	11.5
加工食品、飲料、タバコ	400	265	430	526	164.8
皮革及加工品	06	03	06	1.2	4.2
木材及加工品	1023	364	530	535	128.1
小計	(3992)	(2901)	(4288)	(4008)	(780.4)
その他	3,547.3	2,742.4	3,732.7	3,432.9	5,931.1
合計	3,946.5	3,032.5	4,161.5	3,833.7	6,711.5
農牧林業部門の比率	101%	96%	10.3%	10.5%	11.6%

出所: I. N. D. E. C

生產流通実績

2.1 穀物

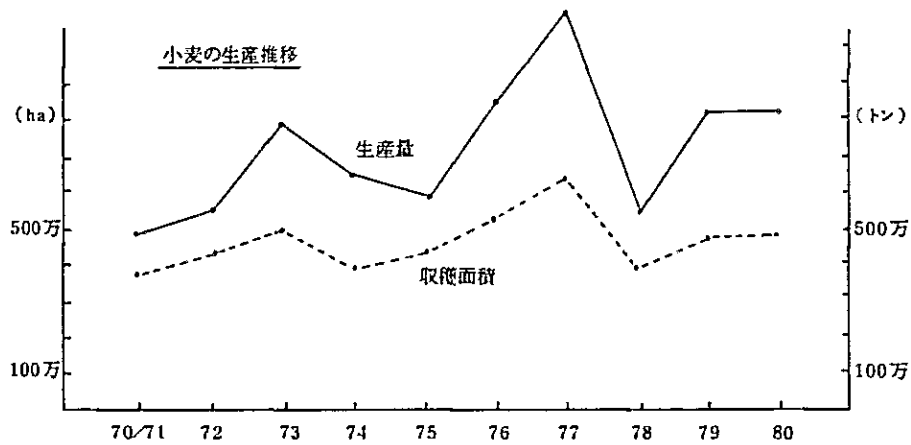
2.1.1 小麦

イ) 国内生産

表18 小麦：過去10年間の生産実績

年度	植付面積 1,000ha	収穫率 %	収穫面積 1,000ha	単収 kg/ha	生産量 1,000トン
1970/71	1,468.2	82.8	3,700.8	1,329	4,920.0
71/72	4,986.0	86.1	4,294.6	1,267	5,440.0
72/73	5,627.0	88.2	4,965.1	1,591	7,900.0
73/74	4,251.8	93.1	3,957.9	1,657	6,560.0
74/75	5,183.0	81.7	4,233.0	1,410	5,970.0
75/76	5,753.0	91.6	5,270.6	1,626	8,570.0
76/77	7,192.0	89.4	6,428.0	1,711	11,000.0
77/78	4,600.0	85.0	3,910.0	1,355	5,300.0
78/79	5,230.0	89.6	4,685.0	1,729	8,100.0
79/80	5,000.0	95.7	4,787.0	1,692	8,100.0
71~80年平均	5,299.1	88.4	4,623.2	1,554	7,186.0

出所：S. E. A. G



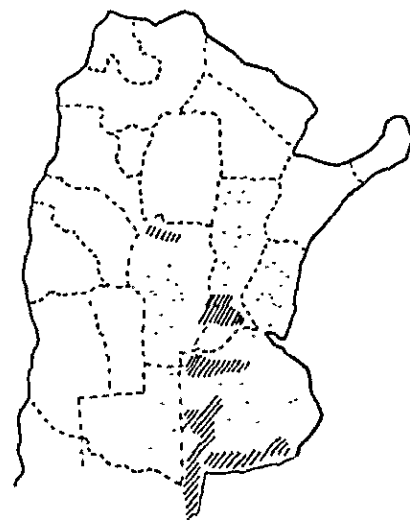
小麦は恵まれた自然条件の広大なパンパ地帯で古くより栽培されてきたアルゼンチンの代表的な穀物である。小麦の栽培は今世紀始めにすでに500万ヘクタール以上に達していたが、1920年代に入るとヨーロッパ移民と共に導入された新しい技術によって生産性が向上し、1929/30年には900万ヘクタールの植付面積より1千万トン近い生産をあげ世界生産の85%を占めるにいたった。世界の穀倉地帯の名称と共に繁栄の時代を築いたのはこの頃である。しかしながらアルゼンチンの小麦生産がピークに達した1929年は、世界が経済恐慌にゆれた年でもあった。その結果として輸入国が強力な輸入抑制を行ったため輸出市場が制限され、価格の下落を招いたことが大きな原因となって以後の生産は急激に減少

し、より安定した牧畜に移行していく。以後は約500万ヘクタールの植付面積を上下しながら今日にいたっており、この間、再び50年前の栽培規模に戻ったことはない。

最近の10年間、すなわち1970年代の生産についても上表に示される通り植付面積は平均530万ヘクタール、生産量は700万トンに終わっている。この間ペロン政権が崩壊した76年には新規軍事政権による経済政策の転換から農業面に新たな期待を与え、一時的に生産は拡大して700万ヘクタールへと伸びたが、運悪く国際相場下落と78年以降とられた為替政策が大きな障害となり、78年以降の植付が再び下降する原因となり、その傾向は79/80年度も依然として継続している。しかし栽培面積が50年前の60%に過ぎない今日の生産量をもってしても世界の生産国の中ではソ連、米国、中国、インドほかヨーロッパ中東の主要生産国について12位の地位にあり、南半球ではオーストラリアに次いで2位、南米大陸では依然として圧倒的な生産規模である。

小麦は春播きの品種もあるが一般に冬期作物であり、冬期作物の中ではもっとも重要な作物である。冬に植付けられ春から夏の始めにかけて収穫される小麦の栽培条件としては、イ) 生育期間中の平均気温が16℃、ロ) 年間降雨量600~800mm、ハ) 土壌は物理的、化学的性状が均衡することを必要とするが砂質で有機質が豊富でない土壌でも栽培を可能とする。

アルゼンチンで栽培されている小麦にはパン原料としての小麦 (TRIGO PAN) とマカロニ原料としての小麦 (TRIGO FIDEO) の2種がある。この2種の小麦は従来統計上一括して発表されてきたが、1974年以降別個に統計されるようになった。それぞれの生産比率はパン原料の方が94%、マカロニ原料が6%程度であったがパン原料の方が単収が高く安全度が大きいため78年以降マカロニ原料の比率は次第に減少しており、79年32%、80年には27%に落ちて同年の総植付面積500万ヘクタールの中に占めたマカロニ用小麦の面積は136千ヘクタールに過ぎなかった。栽培地域もパン原料小麦がパンバ地帯全体



小麦の生産地帯

に分布するのに対しマカロニ用はBONAERENSE 南部に集中する。この様にマカロニ原料の方は減少を辿ってはいるが、この小麦が農産物特有の性質を持っていること、例えば、“焼きすぎ”に対する耐久性があり、他の小麦(パン用)では代用出来ないところからイタリーよりの継続した需要があるため、生産が奨励されており、最近みられている減少傾向を阻止するための対策かとられている。

小麦の生産を地域別にみると最大の生産地はブエノス・アイレス州で79/80年を例にとると全国植付面積の58%に当たる288万ヘクタールの作付が行われ、これにサンタ・フェ及びコルドバ両州が続き、この3州で全国生産量の90%以上を産出する。その他ではラ・パンプ州及びエントレ・リオ州があり、全国生産に占める比率はそれぞれ7%、2%と僅少である。

植付面積に対する収穫面積の割合は気象条件により毎年変動するが、過去10年間ではもっとも損失の少なかった年は1980年で95.7%収穫を記録し、その比率がもっとも少なかったのは75年の81.7%であった。

80年ではブエノス・アイレス州が96.8%、サンタ・フェ州99.8%、コルドバ州が96.7%と主要3州がいずれも高い比率となっている。また、この収穫率をパン原料小麦とマカロニ用小麦に分けると前者が96.1%であったのに対し、後者は成熟期の後半に見舞われた降雪と降雹によって大きな損害を受け84.6%に止まった。

表19 小麦：州別生産実績

州別	収穫面積 1,000ha						生産量 1,000トン					
	1975	1976	1977	1978	1979	1980	1975	1976	1977	1978	1979	1980
ブエノス・アイレス	2,605.2	2,808.6	3,580.5	2,226.0	2,871.4	2,880.0	30,300	37,450	55,740	27,000	47,410	46,000
サンタ・フェ	672.0	759.0	960.0	710.0	760.0	842.0	8,760	16,150	17,800	10,500	13,500	17,000
コルドバ	735.0	773.0	1,044.6	660.0	730.0	761.0	8,700	14,700	16,700	7,000	9,700	12,000
ラ・パンパ	690.0	815.0	930.0	510.0	480.0	340.7	5,400	8,100	11,000	2,900	5,150	4,300
エントレ・リオス	91.0	100.1	251.0	130.0	115.0	84.4	900	1,600	338.0	1,300	790	700
サンチャゴ・デ・エステカ	332	397	440	280	124	342	448	332	230	400	500	430
リオ・ネグロ	94	149	178	160	140	138	55	120	230	200	160	136
サノ・ルイス	154	186	179	58	30	130	204	330	227	-	-	90
サルタ	7.1	44	46	52	22	13	91	44	78	84	2.1	1.6
オウケン	10	10	10	09	08	07	06	06	07	0.5	0.5	0.3
その他の州	629	943	371	641	696	289	736	1,318	348	611	174	325
合計	4,922.2	5,428.6	6,888.5	4,356.0	5,061.4	5,000.0	55,600	80,150	105,740	50,000	77,410	81,000

出所：農牧省 / BOLSA DE CEREALES

過去10年間の単位面積当たり収量は年々向上のあとかみられ、この間1978/79農年には1ヘクタール当たり1,729Kgの記録を作った。79/80年については農牧省の公式発表によると1,692Kg/haで前年に劣るが、これも10年間の平均値(1,554Kg/ha)を上回る成績であった。

各生産地帯の中でもっとも高い単収を記録したのはサンタ・フェ州の2,125Kgでもっとも低い水準はエントレ・リオス州の760Kg/haであり、主要生産州の中ではブエノス・アイレス及びコルドバの2州が前年に比べ減少を見ており、前者が1,649Kg/ha、後者は1,630Kg/haであった。マカロニ用小麦については過去5ヶ年間を平均すると1,750Kg/haとなっている。

FAOの統計にもとづいてアルゼンチンにおける小麦の単収を世界の水準と比較すると非常に低く世界の平均にも達していない。79年度を例にとると世界でもっとも高い単収を示したのは英国の5,139Kg/haで西独の4,952Kg/ha、フランスの4,773Kg/ha、チェコスロバキアの4,273Kg/ha、ブルガリア3,896Kg/ha等すべてアルゼンチンを倍加する収量であり、アルゼンチンの粗放農業に対し上記諸国の集約農法の差がみられる。

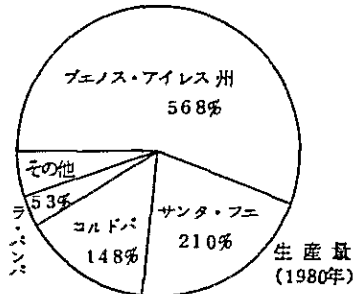
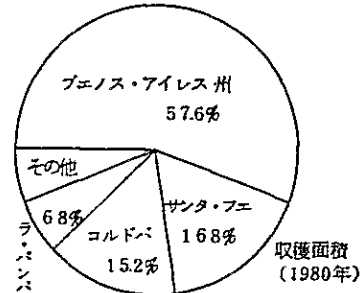
る。

表20 小麦：主要生産州の単収比較

単位 Kg/ha

州別	1975	1976	1977	1978	1979	1980
ブエノス・アイレス	1,156	1,459	1,701	1,357	1,796	1,649
サンタ・フェ	1,593	2,301	2,014	1,641	2,015	2,125
コルドバ	1,422	2,075	1,870	1,400	1,650	1,630
ラ・パンパ	1,040	1,194	1,375	829	1,262	1,383
エントレ・リオス	1,139	1,665	1,489	1,130	760	932
サンチャゴ・デル・エステロ	1,691	1,516	852	1,481	1,377	1,257

出所：農牧省



以上にみられる単収の増加によって植付面積の減少にもかかわらず生産量は増加し、70年代10年間の平均生産量7,186千トンに対し79/80農年は8,100千トンと推定されている。各主要生産州の生産比率は収穫面積の割合に応じており、ブエノス・アイレス、サンタ・フェ及びコルドバが大きく、この3州で全国生産の92%を占める。

ロ) 世界の生産需要動向

(世界生産) 1980年6月にFAOが行った推定によると1979年度における世界の穀物生産量は1,552百万トンでこの中小麦が27.4%を占める。一方国際小麦審議会が1980年7月に行った推定によると1979年度の小麦生産量は425百万トンで前年の450百万トンに対し5.5%減少であったが、76年に世界が初めて400百万トンを超えた420百万トンをおさながら上廻っている。逆に収穫面積においては伸びており78年度の235.5百万ヘクタールに対して79年は237.4百万ヘクタールに達した。このことは生産性の減退を意味するものであり、ヘクタール当たり単収は前年の1,906Kg/haに対し1,770Kg/haに止まったためである。これは79年度の世界的な天候不順に起因している。

国別または地域別の生産状況をみると最初に世界最大の生産国であるソ連における極度の不振が観察される。同国は78年には過去の記録を破る120.8百万トンの生産をあげて世界生産の27%を占めたが79年には極度の天候不順から収穫面積において8%減、単収における19%減により冬期収穫分が激減(78年の69百万トンより79年には40百万トン)し全体的に前年比25.4%減の90.1百万トンに止まり世界生産に占めるシェアも21%に後退した。

世界の小麦生産においてソ連に次ぐ中国は植付当初乾燥のため増産は期待されていなかったが、冬期収穫小麦の主要生産地で順調な降雨があったため単収の増加から生産量は予想を大巾に上廻った。

米国の生産は78年の48.9百万トンと20%上廻る58.3百万トンの大巾な増産で1976年に達した水準に戻って世界生産に対し14%のシェアを占めた。これは全般的な植付面積の増大(10%)と史上最高の単収(2,301Kg/ha)によっている。この年米国政府は小麦の栽培を縮小する政策をとっていたが市場価格の好調に刺戟されて作付が拡大され天候の不順にもかかわらず増産を招いたものであった。

カナダの生産は前年の21.1百万トンを16%減の17.7百万トンに止ったが、それでも世界生産の4%を占めた。減産の理由は単収の減少で植付面積は78年、79年ともそれぞれ同等であったが単収は1,999Kg/haより1,690Kg/haへと後退したためである。79年は天候が極度に悪く、とくに主要生産地帯のSASKATCHEWAN及びMANITABUにおける被害が影響している。

オーストラリアもまた収穫面積が15%も拡大されながら生産は減少した。それでも79年に達した16.1百万トンは同国の史上記録となった78年度の18.3百万トンに次ぐ記録であり世界生産の3.8%を占めた。

西欧諸国における79年の生産は前年を3.9百万(-6.5%)下廻る60百万トンに終っている。このうちEC諸国では収穫面積のやや減少、単収も当初の予想を上廻ったものの前年に比して低下したため78年度の47.6百万トンから79年の46.1百万トンへと1.5百万トンの減産であり、EC諸国以外の国にも同様の理由により生産の減少をみた国はギリシャ11%、スペイン15%、ユーゴスラビア17%、スウェーデン23%等があげられる。これら4ヶ国における前年比生産減は2.2百万トンに達している。

東欧諸国においても全般的な減産となっており、面積、単収とも西ヨーロッパのそれを下廻るものであった。すなわち、1978年に達した30.4百万トンの記録的生産は79年に23.7百万トンへと落ちた。生産減少の原因は同じく天候不順であるが、多くの国では秋に湿度過剰のため播種が非常に遅れたこと、冬期に気温が極度に下ったこと、最初の降雪が不十分であった反面、しばしば降霜に見舞われたことなどがあげられている。このためハンガリーにおいて35%、ポーランドで30%、ルーマニア25.4%、チェコスロバキア21.4%の減産であった。

一方アジアにおいては中国の顕著な増産の他、他の諸国においてもみるべき増産が記録された。とくにインドが天候に恵まれたこと、改良品種の普及、潤沢な肥料の供給等によって前年比10%増の35百万トンの生産をあげて世界生産の

8%を占めた他、パキスタンにおいても過去に例のない9.9百万トンの生産をあげ、トルコ及びイランの生産もまた満足すべきものであった。

アルゼンチンを含む南米大陸の生産は78年の12.2百万トンに対して79年は11.5百万トンに終わっている。アルゼンチンの生産は全南米の67%を占め、ブラジルがこれに続いており、ブラジルでは植付面積の拡大と播種期における好条件にかかわらず主要生産州のリオ・グランデ・ト・スール州において収穫期の長雨のため大田な増産予想をくつがいて前年並の収量に終わっており、またチリーが天候に尖され前年の生産量(100万トン)の約半分に落ちたことなどが全体的な生産減少へと結びついていた。

アフリカでは78年の生産量9.1百万トンをやや上回る9.3百万トンの生産であった。大陸北部の生産国では不規則な降雨からモロコシ、アルジェリア、ノオス、において減産をみ、エジプトが前年並みの生産を維持したのに対し、8月から9月にかけて豊富な降雨に恵まれた南アフリカでは78年の1.6百万トンより79年には2.2百万トンへと飛躍している。

表21 小表：世界の生産量と単収比較

国 別	生 産 量 1,000ト			単 収 kg/ha		
	1979	1978	1979	1977	1978	1979
ア ジ ア	(112,196)	(121,485)	(130,797)	(1,341)	(1,433)	(1,489)
中 国	45,001	51,002	56,003	1,131	1,198	1,150
イ ン ド	29,010	31,749	31,982	1,286	1,466	1,522
ト ル コ	16,720	16,765	16,560	1,783	1,794	1,781
ソ 連	(92,165)	(120,824)	(90,100)	(1,483)	(1,921)	(1,450)
中 北 米	(77,796)	(72,777)	(78,342)	(2,060)	(2,113)	(2,145)
米 国	55,420	48,922	58,285	2,061	2,123	2,301
カ ナ ダ	19,862	21,146	17,746	1,963	1,999	1,690
ヨーロッパ	(82,113)	(91,615)	(81,263)	(3,300)	(3,620)	(3,413)
ノ ラ ン ス	17,350	20,970	19,393	4,222	5,034	4,773
イ タ リ ー	6,347	9,332	9,142	2,270	2,688	2,603
西 独	7,235	8,118	7,971	1,525	5,013	4,952
英 国	5,274	6,610	7,140	4,900	5,259	5,139
チェコスロバキア	5,214	5,606	4,700	4,071	4,410	4,273
南 米	(9,025)	(12,099)	(11,618)	(1,078)	(1,419)	(1,220)
アルゼンチン	5,300	8,100	7,400	1,355	1,729	1,510
ブラジル	2,066	2,677	2,700	655	956	876
大洋州	(9,724)	(18,410)	(15,827)	(967)	(1,793)	(1,358)
オーストラリア	9,370	18,083	15,500	941	1,775	1,339
世界計	390,770	448,840	420,215	1,662	1,906	1,770

出所：FAO

(国際間取引)国際小麦審議会が1980年中期に行った推定によると小麦及び小麦粉の世界消費量は79年に83百万トンに達しており前年の71.2百万トンに比して16.6%の増加となっている。

輸出側よりみるとト記貿易量の増大はオーストラリアの輸出倍増すなわち前年の7.2百万トンより79年には15.5百万トンに伸ばしたのが大きく影響した。

表22 小麦及び小麦粉の世界貿易量

世界の輸出 100万トン				世界の輸入 100万トン			
輸出国	78	79	全体に占める率 比	輸出国	78	79	全体に占める率 比
米 国	32.4	36.0	43.4 %	アフリカ	12.5	12.9	15.5 %
オーストラリア	7.2	15.5	18.7	ソ 連	5.0	11.0	13.0
カナダ	13.5	15.0	18.1	中 国	8.1	8.0	9.6
アルゼンチン	3.3	4.8	5.8	南米諸国	7.5	7.5	9.0
EC諸国	7.7	10.0	12.0	日 本	5.6	5.8	7.0
ソ 連	2.5	0.5	0.6	東ヨーロッパ	4.3	5.5	6.6
そ の 他	4.6	1.2	1.4	EC諸国	4.5	4.2	5.1
				そ の 他	23.7	28.1	33.9
世界計	71.2	83.0	100.0	世界計	71.2	83.0	100.0

出所：FAO

世界最大の輸出国である米国の増加率はオーストラリアと比較すると極めて少く10%に過ぎないが絶対量が大きいだけに3.6百万トンの輸出増加が全体の貿易量増大に大きく影響したことは確かである。

アルゼンチン、EC諸国及びカナダも79年にはそれぞれ前年比4.5%、3.5%及び1.1%の輸出増を記録したが、ソ連の輸出は極度に不振であった。

一方輸出側よりみるとソ連が国内生産不振のため大巾に輸入を増大したのが注目される。同国は78年度に約500万トンの輸入を行っているが、79年には1.1百万トンに増大せざるを得ない状況であった。

(国際価格)国際価格の基本的な問題としては79/80年の世界生産が当初の予想よりも500万トン減少したことが大きく影響している。すなわち米農政局が80年7月に行った推定では78/79農年の生産量は430百万トンと発表したのが後日42.5百万トンに訂正された。この生産の減少は部分的に年度頭初の生産国におけるストックによって補填されたが、世界生産消費が79/80年に438百万トン(前年比19.9%増)へと増加したため年度末には世界のストックが減少し、供給量と需給量とのギャップが縮まった価格の上昇へと結びついた。

すなわちカンサスにおける先物市場の平均相場をみると、79年の6月及び7月にはトン当たり150.3ドル及び157.1ドルで5月の相場130ドルを上廻っていた。この高値はソ連の不作予想を反映したものであったが他の主要生産国における豊作が伝えられたため、以後の値上りを緩和した。とくに米国の豊作予想とカナダ、インド及びアルゼンチンの生産増が影響している。また米国が1980年に作付面積を減少しないとする公式発表は8月の平均価格を前月比5%下落させている。この頃になるとソ連の生産が停滞しているという予想を裏付けるように米国とソ連との食糧供給に関する協定にもとづいてソ連の250万トンの買付を許可する決定が伝えられると9月には価格が再び上昇し、以後上昇を続けて12月にはトン当たり163.7ドルの最高を記録した。このほか中国による小麦の買付予想や天候不順によるカナダの減収予想なども高価格維持に影響した要素であった。

この様な世界の小麦市場も80年の頭初にはソ連のアフガニスタン侵攻に対する米国及びヨーロッパ、アジア諸国のボイコットによって大きな変化をみるようになった。この政治問題は米国のソ連に対する穀物の輸出中止措置とソ連のアルゼンチンよりの買付け、ブエノス・アイレスFOB価格の高騰など予期せぬ結果をもたらした。

このためカンサスの先物市場においては80年当初4ヶ月にわたり平均相場は継続して下落し、4月には145.1ドルまで下がったが、これはとりもなおさず対ソ連輸出中止によって浮き上った余剰小麦が国内市場に流れた結果である。当然国内

需要には過剰であり、さらに80年度の豊作のニュースまで加わって事態は悪化した。しかし、この傾向も米国の襲った乾魃によりトウモロコシと大豆が大きな被害を蒙るに及んでそれぞれの価格に影響したことから小麦価格も上昇して以後7月には再び160ドル台に達している。

以上にみられる通り小麦価格の変遷は需給関係を基調とするものであるが、他の作物と異なり、それが基本的な食糧であるところから政治上の問題がたとえ一時的なものであったとしても市場の不安定を招き敏感に価格に影響した一つの事例であった。

表23 小麦：カンサス穀物市場における価格の推移

トン当たり平均価格

区 分	1979年					1980年						
	8月	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7
平均価格 USS/TON	149.6	151.6	158.0	158.8	163.7	161.6	161.4	155.5	145.5	154.3	150.1	159.6
前月比率 %	-	4.3	1.2	0.3	3.3	-1.3	-0.1	-3.5	-6.7	6.3	-2.7	6.3

出所：USDA

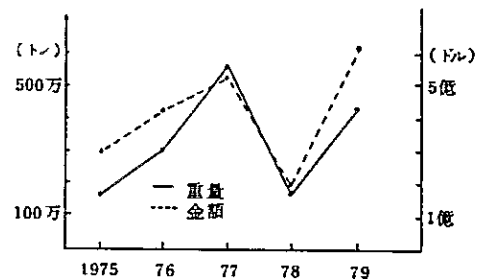
ハ) 市 場

アルゼンチンにおける小麦は重要な国内食糧であるばかりでなく伝統的かつ最も重要な輸出品目の一つである。国内消費量は次期植付面積に応じた種子の必要量いかによって増減するが現時点で年間ほぼ400万トン前後で食糧用330万トン、種子用50～70万トンと見積られている。したがって輸出量は海外の需要というよりも国内生産量に関係し、これが多い場合は輸出を増し、生産が低い場合は国内消費の絶対量が保留されるので輸出量は減少するというように流動する。このことは反面余剰分は問題なく海外市場に販売することが可能であったことも示すものであり、また数少ない基礎的食糧の輸出国としての強みともいえる。

表24 小麦：輸出推移

年 度	輸 出 量 1,000トン			金 額 USS,1000
	パン用小麦	マカロニ用小麦	計	
1975	1,505.1	273.0	1,778.1	300,694
1976	2,968.8	173.8	3,142.6	431,491
1977	5,266.1	372.1	5,638.2	541,374
1978	1,443.0	184.0	1,627.0	173,940
1979	4,148.8	145.7	4,294.5	601,694

出所：I. N. D. E. C



最近では1千万トンの生産を記録した76/77農年産の小麦が77年に560万トン輸出されたあと78年に減少したが79年に再び増加して約430万トンの輸出を行った。これによる外貨収入は約6億ドルに達し同年の農畜産品輸出の10%の比重を占めている。

外国の市場では隣国のブラジルが最も市場であり79年度には約150万トンの輸出が行われた。ブラジルは比較的温暖な南部地方で生産が進められており現在2.6百万トン(80年度)を生産しているが国土の大半は小麦の生産に適さず1億以上の人口をかかえる巨大な消費量はその半分も自給し得ない状況にあり、アルゼンチンとは逆に小麦が最大の輸入農産物

となっているため政府は各種の恩典を与えて生産拡大を図っているが近年中に自給体勢に持ち込む可能性は少なく輸入は今後も継続していく市場である。

フランスに続いて重要な市場は中国で77年と78年に80万トン以上を輸出しており、81年の1月には新たに穀物取引協定が成約している。この協定は84年12月31日までを期限とし年間最低100万トン、最高150万トンの取引きを行おうとするもので、その70%は小麦を含むものとなっている。これはアルゼンチンの穀物の中では小麦が外国との取引契約のもっとも少い穀物であるためで中国との約束を可能とするものであり残りの30%については中国側の希望に応じトウモロコシ、小麦又は大豆のうちいずれかか選ばれる。売買契約が最高限度の150万トンに達する場合、中国は最少限90万トンの小麦をこれに含め残りを上記品目内で選択することになっている。北京において調印された本協定は1981年1月31日までを期限とした従来の協定を更新したものであるが前協定では中国側の買付量が最低80万トン、最高100万トンであったので今回の協定はこれを大巾に拡大したものとなっている。

以上の2大市場に続いてペルー、ソ連、チリー、イタリー等が重要な市場で毎年継続した輸出が行われている。中でもソ連の場合は従来も年によって100万トン近くの輸入を行う大型市場であったが、とくに80年度には、年度当初のアフガニスタン問題を契機としたアルゼンチンよりの買付が増大し、上半期にすでに170万トンの輸入を行ったので年間を通じ最大の輸入が行われたものと思われる(81年6月現在統計未了)。これは同問題を中心とした米国の動きに対し、アルゼンチン外務省が声明した“国と国との政治関係における圧力的手段として経済的罰則を用いないことはアルゼンチンの伝統的な外交政策である”とする方針によるものであったが小麦のFOBペノス価格が米国のソ連ゴイコット直後より急激に上昇したのはいうまでもない。カンサスにおける国際相場下落とは逆の現象であった。

表25 小麦・(パン原料)仕向先別輸出実績

単位 トン

仕向先国	1975	1976	1977	1978	1979
フランス	59,444	726,961	871,274	106,682	1,493,627
中国	65,249	-	849,986	-	885,351
ペルー	-	207,624	256,794	129,013	353,352
ソ連	745,694	827,207	261,857	960,714	238,282
ウルグアイ	350	-	-	13,500	228,813
チリー	119,694	392,825	93,460	22,924	220,995
イタリー	280,417	192,008	330,240	21,077	138,641
パラグアイ	43,812	51,947	43,000	89,501	85,998
ギリビア	11,045	33,480	54,172	48,162	58,290
コロンビア	-	20,400	78,698	-	54,261
ノールウェー	-	13,549	27,512	-	40,069
モロッコス	-	73,447	313,311	19,300	39,300
オランダ	-	57,754	30,916	20,311	23,046
ポーランド	-	12,000	613,241	-	-
ルーマニア	-	-	289,583	-	-
その他の国	179,370	359,622	1,152,066	11,854	288,910
計	1,505,075	2,968,824	5,266,110	1,443,038	4,148,835

出所: COMERCIO EXTERIOR ARGENTINO

以上は主にパン原料用小麦に関するものであり、マカロニ用小麦の市場としてはマカロニの国イタリアが最も重要な市場となっており毎年10～20万トンの輸出が続いている。

表26 小麦(製麺原料):仕向先別輸出実績

単位 トン

仕向先国	1975	1976	1977	1978	1979
イタリー	27,280	60,600	217,842	130,885	98,726
スペイン	-	-	58,500	7,500	3,485
フランス	-	-	-	-	22,430
チリ	-	-	15,050	15,800	-
アルジェリア	103,116	60,726	45,330	-	-
その他の国	142,629	52,461	35,390	29,820	21,063
計	273,025	173,787	372,112	184,005	145,714

出所: COMERCIO EXTERIOR ARGENTINO

小麦の輸出については加工品の小麦粉及びふすまの輸出も加えられるが、このいずれも輸出量は一定しておらず過去5ヶ年間で小麦粉で77年に236千トン、79年61千トン、ふすまでは77年に29千トン、79年は約5000トンの僅かな輸出であった。

ニ) 国内価格

イ) パン原料小麦

ブエノス・アイレス穀物取引所が発表した79年8月より80年7月までの価格推移は次表の通りである。

インフレを除外した実質価格にみられる79年11～12月の下落は次期収穫の不確定要素に対する不安からきたものであったため穀物取引委員会は価格維持のため小麦取引に積極的に介入する意図のあることを明らかにしている。

価格についてはさきに経済省が79年3月、小麦の1俵あたり積出港渡し価格を14,000ペソと定め収穫開始時点の卸物価指数に従って調整する方針を発表していたが、同調整に従うと12月第1週の最低保証価格は1俵あたり24,300ペソとなり、上記12月の価格と合致する。結果的に79年は実質価格において変動はなくむしろ平均価格で78年度を下回る水準であった。また79年10月穀物取引委員会は決議第20,885号により小麦の等級を従来の3段階より5段階に細分化している。

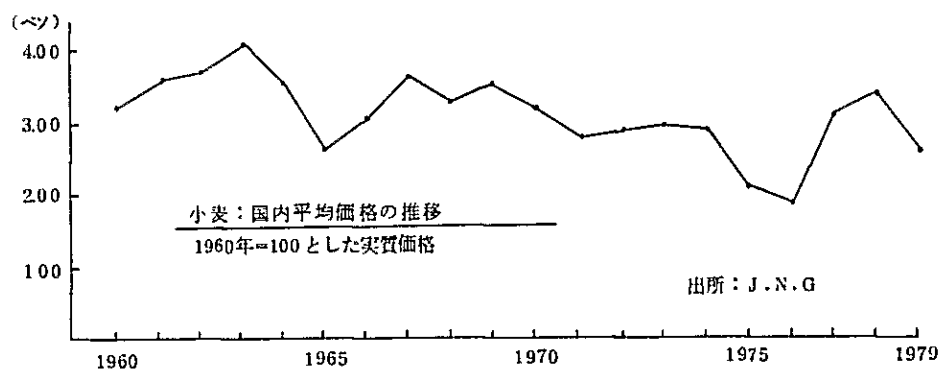
1980年に入るとソ連のアフガニスタン侵攻に対する米国の穀物輸出中止宣言に同調しないこ

表27 小麦:パン原料小麦の価格推移

月別	実 際 価 格		1960年を100とした格	
	金額(ペソ)	前月比 %	金 額	前月比 %
79年8月	φ19,543	07	247	-107
9	21,255	88	254	28
10	23,580	109	272	71
11	24,305	31	271	-04
12	24,183	-05	260	-44
80年1月	26,736	106	276	62
2	27,990	47	276	-
3	28,781	28	271	-18
4	29,070	1.0	264	-26
5	31,819	95	277	49
6	32,916	34	269	-29
7	36,645	11.3	290	78

出所: CAMARA ARBITRAL DE LA BOLSA DE CEREALES.

とを発表した政府決定は直ちに国内市場に反映し穀物の取引は船積を急ぐ輸出業者によって活気を呈し、それが価格に反映したことはいうまでもない。この有利な状態は80年7月まで継続しており従来の慣例を破って播種期より収穫期に向けて高値をみる状態であった。



2.1.2 とうもろこし

イ) 国内生産

表

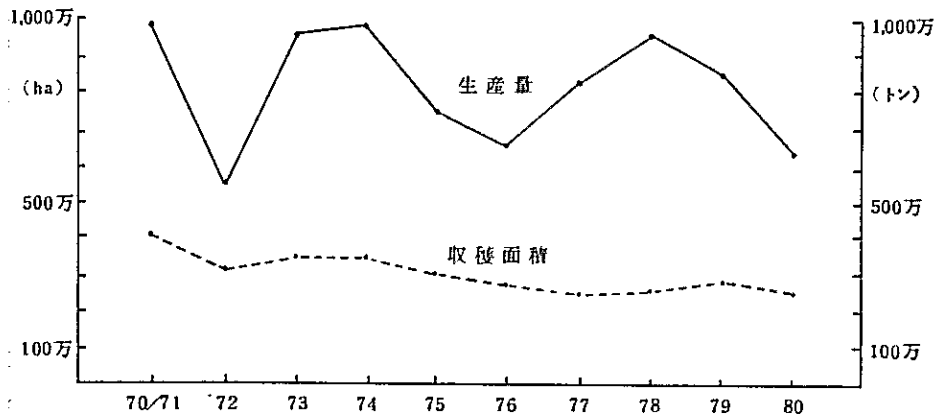
表28 とうもろこし：過去10年間の生産実績

年 度	植 付 面 積	収 穫 率	収 穫 面 積	単 収	生 産 量
	1,000ha	%	1,000ha	kg/ha	1,000トン
1970/71	4,933.0	81.4	4,066.0	2,442	9,930.0
71/72	4,439.2	70.9	3,147.2	1,862	5,860.0
73	4,251.0	83.9	3,565.4	2,721	9,700.0
74	4,134.0	84.3	3,486.0	2,840	9,900.0
75	3,871.0	79.3	3,070.0	2,508	7,700.0
76	3,696.0	74.8	2,765.9	2,117	5,855.0
77	2,980.0	85.0	2,532.0	3,278	8,300.0
78	3,100.0	85.8	2,660.0	3,647	9,700.0
79	3,300.0	84.8	2,800.0	3,107	8,700.0
80	3,310.0	75.2	2,490.0	2,570	6,400.0
71~80年平均	3,807.4	80.3	3,058.3	2,683	8,204.5

出所：S. E. A. G

とうもろこしはアメリカ大陸を原産とする穀物で大陸の先住民によって広く栽培されていた歴史の古い作物である。アルゼンチンにおいても内外の需要に支えられて古くより栽培されており、大豆やソルゴーが導入される以前までは飼料作

物の中では絶対的な位置を保っていた。統計によると今世紀の始めには(1910年)すでに300万ヘクタールの栽培が行われていたが現在の作付面積330万ヘクタールと同規模の栽培であり当時としてはいかに大規模な栽培であったかが伺い知れる。



アルゼンチンにおける栽培の経緯を見ると1921年から30年までの10年間に植付面積は年平均399万haで最盛期の30年代には年間平均631万ヘクタールへと拡大した。この期間中、1936年には植付面積763万ヘクタール、生産量では同35年に1.148万トンの収量をあげており、この記録は今日にいたるまでアルゼンチン史上最高の記録として破られていない。1980年の植付面積330万ヘクタール、生産量640万トンとは大きな開きである。最盛期の1930年代には国内生産の拡大に平行して輸出も伸びており1931年には976万トンというこれも又、史上最高の記録的輸出を行ったか、この時代世界を襲った経済恐慌によって海外市場の急激な停滞と価格の暴落による大打撃が国内の生産に影響したことは小麦の場合と同様である。すなわち40年代に入ると作付面積は年平均394ヘクタールに減少し、同期間中の1949/50年には216万ヘクタールの植付面積に対し生産量84万トン、輸出面では1943年にはわずか19万トン、42年22万トンとそれぞれ史上最低となっており当時の経済恐慌の打撃がいかに大きいものであったかを示している。

栽培面積はその後上下しなから下向に向い50年代を終っていくが、60年代に入ると生産性の向上に対する研究が新しい分野としてとうもろこし栽培に希望を与え生産は次第に復活してくる。1966/67年にはようやく400万ヘクタールを超える栽培規模に戻って復旧の兆をみたものの、この当時より新しい作物としての大豆及びソルゴーへの関心の前にとうもろこしの生産はもはや従来の独占的な位置は失われていく。

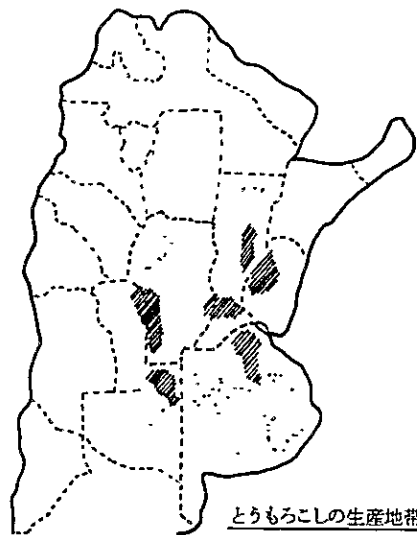


表29 とうもろこし：州別生産実績

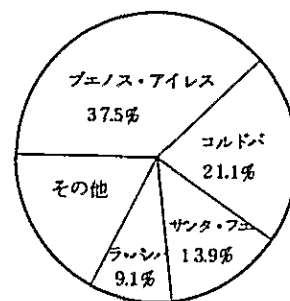
州 別	面 積 1,000ha						生 産 量 1,000トン					
	1975	76	77	78	79	80	1975	76	77	78	79	80
ブエノス・アイレス	1,396.0	1,402.5	1,220.0	1,334.0	1,330.0	1,240.0	3,060.0	3,240.0	4,000.0	4,700.0	3,670.0	2,520.0
コ ル ド バ	640.0	532.0	543.0	560.0	700.0	700.0	1,510.0	636.0	1,560.0	1,880.0	1,918.0	1,220.0
サ ン タ ・ フ ェ	828.0	860.0	470.0	470.0	519.0	460.0	2,253.0	1,382.0	1,850.0	2,200.0	2,100.0	1,515.0
ラ ・ パ ン パ	264.8	1,567.0	1,600.0	2,300.0	2,200.0	3,000.0	1,630.0	540.0	920.0	2,260.0	3,100.0	2,210.0
サ ン ・ ル イ ス	262.0	2,620.0	2,200.0	1,370.0	1,490.0	2,110.0	1,840.0	815.0	3,100.0	1,600.0	2,760.0	3,560.0
エ ン ト レ ・ リ オ ス	243.5	2,609.0	1,600.0	1,360.0	1,480.0	1,350.0	3,147.0	2,202.0	2,400.0	2,210.0	1,260.0	1,040.0
サ ・ エ ス テ ー ロ	736.0	777.0	740.0	780.0	770.0	687.0	500.0	789.0	950.0	1,100.0	980.0	1,150.0
サ ル タ	175.0	153.0	210.0	230.0	264.0	273.0	180.0	171.0	320.0	440.0	570.0	700.0
チ ャ コ	177.0	129.0	100.0	300.0	265.0	360.0	310.0	212.0	120.0	420.0	280.0	930.0
ノ ク マ ン	152.0	152.0	140.0	172.0	180.0	295.0	140.0	355.0	280.0	326.0	372.0	660.0
コ リ エ ン テ	417.0	394.0	330.0	320.0	294.0	272.0	263.0	252.0	250.0	303.0	250.0	180.0
そ の 他	710.0	614.0	550.0	528.0	567.0	633.0	760.0	634.0	560.0	541.0	548.0	1,020.0
全 国 計	3,871.0	3,696.0	2,980.0	3,100.0	3,300.0	3,310.0	7,700.0	5,855.0	8,300.0	9,700.0	8,700.0	6,400.0

出所：S. E. A. G./BOLSA DE CELEARES

とうもろこしは麦グループ（小麦、大麦、ライ麦、からす麦）よりも高い温度（約21℃）よりも多い降雨量（年間平均700mm以上）を必要とする。また小麦の場合よりも多くの肥沃度を必要とするが国内の生産地帯は小麦の場合とほぼ同様でパンパ地方が中心であり、中でもブエノス・アイレス州北部、コルドバ州南東部及びサンタ・フェ州南部が一大生産地帯を構成し、ラ・パンパ州北部、サン・ルイス州が附随する。また小麦と異なって北部地方にも広く普及しているがパンパ地方の様な集中的栽培は行われていない。州別にみるとブエノス・アイレス州が植付面積において37.5%、生産量では39.4%を占めており、コルドバ州において植付面積の21.1%、生産量の19.1%、サンタ・フェ州が面積の13.9%に対し生産量では23.7%と高い比率を示し、この3州を合わせると面積において72.5%、生産量では82.2%を占める。これら主要生産州における過去6ヶ年間の推移をみると収穫面積に大きな変化がない反面生産が急激に減少していることが観察される。これは79/80農年における天候異変に加え害虫による被害が増加したため、作付に対して収穫面積の減少（80年度で75.2%の収穫率）をみたのとヘクタール当たりの単収が極度に減少したことが原因となっており、中でも最大の生産州であるブエノス・アイレス州が植付面積に対する収穫面積が6.5%、単収が過去10年間の平均（3,462kg/ha）にもみ及ばない3,130kg/haの低水準に止ったことが全体の生産を

低下させる大きな理由となっている。とくに80年度にはラ・パンパ州が最大の被害を蒙っており、植付面積30万ヘクタールの中、収穫出来たのはわずかに13万5千ヘクタールという状態で収穫不能地帯は牛の放牧場に切り換えられた。

収穫面積（1980年）



生産量（1980年）

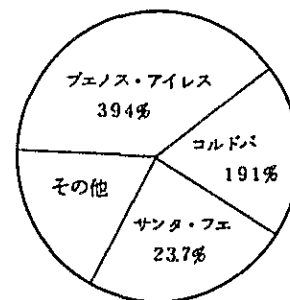


表30 とうもろこし：主要生産州の単収比較

Kg/ha

主要生産州	60年代平均	70年代平均	向上率%	1980年
ブエノス・アイレス	2,289	3,462	51.2	3,130
サンタ・フェ	2,343	3,216	37.3	3,475
コルドバ	1,828	2,296	25.6	2,103
ラ・パンパ	816	1,342	64.5	1,637
サン・ルイス	1,176	1,189	1.1	1,687
エントレ・リオス	1,129	1,652	46.3	1,409
全国平均	1,898	2,686	41.5	2,570

出所：SEAG / BOLSA DE CEREALES

アルゼンチンにおけるとうもろこしの生産性は過去20年間にいちじるしく向上し60年代の平均1,898Kg/haに対し70年代は2,686Kg/haへと伸びている。これは同期間中における栽培技術の向上を示すものであり70年代後半における面積の減少は単収の向上によってカバーされたあとが見られ、この技術向上が他の有利作物に混って生産を支えて来たものといえる。しかしながら世界の単収水準よりみると極めて低く世界の平均をも下廻っており、最高の単収をあげている米国やイタリーに比較すると半分には達していない。

表31 とうもろこし：世界の単収

Kg/ha

主要生産国	1976	1977	1978	1979
米 国	5,517	5,651	6,330	6,865
イ タ リ ー	5,985	6,567	6,704	6,639
カ ナ ダ	5,319	5,796	5,155	5,575
ハ ン ガ リ ー	3,806	4,640	5,039	5,394
北 鮮	5,235	5,200	5,139	5,270
フ ラ ン ス	4,035	5,237	5,286	5,103
ス ペ イ ン	3,493	4,281	4,363	4,852
ブ ル ガ リ ア	4,146	3,774	3,722	4,521
ユ ー ゴ ス ラ ビ ア	3,836	4,252	3,534	4,505
エ ジ プ ト	4,081	3,674	3,985	3,835
ル ー マ ニ ア	3,429	3,048	3,211	3,714
チ エ コ ス ロ バ キ ア	3,598	4,701	4,300	-
オ ー ス ト ラ リ ア	2,801	2,719	2,863	※
ニ ュ ー ジ ー ラ ン ド	7,117	7,460	7,742	※
ア ルゼンチン	2,117	3,278	3,647	3,107

大陸別

中 北 米	4,533	4,627	5,150	5,519
ヨ ー ロ ッ パ	3,851	4,201	4,200	4,595
大 洋 州	4,451	4,220	4,655	4,205
ソ 連	3,069	3,266	3,531	2,137
ア ジ ア	2,008	1,756	1,908	1,908
南 米	1,656	1,849	1,651	1,749
ア フ リ カ	1,225	1,284	1,318	1,199
世界平均	2,862	2,915	3,078	3,225

出所：FAO ※資料不足

ロ) 世界の生産需要動向

米國農務局の資料(78年7月より79年6月まで及び79年7月より80年6月までを各単位とした)をもとにブエノス・アイレス穀物取引所がまとめた世界の生産と需給状況は次表の通りである。

表32 とうもろこし：世界の生産需給

7月～6月間 単位百万トン

国 別	農 年		前 年 比 %	ンフェア %	
	1978/79	1979/80		78/79	79/80
A 世界生産					
米 国	1800	1972	+ 96	466	479
中 国	559	56.9	+ 1.8	14.5	13.8
東 欧 諸 国	279	345	+ 245	72	84
西 欧 諸 国	206	220	+ 68	53	53
ブ ラ ジ ル	163	197	+ 207	42	48
南アフリカ連 邦	82	106	+ 293	21	26
メ キ シ コ	102	92	- 98	26	22
ソ 連	90	84	- 67	24	20
アルゼンチン	90	65	- 278	24	16
カ ナ ダ	40	50	+ 250	1.0	1.2
タ イ	30	33	+ 100	08	08
そ の 他 の 国	421	287	+ 81	109	94
世 界 計	3860	4120	+ 67	1000	1000
B 世界消費					
米 国	121.2	126.4	+ 43	31.8	31.2
中 国	58.9	58.9	-	15.5	14.5
ソ 連	18.6	23.6	+ 26.9	4.9	5.8
そ の 他 の 国	181.6	196.9	+ 8.4	47.8	48.5
世 界 計	380.3	405.7	+ 6.7	100.0	100.0
C 世界輸出					
米 国	51.4	62.3	+ 21.2	7.92	8.46
アルゼンチン	6.7	4.3	- 35.8	1.03	5.8
南アフリカ連 邦	2.7	2.5	- 7.4	4.2	3.5
タ イ	2.1	2.2	+ 4.8	3.2	3.0
そ の 他 の 国	2.0	2.3	+ 15.0	3.1	3.1
世 界 計	64.9	73.6	+ 13.4	100.0	100.0
D 世界輸入					
ソ 連	9.6	15.2	+ 58.3	1.43	2.07
日 本	10.9	11.6	+ 6.4	1.63	1.88
E C 諸 国	12.0	10.7	- 10.8	1.79	1.45
東 欧 諸 国	5.2	8.9	+ 71.2	7.8	12.1
ス ペ イ ン	4.2	1.1	- 2.4	6.3	5.6
台 湾	2.6	2.6	-	3.9	3.5
メ キ シ コ	1.3	2.6	+100.0	1.9	3.5
ポルトガル	2.0	2.3	+ 15.0	3.0	3.1
韓 国	2.7	2.2	- 18.5	4.0	3.0
中 国	3.0	2.0	- 33.3	4.5	2.7
そ の 他 の 国	13.4	11.4	- 14.9	20.0	15.5
世 界 計	66.9	73.6	+ 10.0	100.0	100.0
E 年度末ストック					
米 国	32.7	42.6	+ 30.3	6.76	7.63
そ の 他 の 国	15.7	13.2	- 15.9	3.24	2.37
世 界 計	48.3	55.8	+ 15.5	100.0	100.0

出所：U. S. D. A / OLSA DE CEREALES BUENOS AIRES

前表によると79/80農年の世界生産は全般的な植付面積の増加と単収の向上により前年を67%上回る4億1千200万トンに達している。生産国別にみると米国が圧倒的に大きく、2億トン弱の生産をあげて世界生産の50%近くを占める最大の生産国であり、国内消費量(約1億3千万トン)を引いても5千万トン~6千万トンの余剰を持ち世界供給量の80%以上を占める。生産量で米国に次ぐ中国は世界生産に13.8%のシェアを占めるが国内消費が供給を上廻っており、世界第3位のブラジルも又国内の飼料需要に追われて輸出余力を持たず結局生産量では世界生産の1.6%に過ぎないアルゼンチンが米国に次ぐ輸出国となっており78/79農年において世界輸出の10.3%、79/80農年では5.8%のシェアを占めた。

需要側については伝統的なEC諸国の輸入が減少し、世界最大の輸入国であった日本が64%の輸入増に止ったのに対し、大型の消費国であり、生産が常に消費を下廻るソ連が単収の減少から更に生産を落し輸入を極度に増加(58.3%)したこと、東欧諸国も前年比71.2%と輸入が増加したことが注目される。

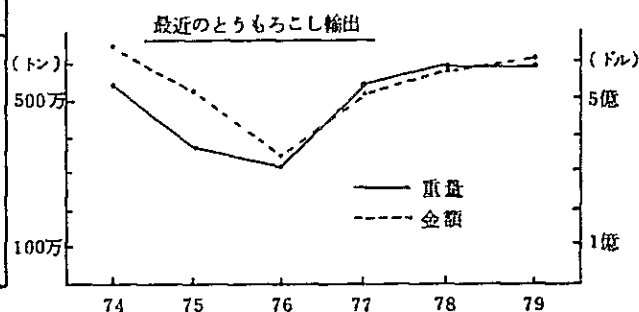
以上の諸国を中心とした世界の貿易は79年において73.6百万トンをもって均衡している。

アルゼンチンの輸出:アルゼンチンよりの輸出量は国内生産全量の60%以上に相当し、品質のよさから海外市場での競争力は強い。過去6年間の輸出量は年間平均約500万トンで76年以降輸出は上向きである。

表3.3 とうもろこし:輸出実績

年度	重量 1,000トン	金額 US\$100万
1974	5,525	6,579
1975	3,883	5,159
1976	3,080	3,625
1977	5,430	5,178
1978	5,985	5,871
1979	5,959	6,056

出所:



主要仕向先国はソ連、イタリー及びスペインでこの3国で総輸出量(79年度)の76%を占めた。1980年については年間の統計はまだ発表されていないが上半期で1,954.5千トンに達し、その87%はソ連の買付によっている。この輸出量は79年同期に比して49.3%の減少であり、天候不順による79/80農年の生産が減少したことをもつとも大きな理由としているが、アフガニスタン問題に端を発した米国の対ソ輸出中止措置を利用した穀物相場投機を防ぐため穀物取引委員会が穀物及び副産物の輸出登録を一時的に中止したことも輸出減少の理由となっている。とうもろこしについては1月29日以降輸出登録が復活している。

アルゼンチン産とうもろこしの今後の輸出について特記すべき事項は80年1月を起点とし、以後5ヶ年間に年間400万トンの飼料穀物(とうもろこし及びソルゴー)の輸出契約をソ連との間に行ったことがある。農牧省によると80年7月に調印されたこの取引契約は穀物生産者に対し今後の販路についての不安を解除したものであるとしている。

表34 とうもろこし：仕向先別輸出実績

単位 1,000トン

仕向先国	1975	1976	1977	1978	1979
ソ 連	5435	2636	4057	1,792.6	1,618.9
イ タ リ ー	1,316.4	1,731.4	1,811.3	1,578.5	1,496.9
ス ペ イ ン	479.2	480.3	1,203.1	1,003.7	1,460.8
キ ュ ー パ	314.2	168.3	174.8	233.6	199.1
ン ガ ボ ー ル	-	80	235.3	38.1	184.2
オ ラ ン ダ	42.9	108.7	122.0	114.1	114.8
チ リ ー	47.4	21.7	108.2	204.4	96.7
ブ ル ガ リ ア	-	-	61.7	143.9	68.6
英 国	15.8	73.1	129.4	25.2	73.4
ア ン ゴ ラ	-	-	-	20.2	66.7
ベ ネ ズ エ ラ	-	50.1	27.1	-	67.5
イ ラ ノ	-	-	-	35.4	61.5
西 独	2.0	2.5	23.3	43.0	60.7
ベ ル ギ ー	31.4	19.7	40.2	38.2	42.7
ノ ー ル ウ ェ ー	-	-	0.3	-	19.5
ソ バ ノ	-	-	28.2	12.2	19.7
日 本	9.8	2.2	193.9	98.1	18.4
そ の 他 の 国	1,080.3	150.3	862.8	603.3	288.9
合 計	3,882.9	3,079.9	5,430.3	5,984.5	5,959.0

出所：J. N. G.

国際価格：

表35 とうもろこし：シカゴ穀物取引所における平均価格

区 分	1979年					1980年						
	8月	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7
USS/トン	111.00	108.79	109.45	105.64	113.15	107.98	107.01	106.20	105.48	110.21	109.82	124.72
前月比(%)	-7.8	-2.0	+0.6	-3.5	+7.1	-4.6	-0.9	-0.8	-0.7	+4.5	-0.4	+13.5

出所：BOLSA DE CELEARES BUENOS AIRES

最近の国際価格については、シカゴ穀物取引所の79年8月～80年7月までの平均価格の推移により次の事項が観察される。

イ) 79年度は8月より11月にかけて価格は下降した。これは8月頃すでに豊作が予想されたためであり、10月だけ前月を上廻ったのは米国における天候異常が一時的に懸念されたためである。

ロ) 12月には米国イラン間の緊迫した政治情勢が価格に影響し7.1%の上昇をみた。

ハ) しかしこの高値も一時的なもので直後の80年1月にはアフガニスタン問題に端を発した米国の対ソ穀物輸出中止措置によって停滞した穀物市場は直ちに価格に反映し以後4月まで下降が続く。

ニ) この対策として米国政府がとったCOMODITY CREDITO CORPORATIONを通じた穀物の大量買付等の措置によって価格の下落は緩和され5月に価格の回復がみられた。

その後はこれら商品の放出という懸念もあったが、それが実現しないうちに5月以降米国のとうもろこし地帯を襲った乾ばつの影響により価格は上昇し7月にはトン当たりUSS 1 24, 7 2の最高記録を作った。

国内市場：とうもろこしの国内消費量は生産量の約15%といわれているが、輸出量が国際相場如何によって大豆、ソルゴーとの間で互いに代替えられるので、国内市場に向けられる量は小麦の場合とは異なり非常に流動的である。穀物取引委員会が行った推定によると78年度の国内消費量約400万トンに対し79年、80年は280万程度とみている。これはとうもろこしの市場が基本的に海外市場にあるため国際相場の好況によって輸出が伸びる場合、国内飼料需要はソルゴーによって代替えられることを意味している。

表36 とうもろこし：国内推定消費量

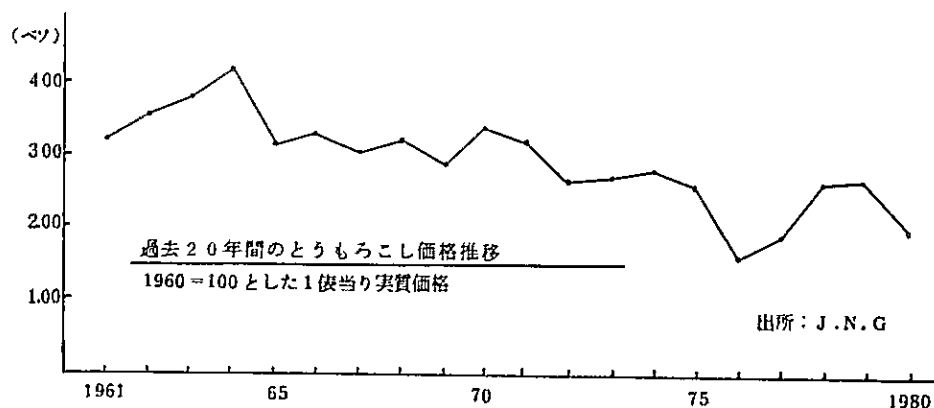
単位 トン

年度	国内生産量	3月1日在庫	3月～翌年2月迄の輸 出量	国内推定消費量
1977/78	9,700,000	146,229	5,916,396	3,929,833
1978/79	8,700,000	108,668	5,971,223	2,837,445
1979/80	6,500,000	39,204	3,700,000	2,859,204

出所：J. N. G.

専門筋によるととうもろこしの方がソルゴーよりも飼料としての価値は高いが価格の差から一般にソルゴーを利用する傾向にあるという。

とうもろこしの国内価格については卸し物価指数を基準として1960年価格に戻した1俵あたり平均指数は次のグラフに示す通りである。過去20年間における実質価値は1964年を頂点として以後減少を続け1976年に最低値にいたったあとやや復活している。



79年8月より80年7月にいたる最近1年間の価格についてみると79年度の生産量が前年比10%の減少をみたにもかかわらず価格の好転はなく、国際市場価格と同様の傾向で8月に下落、12月に上昇をみている。80年の1月と2月は79/80年の収穫が天候不順の影響をどの程度受けたか不明であったことが買手に不安材料を与えたこと、及びアフガニスタン問題にかかわるソ連の買付が価格上昇の原因となっている。また80年7月の上昇は国際価格の場合と同様に北米にお

ける乾ばつの影響であり、このためアルゼンチン産の需要が増加したためである。しかし実質価値で見ると79年8月の200から80年7月の1.99と年間を通じて大きな差はなかったとみてよい。

表37 とうもろこし：最近の国内価格推移

月 別	実 際 価 格		実 質 価 格	
	金 額	前 月 比	1960=100	前 月 比
1979年 8月	15,818	- 66	200	-167
9	16,325	32	195	- 25
10	16,035	- 18	185	- 51
11	16,668	40	186	05
12	18,889	133	203	91
1980年 1	23,463	212	242	192
2	24,114	28	238	- 1.7
3	23,267	- 35	219	- 80
4	24,405	49	222	1.4
5	22,176	- 92	193	-131
6	22,811	29	186	36
7	25,223	106	199	7.0

出所：CAMARA ARBITRAL DE LA BOLSA DE CEREALES DE BUENOS AIRES.

2. 1. 3 ソルゴー

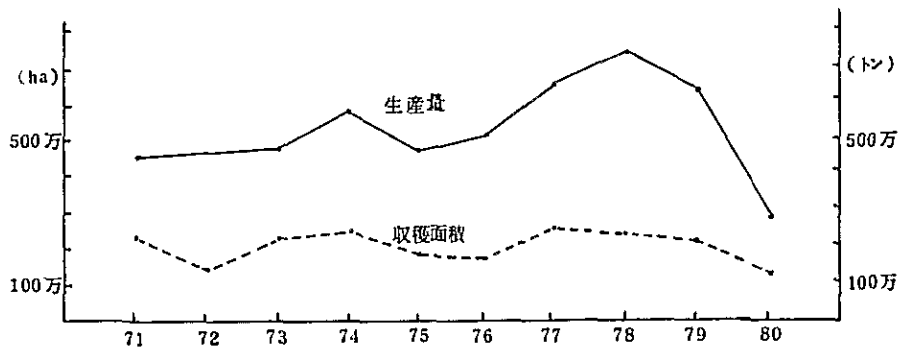
イ) 国内生産

表38 ソルゴー：過去10年間の生産実績

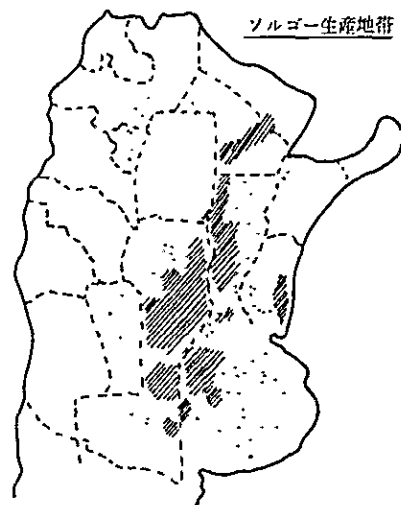
年 度	植付面積	収 穫 率	収 穫 面 積	単 収	生 産 量
	1,000ha	%	1,000ha	Kg/ha	1,000トン
1970/71	3,121.6	71.6	2,234.6	2,085	4,660.0
72	2,759.0	51.4	1,419.4	1,663	2,360.0
73	2,974.4	71.6	2,130.8	2,328	4,960.0
74	3,114.0	74.6	2,323.7	2,539	5,900.0
75	2,601.8	74.5	1,937.5	2,493	4,830.0
76	2,357.8	77.8	1,831.4	2,758	5,060.0
77	2,780.0	85.5	2,377.0	2,776	6,600.0
78	2,650.0	85.1	2,254.0	3,194	7,200.0
79	2,530.0	80.8	2,044.0	3,033	6,200.0
80	1,881.0	67.9	1,279.0	2,314	2,960.0

71~80平均	2,677.3	74.1	1,983.4	2,558	5,073.0
---------	---------	------	---------	-------	---------

出所：S. E. A. G



アルゼンチンにおけるソルゴの栽培は比較的新しく、商業ベースでの栽培は50年代より開始されている。しかしながら、その飼料としての適性に加え、ヘクタール当たりの高生産性やとうもろこしと比較して栽培が容易であることなどのため国内外の需要を刺激し栽培面積は急激に拡大して1961年に植付面積は100万ヘクタールに達し生産量はその前年にすでに100万トンを超えた。10年後の1970年には312万ヘクタールの植付けが行われたが、これを植付面積における史上最高記録とし73年にふたたびその水準に達したあと減少し1979年の植付けは188万ヘクタールに終わっている。一方生産量の方は75年以降の面積減にかかわらず単収の増加から77/78農年には700万トンを超えて前後の年も600万トン以上の生産をあげたが79/80農年は植付面積、収穫量、単収がいずれも低下したため296万トンへと急激な減少となった。この年の植付減少は播種期の9月に気温が低下して植付けを不可能とした地域があったのを主な理由としており、植付面積に対する収穫面積比率の低下は成育期の1月に降雨が不足したため刈り取りのものがそのまま放牧場として直接家畜飼料に利用されたことによっている。また単収の減少は同じく1~2月の降雨不足が影響したもので草の成育が悪く、また一部の地域では強風による転倒や鳥の被害もみられたことなどが大きな理由である。



国内の生産地帯は小麦、とうもろこしの場合と同じくパンパ平原に集中するが中でもコルドバ州が面積において30%、生産量で40%以上を占める点は小麦やとうもろこしの場合と異なる特徴である。75年~80年の推移をみるとコルドバ、ブエノス・アイレス及びサンタ・フェの主要3州がそれぞれ77年を頂点として以後生産が減少に向っているのに対し、チャコ及びラ・パンパ両州において栽培面積が増加していることが注目される。

表39 ノルゴ-：州別生産実績

州 別	植 付 面 積 1,000ha						生 産 量 1,000トノ					
	1975	76	77	78	79	80	1975	76	77	78	79	80
コ ル ド バ	8770	7295	9500	8100	8110	5660	2,0200	1,3640	2,5000	2,7000	2,5910	7770
ブエノス・アイレス	5295	5787	6000	6700	5860	3650	9900	1,6110	1,5100	2,0000	1,3000	4370
サンタ・フェ	4800	4400	5300	5340	4800	3940	7900	10,500	12,300	12,250	10,580	7960
チ ャ コ	890	1303	1830	1167	1520	1495	1,446	3150	4200	2330	2187	3960
ラ・パノバ	3040	1515	1490	2035	2460	1876	3600	1790	2680	4000	6000	2160
フォルモーサ	693	373	400	365	370	405	1410	731	950	700	521	1090
エントレ・リオス	1290	1652	1640	1800	1020	802	2220	3320	3100	4040	1510	950
サンチャゴ・デル・エステロ	345	367	500	493	500	557	425	410	700	850	860	970
コリエンテス	243	217	300	135	156	67	437	538	750	260	370	147
サンルイス	554	572	700	245	400	295	556	190	900	340	856	141
ツクマノ	73	75	50	40	24	09	116	174	130	100	46	18
そ の 他	25	22	90	80	80	84	60	47	190	130	160	64
全 国 計	26018	23578	27800	26500	25300	18840	48300	50600	66000	72000	62000	29600

出所：S. E. A. G.

とくにチャコ州においては全国の栽培面積に占める割合はわずかなものであるが60年代の平均4.9千ヘクタールより80年には15.0千ヘクタールへと拡大されている。これは主に従来この地方を支配していた綿の単一栽培が多様化され始めたことを示すものである。

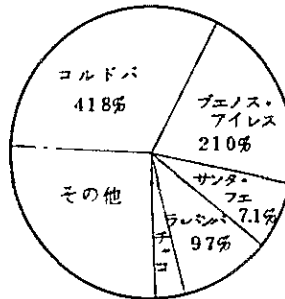
植付面積に対する収穫面積の比率は表39に見られる通り過去10年間の平均は74.1%であった。つまり35.9%の面積が収穫

されないまま放棄された形となるが、これは未利用のまま放棄されたのではなく天候不順などで実の収量が少いとみられた場合牛を放してそのまま飼料として利用されたためである。栽培初期の頃はこの方法が一般的であったが、ソルゴ-がとうもろこしと共に配合飼料として利用されるようになってからは実を収穫する方法が一般的となり放牧は特別の場合に限られるようになった。79年でみるとこの収穫率はチャコ州において100%、サンタ・フェ州83%、コルドバ州60%、ラ・パノバ州59%、ブエノス・アイレス州52%と各州の気象条件に従ってそれぞれ異なっている。収穫は4月より開始され5月に大半が終了する。

ロ) 世界の生産需要動向

1980年3月FAOが行った推定によると1979年度の世界穀物生産量は1,533百万トンで飼料作物はその48%にあたる737百万トン、この中ソルゴ-は67百万トンで9%に相当する。78年の世界生産量は687百万トンであったので79年には25%低下したことになる。これは単収の増加にかかわらず収穫面積が78年の52百万haから79年は509百万haに減少したのを主な理由としている。

生産量 (1979年)



植付面積 (1979年)

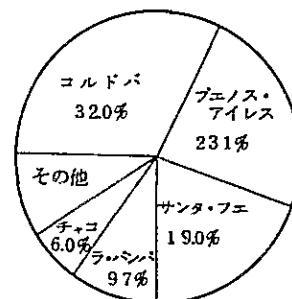


表40 ソルゴ：世界生産とアルゼンチンの位置

大陸及び 主要生産国	生産量 1,000ト/			単収 Kg/ha		
	1977	1978	1979	1977	1978	1979
中北米	(24,919)	(23,651)	(25,308)	(3,284)	(3,207)	(3,510)
米 国	20,143	18,995	20,684	3,532	3,461	3,947
メキシコ	4,325	4,185	4,010	3,060	2,997	2,754
アジア	(24,455)	(23,932)	(22,527)	(917)	(901)	(860)
中 国	11,008	11,015	11,515	1,295	1,295	1,265
イ ン ド	12,064	11,563	10,000	739	717	645
アフリカ	(9,974)	(10,759)	(9,995)	(712)	(725)	(710)
ナイジェリア	3,700	3,800	3,785	617	633	631
ス ダ ン	2,017	2,408	2,200	725	782	815
南 米	(8,121)	(8,736)	(7,368)	(2,610)	(2,941)	(2,765)
アルゼンチン	6,730	7,360	6,200	2,735	3,140	3,033
大洋州	(959)	(720)	(1,026)	(1,794)	(1,816)	(2,205)
ヨーロッパ	(637)	(772)	(682)	(3,307)	(3,930)	(3,378)
ソ 連	(137)	(96)	(100)	(1,522)	(1,091)	(1,111)
世界計	69,201	68,666	67,005	1,326	1,310	1,307

出所：FAO

世界最大の生産国は米国で高い単収により世界生産量の30%以上に当たる2千ト/前後の生産が続いている。この米国を含む中北米は世界5位のメキシコを加えて大陸別では世界最大の生産圏となっている。

中北米に続くアジアでは世界最大の栽培面積を持つインドを含むが、いずれも単収が極度に低いため生産量は1千ト/に止っている。この2大生産圏に続く大陸としてはアフリカ大陸が南米大陸をしのぐが国別ではアルゼンチンの生産が大きく世界4位の位置を占め世界生産の約10%、南米大陸で85%という圧倒的なシェアである。ヨーロッパは土地の生産性においてはすぐれているが栽培面積は僅少であり生産量は少ない。アルゼンチンの単収は主要生産国の中では米国に次ぐ高い水準であり世界の平均を大きく上廻っている。

国際取引：USDAが発表した79年7月より80年6月にいたる世界のソルゴ貿易に関する資料によると輸出入量はいずれも78年において104百万ト/、79年が122百万ト/で均衡している。世界の輸出国についてみると米国の輸出増大が目立っており78年の51百万ト/より79年は86百万ト/へと69%の増加で世界取引量に占めた比率は70%に達した。アルゼンチンは米国に次ぐ輸出余力を持つが78年に米国に迫ったシェア(408%)を79年には国内生産の減少から17.9%へと落している。アルゼンチンの減少にもかかわらず米国の輸出増加により2年間を通じ両国の輸出量は世界貿易全量の約90%を占めた。

需要側についてみると最大の輸入国は日本で78/79年には52百万ト/の輸入を行っており世界輸入量の50%を占める。また79/80年ではメキシコ及びスペインの輸入増大が目立っており、ソ連が初めて50万ト/の輸入を行ったのもこの年の特徴であった。

表41 ソルゴ-世界貿易

(輸出国)	1978/79(7月~6月)		1979/80(7月~6月)	
	US\$ 1,000	シェア %	US\$ 1,000	シェア %
米 国	5,076	48.7	8,600	70.8
アルゼンチン	4,255	40.8	2,175	17.9
オーストラリア	516	4.9	630	5.2
その他の国	583	5.6	745	6.1
世界計	10,430	100.0	12,150	100.0
(輸入国)				
日 本	5,153	49.4	5,000	41.2
メキシコ	1,518	14.5	2,200	18.1
スペイン	361	3.5	1,000	8.2
ベネズエラ	440	4.2	231	1.9
ソ 連	-	-	500	4.1
その他の国	2,958	28.4	3,219	26.5
世界計	10,430	100.0	12,150	100.0

出所: USAD / BOLSA DE CEREALES

アルゼンチンの輸出: アルゼンチンのソルゴ輸出は1956年に開始されて以来年々増加し78年に450万トンの記録を作っている。79年は国内生産の不振から前年比13.8%減少し390万トンに終わったが、これも77、78年に次ぐ大型輸出量であった。アルゼンチン産ソルゴの最大の市場は日本で79年度の買付量236万トンは全ソルゴ輸出量の60%に相当する。日本に続く重要な市場としてはスペイン及び台湾があり79年にはそれぞれ38万トン及び26万トンの輸入を行った。これらの輸出による外貨収入は3億ドルを越えている。

1980年度についての輸出統計ははまだ発表されていないがブエノス・アイレス穀物取引所の機関誌によると80年7月2日現在で104万トン程度に止まっているという。この間仕向先国についても変化がみられており伝統的な顧客である日本が買付けていない反面、全く新しい買手としてソ連が現われて約56万トンの輸入を行った。このソ連の買付けはとうもろこしの項で述べた通り5ヶ年間を期間とした穀物売買契約に基づくものであり、これを中心とした今後の輸出先市場構成は大きく変化していくことになる。

表42 ソルゴ：輸出実績

1,000トン

仕向先国	1975	1976	1977	1978	1979
日本	6670	1,214.9	2,128.1	2,488.8	2,367.6
スペイン	5796	363.2	164.9	273.8	380.5
台湾	269	232.8	350.6	336.8	259.0
メキシコ	3264	145	98.1	278.8	169.2
ルーマニア	-	157.9	348.7	251.8	146.2
ポルトガル	91.7	252.8	-	130.2	84.0
オランダ	124.2	397.1	190.7	55.3	68.4
ベネズエラ	-	100.0	241.6	201.3	-
西独	-	28.8	28.2	2.7	57.5
チャリ	-	-	6.3	31.9	40.2
イラン	230	75.9	82.1	184.6	36.9
中国	-	-	26.4	-	27.4
ベルギー	137.2	250.2	59.4	30.8	25.7
その他	178.4	348.3	491.5	256.2	235.8
計	2,154.4	3,436.4	4,216.6	4,523.0	3,898.4

出所：I. N. D. E. C 1 J. N. G.

国際価格：ソルゴはアルゼンチンにとって重要な輸出商品であり生産量の50%を海外市場仕向けに依存しているため国際価格は国内価格に直接影響する。一方国際価格は世界貿易量の70%を占める米国の生産需要がそのきめ手となる。従ってソルゴの価格については米国内の需給関係を観察することから始めなければならない。すなわち米国の保有するストックと需要量との相対関係がそのまま価格に表われる。この関係を表わすものとして75年より80年にいたる総需要量に対するストックの比率と輸出価格との関係は次表の如くである。

表43 ソルゴ：米国の在庫/需要と輸出価格

区 分	74/75	75/76	76/77	77/78	78/79	79/80
総需要量に対する在庫比率%	55	69	134	276	204	85
トン当たり平均価格US\$	123	111	98	89	96	116

出所：U. S. D. A

上表にみられる通り79/80年には在庫比率が85%に減少したため価格は前年の96ドルより116ドルと上昇した。在庫比率の減少は次表によって説明される。

表44 ソルゴ-：米国における需給関係

単位 百万トン

摘 要	78/79	79/80	対 比 %
年 度 期 首 在 庫	185	405	- 167
生 産 量	1900	2068	+ 88
供 給 量 計	2385	2472	+ 36
国 内 消 費 量	1455	1390	- 45
輸 出 量	526	889	+ 690
総 需 要 量	1981	2279	+ 150
年 度 期 末 在 庫	404	193	- 52
総需要に対する在庫比率	204 %	85 %	

出所：U. S. D. A. 1 BOLSA DE CEREALES

上表に見られる通り80年当初のストックは前年よりも16.7%低く生産の増加がこれを緩和し全体的に供給力を増加した。これに対し国内消費は前年比やや減少(-4.5%)したものの輸出がいちじるしく(+690%)増加したため総需要量は前年を15%上廻ることとなり期末在庫を減少させた。

以上を反映した米国よりのソルゴ-輸出価格及びロッテルダム穀物取引市場における相場は次表の通りであり、両表にみられる80年7月の価格上昇は米国の穀物地帯における乾ばつの被害を反映したものである。

表45 ノルコ-：米国のノルコ-輸出価格推移

区 分	1979年					1980年						
	8月	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7
トン当たり平均価格 USS	111	113	116	116	118	112	119	115	115	116	119	133
前 月 比 率 %	-	1.8	2.6	-	1.7	-5.1	6.2	-3.4	-	0.9	2.6	11.8

出所：FAO / BOLSA DE CEREALES BUENOS AIRES

表46 ソルゴ-：ロッテルダム市場価格推移

区 分	1979年					1980年						
	8月	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7
トン当たり平均価格 USS	145	142	146	147	149	149	147	147	146	149	150	162
前 月 比 率 %	-	-2.1	2.8	0.7	1.4	-	-1.3	-	-0.7	2.1	0.7	8.0

出所：全上

ハ) 国内市場価格

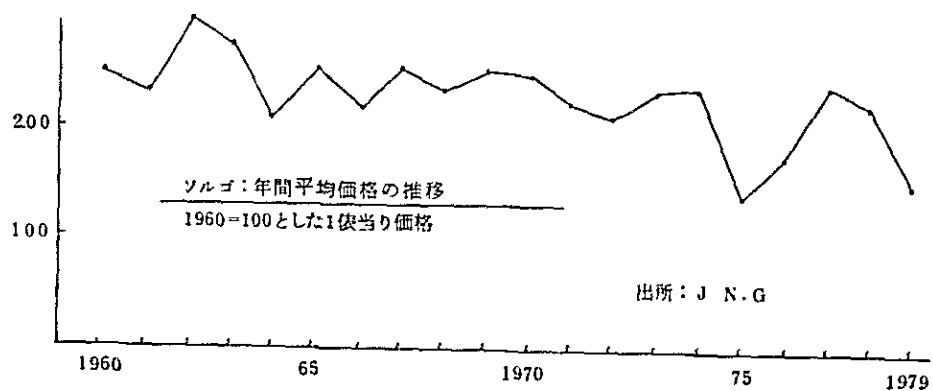
ブエノス・アイレス穀物取引所が発表した最近の国内価格は表47に示す通りである。同表によると79年の価格は輸出部門の需要が緊急でなかったため低迷したが12月には79/80農年の収穫が不調に終る見通しがほぼ確定的となったため反発し、80年始めの数ヶ月間の傾向が継続した。同時に80年の年頭にはソ連の買付けによって輸出部門の需要が増加したことも価格の上昇に輪をかけている。

さらに国内飼料工場の原料需要が加わり実質値における価格は4月に頂点に達している。これはアルゼンチンの最大の競争相手である米国の天候不順により飼料作物の全般的な不作が予想されたからであった。

表47 ソルゴ：最近の国内価格推移

月 別	実 際 金 額		実 質 金 額	
	ペ ン	前月比%	1960=100の価格	前月比%
1979年 8月	12,214	-4.9	154	-15.4
9	12,725	4.2	152	-1.3
10	13,839	8.8	159	4.6
11	14,441	4.4	161	1.3
12	16,461	14.0	177	9.9
1980年 1	17,609	7.0	182	2.8
2	17,724	0.7	175	-3.9
3	20,795	17.3	196	12.0
4	22,695	9.1	206	5.1
5	20,276	-10.7	176	-14.6
6	20,705	2.1	169	-4.0
7	22,855	10.4	181	7.1

出所：



2.14 大 麦

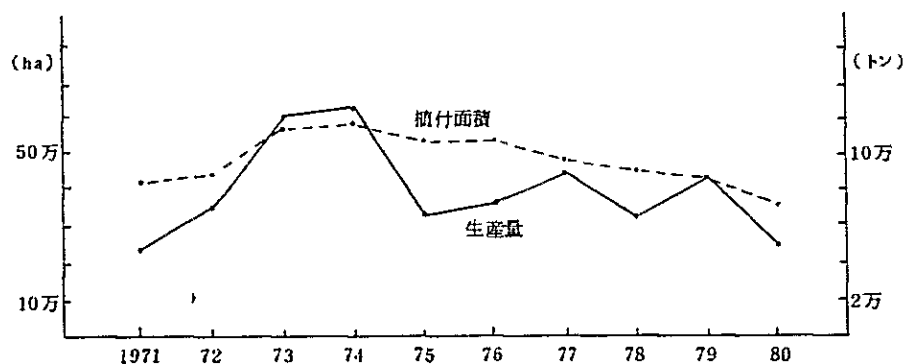
イ) 国内生産

表48 大麦(飼料用) 過去10年の生産実績

年 度	植付面積 1,000ha	収穫率 %	収穫面積 1,000ha	単収kg/ha	生産量1,000トン
1970/71	4028	119	482	1,006	485
72	4463	166	742	1,038	770
73	5770	187	1080	1,111	1200
74	5812	175	1015	1,222	1240
75	5302	123	654	994	650
76	5363	126	677	1,106	749
77	4970	129	643	1,400	900
78	4600	130	600	1,050	630
79	4310	155	670	1,254	840
80	3700	130	480	1,104	530

1971~80平均	4832	146	704	1,135	799
-----------	------	-----	-----	-------	-----

出所: S. E. A. G



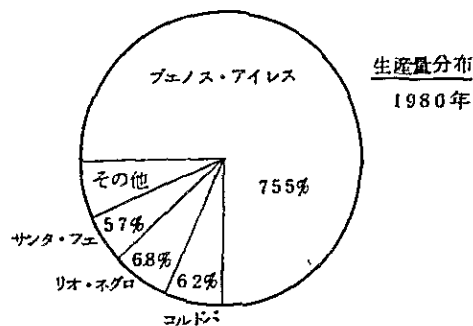
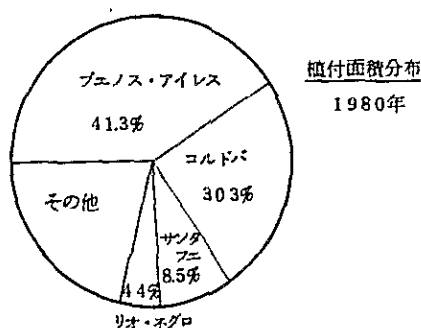
アルゼンチンで栽培されている大麦は飼料用大麦とビール原料用大麦に大別される。栽培条件や栽培地域等は同じであるが使用目的が異なるためビール原料の場合は穀物の収穫を主目的とし、飼料原料の場合は配合飼料原料としての穀物収穫のほか畑に放牧して直接飼料とされることも多い。したがってこの2種の大麦は統計上も区分されている。

上述の通り飼料用大麦は畑のまま飼料として利用されることが多いため植付面積に対する収穫面積の比率が低く過去10年間の平均をみてもわずかに15%弱である、したがって植付面積の推移の方が統計上重要な意味を持っている。植付面積については過去20年間の推移をみると60年代はほとんど40万ヘクタール以下であったものが70年代に入って急激に増加しており、74年には20年間で最高の58万ヘクタールの植付けが行われ、これを頂点として以後再び下降して80年にふたたび40万ヘクタールを割った。

表49 大麦(飼料用):州別生産実績

州	植付面積 1,000ha						生産量 1,000トン					
	1975	76	77	78	79	80	1975	76	77	78	79	80
ブエノス・アイレス	2243	2065	1810	1680	1620	1530	482	541	698	460	640	400
コルドバ	1332	1586	1590	1460	1513	1130	23	48	18	17	25	33
サンタ・フェ	850	775	615	540	440	313	37	64	60	50	60	30
リオ・ネグロ	43	70	78	78	162	162	36	26	47	19	63	33
メンドーサ	137	141	155	160	155	154	05	04	04	04	05	-
サンルイス	61	68	71	55	60	100	08	-	-	-	-	07
ラ・パンパ	287	278	285	340	140	99	45	55	45	40	20	11
エントレ・リオス	197	222	230	140	75	75	03	12	07	-	-	-
ノクマン	38	32	31	36	37	37	-	07	03	23	14	-
サノ・ファン	36	36	29	31	27	27	07	07	07	12	11	14
ネウケノ	05	06	07	06	05	03	04	05	06	05	02	01
その他の州	73	84	69	74	76	70	-	-	05	-	-	01
全国計	5302	5363	4970	4600	4310	3700	650	749	900	630	840	530

出所:



国内の生産地としてはブエノス・アイレス、コルドバ及びサンタ・フェ州などパンパ地帯を形成する3州が大きく80年を例にとるとこの3州で植付総面積の80%を占める。この地帯は国内の牧場地帯でもあり、これらの牧畜用の飼料として植付けられるためである。上述の通り飼料用大麦は青物のまま大半が利用されるか順調に成育したものや、放牧の必要がないものについては実が収穫される。植付面積に対するその収穫率はブエノス・アイレスにおいて大きくコルドバは過去20年間植付面積の8%以上は収穫したことがないといわれる程そのほとんどが青田のまま飼料に利用されているため穀物としての収穫量は少ない。

このような性格から穀物の単収向上へのための努力はみられず過去20年間を通じて変化のない単収が続いている。すなわち1959年当時すでに1,000Kg/ha、60年には1,100Kg/haであったが79年の単収も1,104Kg/haという状況にあり、主要産地のブエノス・アイレス州においても過去20年間にわずか1%向上した1,200Kg/haに終っている。結局穀物としての生産は1979/80農年において53千1止りであった。

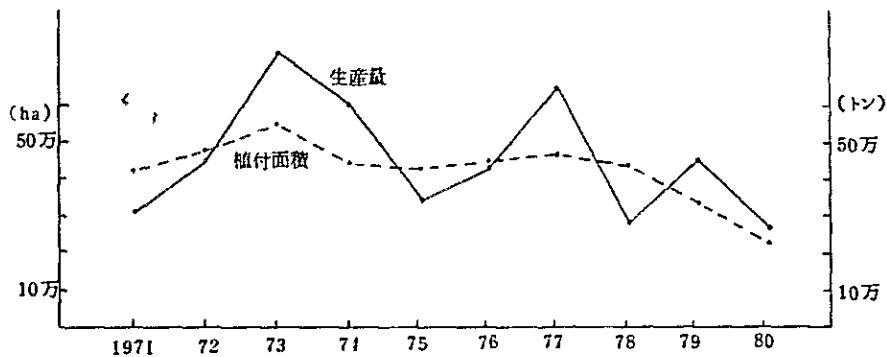
(ビール原料用大麦)

表50 大麦(ビール原料):過去10年間の生産実績

年 度	植付面積 1,000ha	収穫率 %	収穫面積 1,000ha	単収g/ha	生産量1,000Kg/ha
1970/71	4102	751	3080	1,034	3185
72	4875	830	4046	1,117	4760
73	5490	898	4932	1,541	7600
74	4554	879	4001	1,520	6080
75	4193	723	3033	1,203	3650
76	4402	843	3711	1,207	4478
77	4700	876	4118	1,627	6700
78	4300	581	2500	1,160	2900
79	3300	873	2880	1,632	4700
80	2220	892	1980	1,444	2860

71~80年平均	421.4	81.5	3428	1,368	4691
----------	-------	------	------	-------	------

出所: S. E. A. G.

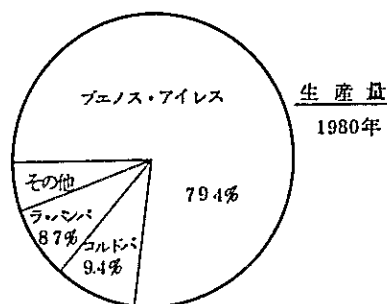
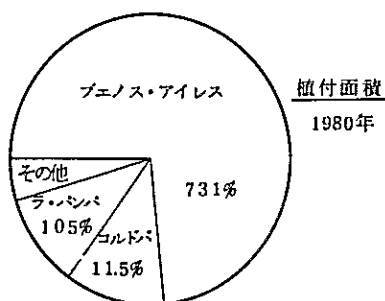


ビールの製造原料とする大麦の方は飼料用大麦の場合と異なり、過期の播種が麦芽の質に大きく影響するため植付時期の気象条件は栽培上の重要な要素となっている。播種は一般に6月から7月にかけて集中的に行われるのが普通であるが場合によっては9月まで行われることもある。播種時期の遅延は収量や穀物に含まれる蛋白質を減少させる。また土壌の窒素分の過剰は麦芽のにごりを増しビール原料としての適性を失わせる。成育期の降雨は非常に重要である。収穫は11月より開始され1月に最高潮に達する。

表51 大麦(ビール原料):州別生産実績

州	植付面積 1000ha						生産量 1000トン					
	1975	76	77	78	79	80	1975	76	77	78	79	80
ブエノス・アイレス	2706	3163	3610	3130	2500	1623	2583	3469	5600	2320	4060	2270
コルドバ	615	555	570	570	334	255	415	367	390	250	150	270
ク・パノパ	717	542	391	480	363	232	531	531	600	240	400	250
サンタ・フェ	114	90	77	75	62	52	84	66	53	50	60	44
メントーサ	32	31	24	14	17	24	32	33	29	13	17	19
リオ・ネグロ	08	20	24	30	22	31	05	12	28	27	13	06
その他の州	01	01	01	01	02	03	-	-	-	-	-	01
全 国 計	4193	4402	4700	4300	3300	2220	3650	4478	6700	2900	4700	2860

出所: S. E. A. G.



国内の生産地は飼料用大麦の場合と同様にパンパ地帯に集中し、中でもブエノス・アイレス州での割合が最も大きく79/80農年を例にとると植付面積において73.1%、生産量では約80%のシェアである。

全般的に生産は下降しており79/80農年の植付面積は過去10年間の中でもっとも少い162千ヘクタールに止まっており、単収の向上も見られぬまま生産量も又最低の記録であった。

ロ) 世界の生産需要動向

FAOの推定によると1979年度における世界の生産量は1723百万トンで世界の飼料用穀物総量の23.4%を占める。この生産量は前年の78年と比較すると約1.2%の減少であり、また74~78年の5ヶ年間の平均量(1759百万トン)にも達していない。最近5ヶ年間の生産推移をみると収穫面積は78年を除いて年々増加しているが収穫面積の減少を単収の向上によってカバーした78年とは逆に79年は単収の大幅な減少がみられている。

とくに世界最大の生産国であるソ連では天候不順から栽培面積が拡大したにもかかわらず単収の低下から生産は減少しており面積においては世界の40%を占めながら生産量では世界の2.5%に止まっている。

世界2位の生産力を持つ中国においては世界生産総量の11%に相当する195百万トンの生産であったが単収は低くソ連と同様に世界の平均をはるかに下廻る状況にある。

ヨーロッパ諸国は全体で世界生産の39.5%を生産しており中でもフランス、英国及び西独の生産が大きな割合を占めている。他方スペインはヨーロッパ諸国の中では面積において最大であったが生産性は世界の平均をやや上廻る程度でありヨーロッパではもっとも低い水準にある。

カナダ及び米国は79年にそれぞれ85百万トン及び82百万トンの生産でいずれも世界生産量の5%に達していない。同年の生産を前年と比較すると1.5%以上の減産であったがこれはカナダにおける面積と単収の減少、米国においては単収の向上にもかかわらず栽培面積の極度の減少に由来するものであった。

南米大陸の世界生産に占める比率は収穫面積において1%、生産量で0.7%と非常に僅少であり、その中で優位を占めるアルゼンチンの生産規模も世界生産の前には極めて小さなものである。

(国際間取引)：世界の大麦貿易量はここ5ヶ年間増加傾向にあり78年で輸出1,443万トン、輸入1,472万トンの規模である。輸出国の中ではフランスとカナダの輸出が大きくそれぞれ世界輸出量の25%を占める。アルゼンチンは輸出国側に含まれるがその量は僅少で世界貿易に何ら影響のない輸出品である。輸出統計にもとづくアルゼンチンの輸出品は、1977年度で574千トンで前年比約30%の増加であったが穀物の総輸出品に占める比率は0.3%と僅

表5.2 大麦：アルゼンチンの輸出実績

仕向先国	1975	1976	1977	1978	1979
西 独	-	-	03	-	353
ブラジル	26	19	38	33	105
イタリー	-	196	652	42	32
キューバ	-	74	-	-	-
オランダ	-	50	18	-	-
その他の国	154	14	43	70	85
計	180	353	754	145	575

出所：I. N. D. E. C.

少である。主要仕向先国は西独、ブラジル及びイタリ
ーでこの3国がアルゼンチン大麦輸出の94%を占め
る。80年度は上半期に258千トンの輸出が行われ

前年同期と比べ17%減となっており大きな後退を意味している。しかしこの中であつて注目されるのは後述のソ連よりの
244千トンの買付けであつた。一方輸入側ではとくに際立った大型の輸入国はなく大陸圏でみるとヨーロッパの輸入が他
を抜きこんでいるものの、これは同じヨーロッパ圏内の生産国よりの供給によって補給されているものと見られる。最近の
傾向としてはUSDAの資料によるとソ連の大型買付けが目立ち、アジアの輸入も増加傾向にあるところから今後の世界市
場は次第に変化していくものと思われる。

以上の通り世界の供給がその半数をフランスとカナダに依存しているところからこの両国の需要動向が国際価格に直接影
響を与える大きな要素となる。その1例としてカナダにおける大麦市場の需給関係とWINNIPEG市場の先物相場を対比
してカナダにおける大麦市場構造をみると次の通りである。

表53 大麦：カナダにおける需給関係

単位 100万トン

摘 要	1978/79	1979/80	前年対比%
期首在庫	5.2	1.9	-58
生産量	10.4	8.4	-19.2
供給量計	15.6	13.3	-14.7
国内消費量	7.2	7.0	-2.8
輸 出	3.5	4.1	+17.1
総需要量	10.7	11.1	+3.7
期末在庫	4.9	2.2	-55.1
在庫/需要比率	45.8%	19.8%	

出所：USAD / BOLSA DE CEREALES

表54 大麦：カナダWINNIPEG穀物市場価格

区 分	1979年					1980年						
	8月	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7
トン当たり USS	8831	9333	9728	9920	9330	10161	9708	9741	9484	10445	11556	11887
前月比 %	-	5.7	4.2	2.0	0.1	2.3	-4.5	0.3	-2.6	10.1	10.6	2.9

出所：

上表によるとカナダでは79/80年において期首在庫の前年比減少と生産量の減少から総供給量を減少させた。これに
対して国内消費量もやや減少を示したが輸出が前年比17.1%増加したため総需要量を増加し、年末のストックを極度に減少
させている。このストック水準は前年に比して需要と供給との関係がもつとも調整されたことを示しており80年の価格上
昇へとつながっている。事実1978年の大麦平均価格トン当たり666ドルは79年の当初に75ドル、9月に90ドル
台を越したあと80年1月には100ドルを越えた。2、3、4月は積付面積増加を反映して一時的に後退したものの5月
になると天候不順から次期収穫の減少が予想され価格は再び上向きとなつてトン当たり120ドルに近づいている。

ハ) 国内市場価格

表55 イ)大麦(ビール原料)の価格推移

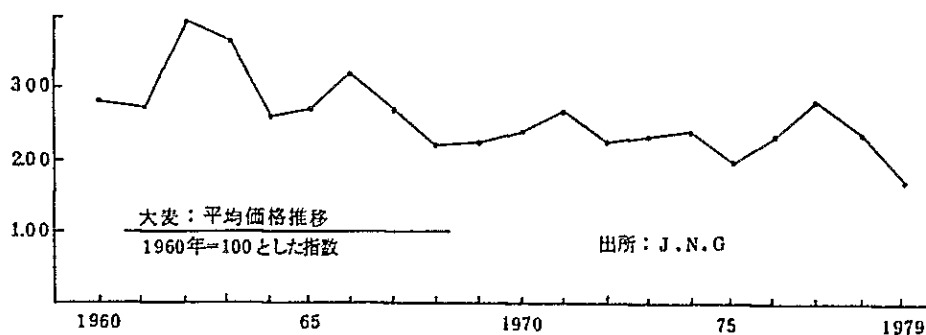
ロ)大麦(飼料用):国内価格の推移 ペソ/1俵

月別	実際価格		実質価格		実際価格		実質価格	
	ペソ	前月比%	1960=100の価格	前月比%	ペソ	前月比%	1960=100の価格	前月比%
1979/8月	13,632	107	1.72	-1.7	13,223	107	1.67	-1.2
9	14,000	27	1.67	-2.9	13,580	27	1.62	-3.0
10	14,000	-	1.61	-3.6	13,580	-	1.56	-3.7
11	14,114	08	1.57	-2.5	13,690	08	1.53	-1.9
12	17,139	21.4	1.85	1.78	16,625	21.4	1.79	17.0
1980/1	18,736	9.3	1.93	4.3	18,174	9.3	1.88	5.0
2	20,995	12.1	2.07	7.3	20,365	12.1	2.01	6.9
3	21,800	3.8	2.05	-1.0	21,164	3.8	1.99	-1.0
4	22,350	2.5	2.03	-1.0	21,534	1.8	1.96	-1.5
5	23,571	5.5	2.05	1.0	22,864	6.2	1.99	1.5
6	24,000	1.8	1.96	-4.4	23,280	1.8	1.90	-4.5
7	25,250	5.2	2.00	2.0	24,493	5.2	1.94	2.1

出所: CAMARA ARBOTRAL DE BOLSA DE CEREALES

過去20年間の実質価格(実際価格より卸し物価指数を基にして1960年価格に合わせたもの)の推移をみると価格は次第に下降している。この間の価格水準は1962年で最低は1979年であった。

最近の価格についてはブエノス・アイレス穀物取引所が発表した79年8月より80年7月までの相場をみると飼料用、ビール用ともに8月より11月にかけて低滞したが79/80年の減産が明らかとなった12月以降価格は回復し以後途中若干の上下はあったものの上昇傾向であった。



2.1.5 からす麦

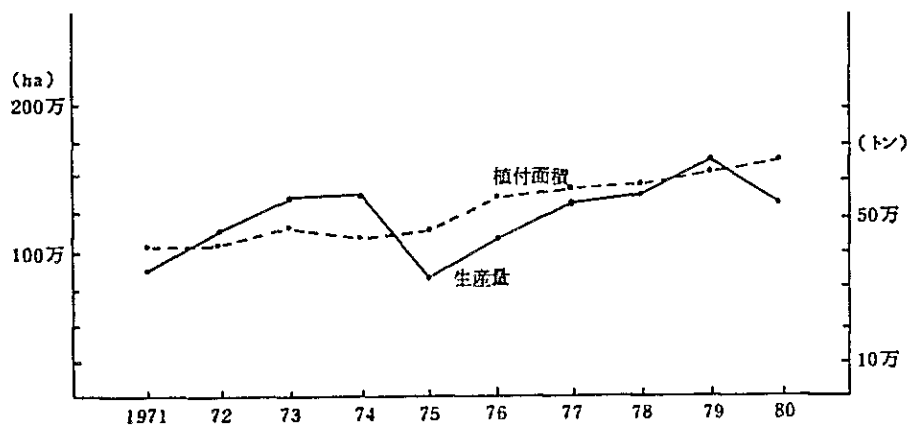
イ) 国内生産

表56 からす麦：過去10年間の生産実績

年 度	植付面積	収穫率	収穫面積	単 収	生 産 量
	1,000ha	%	1,000ha	Kg/ha	1,000トン
1970/71	1,025.7	29.2	299.7	1,201	3600
72	1,097.9	32.5	357.0	1,331	4750
73	1,222.2	32.6	398.7	1,420	5660
74	1,154.4	34.2	394.6	1,422	5610
75	1,200.5	23.5	282.2	1,159	3270
76	1,341.5	25.2	337.8	1,282	4329
77	1,471.0	25.9	383.0	1,384	5300
78	1,480.0	29.1	430.0	1,326	5700
79	1,545.0	32.4	500.0	1,352	6760
80	1,680.0	24.4	410.0	1,273	5220
71~80平均	1,321.8	28.7	379.3	1,324	5020

出所：S. E. A. G.

アルゼンチンのからす麦には黄色種 (AVENA AMARILLA) と白色種 (AVENA BLANCA) の2種があり、前者は畑に家畜を放牧する飼料用で乾ばつなどにより天然牧草が被害を受ける場合は重要な代替え牧場としての役目を果たす。また後者は穀物収穫して配合飼料原料とするものである。国の統計ではこの両者をまとめて発表しているが利用面、商業面では分離して取扱われている。植付面積に対する収穫率の低さはこの間の事情によるものである。



最近の生産は過去10年間の統計でみると植付面積は130万ヘクタール、穀物の生産量は50万トンが平均した規模であるが今世紀の始め頃(1910年)にはすでに植付面積100万ヘクタールから100万トンの生産をあげ、また1943年には植付面積215万ヘクタール、1952年には生産量127万トンの記録を残しており、これらと比較すると最近の生産は急激な減少である。この栽培規模の変遷は農業形態の推移を表わすもので、からす麦が馬の飼料として非常に重要であった当時よりトラクターの普及によって馬耕形態が機械化に切り換えられた歴史を示すものである。また、一時期には害虫の発生によって大きな被害があったことも本作物より他の作物への転換をすすめる理由の1つとなっている。この様に減少を続けてきたからす麦栽培も70年代の後半にやや復活しており植付面積増加のあとがみられる。この現象は大麦及びライ麦栽培の一部からからす麦栽培に切り換えられたためであると説明されている。

国内最大の生産地帯はブエノス・アイレス州で79/80年についてみると植付面積で51.6%、穀物の生産量は78%と圧倒的である。この生産量も前年に比較すると30%の減少であるが、これは天候不順と害虫の発生を大きな原因として

いる。最近数年間もつとも栽培面積を増加したのはサンタ・フェ州で80年では前年比35.6%の増加をみた。この面積は同州における最高記録となっているが、これは同州の生産者が冬用飼料作物を持つとする関心の現われであると説明されている。

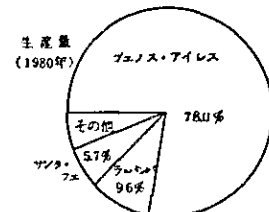
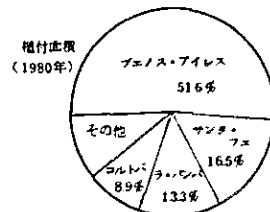
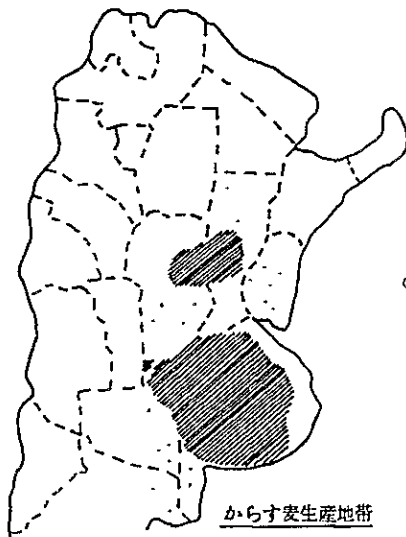


表57 からす麦：州別生産実績

州別	植付面積 1,000ha						生産量 10,000ト					
	1975	76	77	78	79	80	1975	76	77	78	79	80
ブエノス・アイレス	8494	8993	9206	9030	8340	8670	3045	3906	4300	4860	5830	4070
ラ・パンプ	409	560	608	760	1970	2210	56	139	280	150	370	500
サンタ・フェ	870	1340	2055	2040	2050	2780	36	95	140	240	280	300
コルドバ	481	556	592	1350	1560	1495	57	40	43	70	62	230
エントレリオス	1365	1557	1830	1180	890	898	54	124	470	320	110	56
リオ・オグロ	45	87	101	100	270	283	09	15	51	18	70	52
サノルイス	50	52	58	51	62	62	07	-	-	-	02	05
イウケノ	08	10	11	11	09	08	06	08	10	09	08	04
サルタ	56	53	38	38	37	37	-	02	01	01	-	01
ツクマノ	35	41	41	43	44	43	-	-	05	31	28	-
その他	86	72	166	97	113	179	-	-	-	-	-	02
全国計	12005	13115	14710	14800	15450	16800	3270	4329	5309	5700	6760	5220

出所・S. E. A. G

単位面積あたりの収量については過去30年間の実績をみると、1950年代が1.172Kg/ha、60年代が1.230Kg/haに対し、70年代は1.324Kg/haでわずかな伸びがみられる。

表58 からす麦：主要生産州の単収比較

州 別	1975	76	77	78	79	80
ブエノス・アイレス	1,213	1,331	1,471	1,421	1,495	1,451
ラ・パノバ	663	1,004	1,061	820	925	958
サンタ・フェ	632	979	1,094	945	1,000	977
コルドバ	950	825	860	700	620	793
全国平均	1,159	1,282	1,384	1,326	1,352	1,273

出所：S. E. A. G

ロ) 世界の生産

FAOの統計によると1979年度の世界生産は収穫面積において274百万ヘクタール、生産量は429百万トンで前年比それぞれ0.8%及び1.45%の減少であった。国別にみるとソ連の生産が常に大きく世界生産の3分の1以上を占めているが79年度は収穫面積の増大にもかかわらず単収の減少(-28.8%)から24.4%減の14百万トンの生産であった。これに続く米国の生産は単収において前年比4.2%の増加を示したが収穫面積の減少(-1.4%)をカバーすることが出来ず78年に対し10.3%の減産で78百万トンの生産に終わっている。これに続いて西独、カナダ、ポーランドが合わせて世界生産の20%程度を占めている。

アルゼンチンの生産量は南米大陸において6.6%を占めているが南米全体のシェアが世界生産の2%弱であるためアルゼンチンの世界生産に占める比重は僅少である。しかしながら国際取引の面ではオーストラリア、カナダと並んで世界の3大輸出国に数えられており78年には世界輸出の26.3%を占めて1位であった。これらの輸出国のほか最近ではオランダの輸出も増加している。一方輸出国としては西独、日本、スイス、等の割合が大きく77、78年と世界輸入の1位を占めた西独に代って日本の輸入が増加している。

アルゼンチンの輸出はオランダ、イタリー、ブラジルの3国を中心として行われており78年には36万トン、79年は10万トン程度であった。1930年代に70万トンの輸出を行った実績からみると極めて低い水準であるが、それでもなお世界の主要輸出国であることは世界のからす麦貿易が衰退していることをも意味している。また、最近の傾向として生産量に対する国内消費の比率が高くなっている点も過去と異なる状況であり、大型の輸入国であるオランダ及びイタリーがアルゼンチン産のからす麦の輸入を極度に減少しており反面80年度に関する情報ではソ連の買付けが増大しているといわれており新しい市場として注目されている。

国際価格についてはシカゴ取引所のデータによると79年7月までの1年間に一部の変動はあったものの米国の1979年植付け分が今世紀最低の記録(775万トン)と予想され、これに対する国内消費量が846万トン、ストック347万トンと推定されたことが影響して年間を通して強気の値が続いた。

表59 からす麦：世界の生産と貿易

単位 1,000トン

国 別	1977	1978	1979
A 生産			
ソ 連	18,407	18,507	14,000
米 国	10,899	8,650	7,757
カ ナ ダ	4,303	3,620	2,978
西 独	2,714	3,202	2,995
ポ ー ラ ン ド	2,552	2,491	2,188
フ ラ ン ス	1,901	2,194	1,675
スウェーデン	1,416	1,550	1,646
オーストラリア	990	1,756	1,490
フィンランド	1,022	1,082	1,283
中 国	1,000	1,000	1,100
アルゼンチン	570	676	536
その他の国	5,473	5,810	5,220
世界計	51,247	50,538	42,868
B 輸出			
アルゼンチン	179	360	92
オーストラリア	364	218	275
カ ナ ダ	322	83	46
フ ラ ン ス	101	226	145
そ の 他	538	483	335
世界計	1,504	1,370	893
C 輸入			
西 独	338	294	96
ベルギー	75	65	46
イタリー	152	143	70
ス イ ス	136	161	123
日 本	187	167	134
そ の 他	525	571	242
世界計	1,413	1,401	711

出所：FAO

表60 からす麦：仕向先国別輸出実績

単位 1,000トン

仕 向 先 国	1975	1976	1977	1978	1979
ブラジル	01	01	13	297	421
オランダ	141	81	540	832	127
イタリー	56	-	700	1536	297
チリ	-	-	22	23	26
西独	-	-	52	-	1.8
ポーランド	-	-	-	732	-
ウルグアイ	-	01	20	11.3	-
その他の国	06	05	440	67	19.3
計	204	88	1787	3600	1082

出所：I. N. D. E. C

表61 からす麦：ノコゴ市場価格推移

区 分	1979年					1980年						
	8月	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7
トン当たり US\$	10005	10676	10408	9733	10917	10122	9890	9809	9619	11403	11711	12875
前月比 %	-111	+67	-25	-65	+122	-73	-23	-08	-19	+185	+27	+99

出所：USDA

ハ) 国内市場価格

国内市場価格については過去20年間の推移をみると全体的に下降気味で79年は最低の水準にいたっているが1980年に入ると79/80年産のからす麦が前年比大きな減産があったこと80年4月の収穫時も降雨に見舞われて収穫物に被害があったこと、年度当初に外国とくにソ連の買付けがあり輸出部門の需要が増加したことなど国内要因のほかノコゴ取引所価格の上昇にも影響されて5月以降高値に移っている。

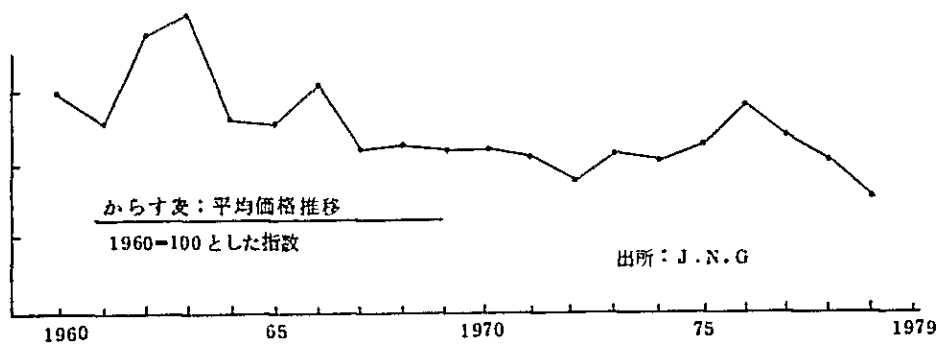


表62 からす麦：最近の価格推移

Qg (100kg)あたり

月別	工業原料用				その他			
	実際金額		実質価格		実際金額		実質価格	
	ペソ	前月比%	1960=100の指数	前月比%	ペソ	前月比%	1960=100の指数	前月比%
1979/8月	13,191	1.4	1.67	- 92	12,918	59	1.63	- 52
9	13,670	36	1.64	- 1.8	13,515	46	1.62	- 06
10	14,470	59	1.67	1.8	14,139	45	1.63	06
11	14,400	- 05	1.60	- 42	13,759	- 27	1.53	- 61
12	14,400	-	1.55	- 31	13,833	05	1.49	- 26
1980/1	16,832	169	1.74	123	15,782	141	1.63	9.4
2	21,100	254	2.08	195	20,619	307	2.03	245
3	23,809	128	2.24	77	22,262	80	2.09	30
4	24,000	08	2.18	- 27	22,000	- 1.2	2.00	- 43
5	24,619	26	2.14	- 18	21,110	96	2.10	50
6	26,895	92	2.20	28	26,184	86	2.14	1.9
7	30,341	128	2.40	91	29,682	134	2.35	98

出所：BOLSA DE CEREALES B. A.

2. 1. 6 ライ麦

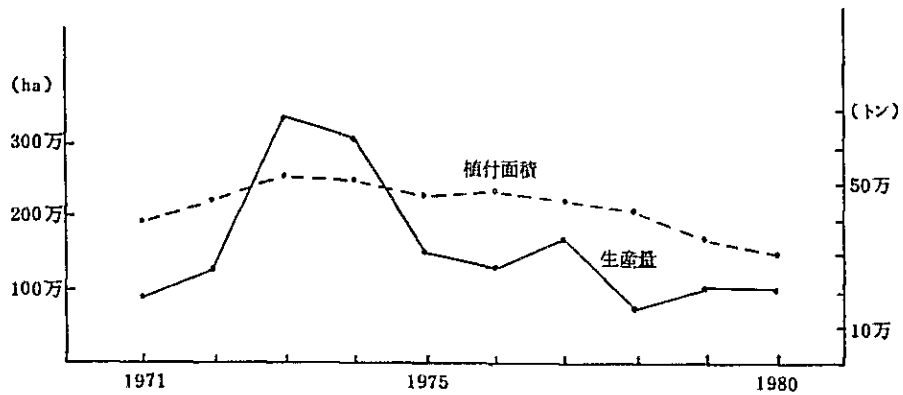
イ) 国内生産

表63 ライ麦：過去10年間の生産実績

年 度	植付面積	収穫率	収穫面積	単 収	生産量
	1,000ha	%	1,000ha	kg/ha	1,000ト
70/71	1,976.9	18.2	3,603	502	1,807
72	2,202.2	19.6	4,327	592	2,560
73	2,531.0	29.5	7,465	924	6,900
74	2,515.2	26.1	6,560	934	6,130
75	2,369.8	15.8	3,747	817	3,060
76	2,407.6	12.4	2,995	912	2,732
77	2,300.0	14.8	3,400	971	3,300
78	2,140.0	11.2	2,400	708	1,700
79	1,722.0	15.1	2,600	808	2,100
80	1,494.0	15.0	2,250	893	2,020

出所：S. E. A. G

71~80平均	2,166.2	18.2	3,935	821	3,231
---------	---------	------	-------	-----	-------



ライ麦は大麦やからす麦よりもはるかに強い作物で通常の降雨量を下廻る乾燥の場合でも耐久力があるためパンパ地帯西部でも栽培が可能である。この特性に合わせてとうもろこしとソルゴーに次ぐ重要な飼料作物として全国的に普及している。植付面積は過去10年間では平均217万ヘクタール、収穫面積は約40万ヘクタール、種実の収穫量は平均30万トンをやや上廻る程度である。ライ麦の場合も他の穀物と同様に減少傾向にあり植付面積では1959年に290万ヘクタール、生産量では1952年の133万トンを最高記録としている。過去10年間における収穫率すなわち植付面積に対する収穫面積の比率は18%で82%は種実の収穫が行われていないところからみて栽培の目的自体が緑飼料として直接放牧に利用されるものであることがわかる。他の麦類にみられると同様に牧畜国のアルゼンチンでは冬期の家畜飼料生産は重要な作業であり天候不順により牧草が枯渇する場合牛の全滅を防ぐためや肥育用の手段として畑のままの飼料利用が広く行われている。

国内の生産地帯は他の穀物と同様にパンパ地帯に集中し中でもブエノス・アイレス州のシェアが大きく、1979/80農年では植付面積において32.4%、生産量では57.9%を占めている。ラ・パンパ、コルドバ、サンタ・フェ州等もブエノス・アイレス州に続く重要な生産地である。

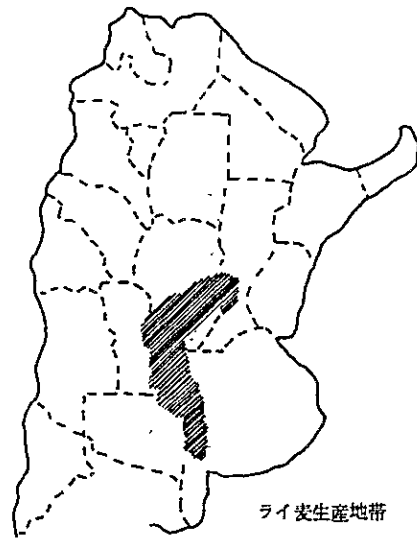
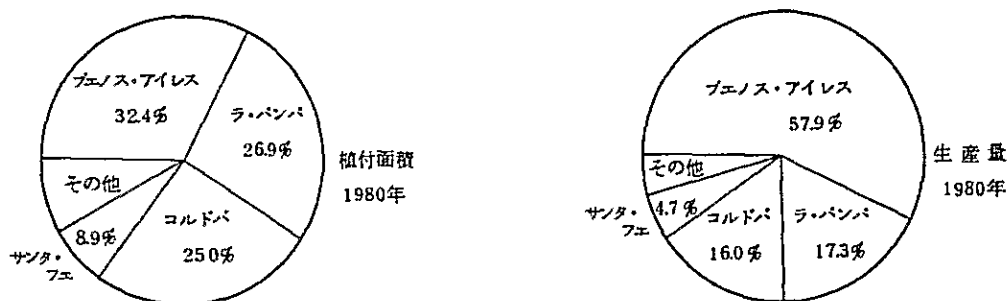


表64 ライ麦・州別生産実績

州 別	植 付 面 積 1,000ha						生 産 量 1,000トン					
	1975	76	77	78	79	80	1975	76	77	78	79	80
ブエノス・アイレス	6470	5947	5502	5120	5130	4840	1440	1508	1600	880	1290	1170
ラ・パンパ	7830	7840	7395	6330	4620	4020	1170	723	1170	500	510	350
コルドバ	5427	6150	6430	6580	4450	3740	300	262	320	170	144	325
サンタ・フェ	3200	3230	2685	2400	1980	1330	92	150	202	130	116	94
サノルイス	513	547	639	620	570	650	10	85	-	-	19	67
サノチャゴ・エステロ	151	230	213	210	200	216	-	-	-	-	-	-
リオ・オドロ	45	79	94	94	226	95	14	-	-	1.1	11	11
メノドーナ	15	15	1.6	1.6	1.6	1.6	0.2	0.2	0.3	0.3	0.2	0.2
ツクマノ	15	11	11	12	12	13	-	-	0.3	0.5	0.6	-
サルタ	0.5	0.5	0.2	0.3	0.4	0.5	-	-	-	-	-	-
ネウケン	0.3	0.3	0.3	0.3	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.1
その他の州	24	15	0.6	1.2	1.0	1.3	-	-	-	-	-	-
全 国 計	23698	24076	23000	21400	17220	14940	3060	2732	3300	1700	2100	2020

出所：S. E. A. G.



ヘクタールあたりの収量は全国平均900Kg前後で地方別にみると80年度にサンタ・フェで記録された1,022Kg/haが最近の最高収量となっており、前年比増加率でもっとも高い比率すなわちいちじるしい生産性の向上を示したのはコルドバ州における3.0%増であった。全般的に単収は向上しつつあり生産技術の向上の結果とみることができる。しかしながら世界の単収と比較すると低く79年に最高の単収をあげたスイスの4,898Kg/haの5分の1にも達しておらず世界の平均値1,553Kg/ha(1979年)よりもはるかに低い水準である。

表65 ライ麦：世界の単収Kg/ha

国 別	1977	1978	1979
ス イ ス	4,031	4,638	4,898
オランダ	3,483	3,994	4,008
ベルギー	3,439	3,778	3,809
ポーランド	2,006	2,454	1,624
世界平均	1,659	1,980	1,553

出所：FAO

表66 ライ麦：主要生産州の単収

州 別	1975	76	77	78	79	80
ブエノス・アイレス	836	1,000	1,136	889	949	1,017
ラ・パンパ	805	812	860	500	593	619
コルドバ	865	814	796	708	720	939
サンタ・フェ	592	862	908	928	906	1,022
全 国 平 均	817	912	971	708	808	893

出所：S. E. A. G.

上述の通り単収の増加はみられるものの植付面積の減少と収穫率も年々低くなっているため、70年代の平均生産量は

60年代の平均量に対し26%の減少である。同じ基準で各州の生産をみるとブエノス・アイレス州、コルドバ州及びラ・パンパ州においてそれぞれ26%、36%及び20%の減少であった。

ロ) 世界生産需要動向

世界のライ麦生産は全般的に下降を続けているが、79年度はとくに不作の年で前年を900万トン以上下回る2,300の生産に終っており最近5ヶ年間でとくに低い生産であった。

表67 ライ麦：世界生産の推移

1,000トン

国 別	1959/63平均	64/68	69/73	74/78	1979
ソ 連	15,765	14,020	11,262	12,073	8,100
ポ ー ラ ン ド	7,631	7,823	7,823	6,951	4,658
西 独	2,392	3,093	2,814	2,356	2,105
東 独	1,833	1,873	1,626	1,701	1,700
そ の 他	7,709	5,994	5,647	6,043	6,547
世 界 計	35,330	32,803	29,172	32,479	23,110

出所：FAO

79年度は主要生産国がすべて生産を落しているが世界の生産に占めるシェアはソ連が35.1%、ポーランド20.2%、西独9.1%、東独7.4%でこれら上位4ヶ国の生産量は世界の70%を占める。アルゼンチンの生産量は79年度で世界の0.9%に過ぎない。

世界の生産減少にもかかわらず国際間の取引は拡大されており78年の輸出74万トンに対し79年は9月までの統計で67万トン、輸入は78年の81万トンに対し78万トンに達している。主要輸出国は西独、カナダ及びデンマークでそれぞれ世界総輸出量の3分の1、4分の1及び7分の1を占め、中でも西独の輸出増大が目立つ。最大の輸入国は生産量で世界第2位の位置にあるポーランドで79年には9月までですでに約30万トン(世界輸入の38%)を輸入しており、これに続く日本と合わせると世界輸入量の50%を占める。

価格についてはカナダのWINNIPEG市場によると世界の貿易量増加にもかかわらず一定しており80年7月は1年前の水準を維持している。

表68 ライ麦：カナダWINNIPEG穀物市場価格推移

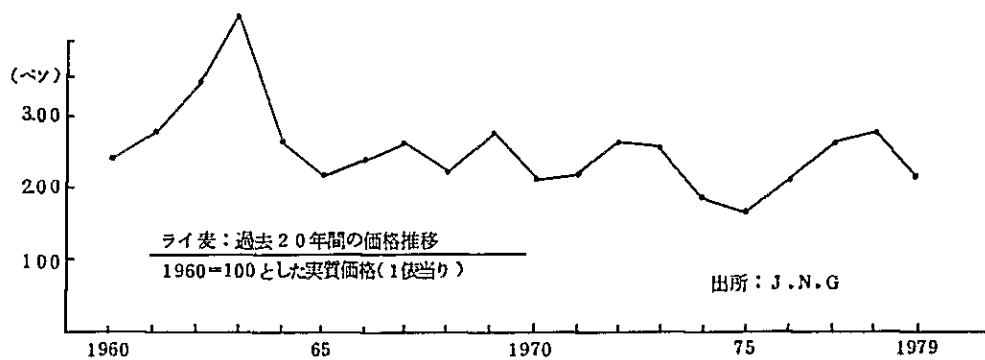
区 分	1979年					1980年						
	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7
トノ当たりUSS	14261	16033	16245	14085	13577	15125	16178	16307	15459	15544	15596	16716
前月比%	-53	+126	+12	-133	-36	+136	+49	+08	-52	+05	+03	+72

出所：USDA

アルゼンチンの輸出：アルゼンチンのライ麦輸出は少量で世界の貿易に占める比率も僅少である。74年には10万トン以上の輸出が行われたが、その後減少し78年にはブラジル向け138万トンだけの輸出に落ちたあと79年にやや復活して1,859トンの実績を残した。仕向先はフィンランド、オランダ、南アフリカ連邦の3国のみであったがこれらも継続した顧客でなくオランダを除くと新しい市場である。80年に入ると状況は可成り変化を示しており上半期にすでに5万トン近くがソ連に輸出された。しかしソ連向け輸出はアフガニスタン問題に端を発した特殊な環境下に行われたものであり将来継続した市場となりうるかについては明らかではない。

ハ) 国内市場価格

飼料用穀物全体の中でライ麦の比重は年を経るに従って減少しつつあり、過去20年間における価格もまた、ゆるやかに下降を続けている。



79年8月より80年7月にいたる最近1年間の価格についてみると、期間中に種々の変動はあったが、とくに興味深いのは79年12月、すなわち79/80農年産の出荷開始とともに月間平均価格が上昇したことである。この上昇は実際価格において前月比16.8%の上昇となったが、インフレを差引いた実質価格においても13.3%の上昇となっている。この価格は2月まで維持されたあと3月以降再び下降する。80年度の価格の下落は海外市場における伝統的な顧客のアルゼンチン産品に対する関心が薄らいだ結果と国内取引量も又減少したこと等を理由としている。

表69 ライ麦：国内価格推移

月 別	実 際 価 格		実 質 価 格	
	ペノ/キントール	前月比 %	1960=100	前月比 %
1979年8月	15.705	104	198	- 15
9	17.580	119	210	61
10	17.700	07	204	- 29
11	17.623	- 04	196	- 39
12	20.583	168	222	133
1980年1	22.568	96	233	50
2	26.233	162	258	107
3	26.981	29	254	- 16
4	27.375	15	249	- 20
5	25.976	- 51	226	- 92
6	25.000	- 38	204	- 97
7	23.818	- 47	188	- 78

出所：J.N.G キントール(Qg)=100kg

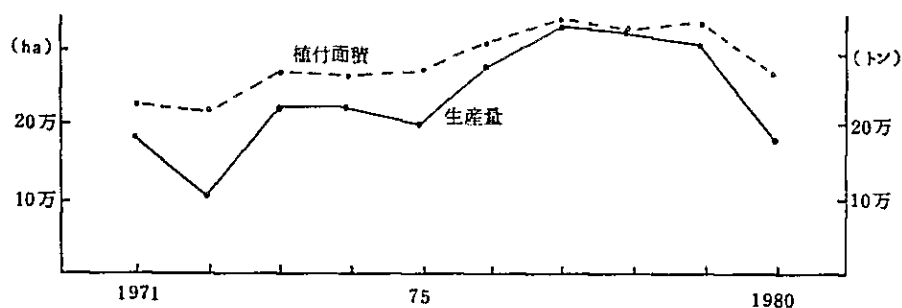
2. 1. 7 コウリャン (MIJO)

イ) 国内生産

表70 コウリャン (MIJO) : 過去10年間の生産実績

年 度	植付面積 1,000ha	収穫率 %	収穫面積 1,000ha	単収 Kg/ha	生産量 1,000トン
1970/71	2310	655	1511	1209	1830
72	2172	533	1158	907	1050
73	2769	716	1983	1144	2270
74	2715	766	2081	1098	2285
75	2780	699	1944	1029	2000
76	3192	722	2300	1274	2937
77	3500	729	2550	1333	3400
78	3400	718	2440	1353	3300
79	3450	689	2380	1303	3100
80	2780	655	1822	1032	1880
71~80平均	2907	694	2018	1192	2405

出所: S. E. A. G.



アルゼンチンでは歴史の古い作物でサンタ・フェ州の中西部地方、コルドバ州の中央及び西部地方が伝統的な栽培地帯である。植付面積のうち、約30%が青田のまま飼料として利用され残りが穀物として収穫される。植付けは11月に行われ水分が不足する地帯では1月まで播種を延期することもできる。11月植えのものは3月には収穫が開始されるが降雨過多や長期乾燥によって作柄が悪い場合や、同様の理由によって牧草が極度に不足する場合などは牛の放牧場として直接利用される。5月にはほとんどの州において収穫は終了する。この様に栽培開始が短いため二次的な作物として広く普及している。

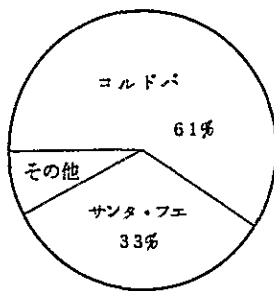
過去10年間の植付面積は年間平均29万ヘクタール、収穫率は飼料用麦類よりも高く約70%が収穫されている。最大の生産地はコルドバ州で60年代には全国植付面積の61%を占めていたが70年代は栽培規模を全国の51%に落しているものの依然として国内最大の位置に変わりはない。これに対しサンタ・フェ州は60年代には第2位の生産地帯であったが70年代に入ってからブエノス・アイレス州及びラ・パンパ州の生産が伸びたため、これらに次ぐ栽培面積となった。

79/80農年については天候不順の原因となって放牧場と化した地域が多く植付に対する収穫面積の比率は65.5%に止まった。各州別でみると収穫面積が最も多かったのはコルドバ州でサンタ・フェ州に続きその比率は前者において83.5%、後者は76%の収穫率であった。これに対しブエノス・アイレス州及びラ・パンパ州の収穫面積はそれぞれ5.4千ha及び17.4千haで植付面積に対する収穫率は40%以下となっているが、これは上述の通り水分不足のため放牧場としての利用を選択したためである。

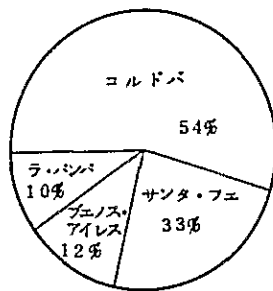
表71 コウリヤン：州別生産実績

州 別	植付面積 1000ha						生産量 1,000トン					
	1975	76	77	78	79	80	75	76	77	78	79	80
コ ル ト バ	1430	1700	1940	1800	2060	1425	1290	2000	2500	2300	2410	1220
サ ノ タ フ エ	639	610	540	560	140	400	380	505	457	400	310	300
プ エ ノ ス ・ ア イ レ ス	386	533	656	600	517	509	190	373	310	480	250	190
ラ ・ ハ ノ ベ	280	349	360	435	433	442	137	59	130	120	130	164
サンチャゴ・デル・エステロ	04	-	04	05	-	04	03	-	03	-	-	06
全 国 計	2780	3192	3500	3400	3450	2780	2000	2937	3400	3300	3100	1880

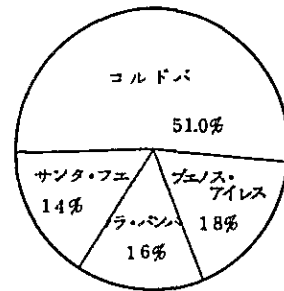
出所 S E A G



生産量：1960年代



生産量：1970年代



生産量：1980年

表72 コウリヤン：世界の単収

国 別	1977	1978	1979
中 国	778	793	759
イ ン ド	529	569	472
エ ジ プ ト	3,776	3,740	3,990
ナイジェリア	415	462	445
世界平均	626	667	615

出所：FAO

Kg/ha

表73 コウリヤン：主要生産州の単収

	期 間 平 均	全 国 平 均	コ ル ド バ	サ ン タ ・ フ エ	プ エ ノ ス ・ ア イ レ ス	ラ ・ パ ン バ
	59/60~68/69	1,172	1,153	1,151	942	603
	69/70~78/79	1,160	1,173	1,068	1,344	1,079
	増 加 率 %	-1 %	+2 %	-7 %	+43%	+79%
	79/80	1,032	1,025	987	1,273	943

出所：S. E. A. G.

Kg/ha

ロ) 世界の生産需要動向

FAOの統計によると79年の世界のコウリヤン栽培は収穫面積において21%、単収の78%減により全体的に前年比10%の生産減少となっており32.7百万トンの生産であった。この生産量は73年に達した世界の記録(43百万トン)に対し32%の減少であり、過去5ヶ年間の年間平均に対しても15%の減少となっている。

世界の生産は中国とインドに集中しており、この2国で世界生産の60%を産出する。79年においては中国が栽培面積において変化を示さないまま単収の43%減によって生産を落し、インドも単収と面積の減少によって生産量は189%の下落であり、ソ連についても同様の傾向であった。

世界の貿易量は僅少であるためFAOの統計にもなく、ほとんどが国内で消費されるものと推定される。アルゼンチンよりの輸出は国内生産の停滞もあって低い水準にあり過去5ヶ年間に於いても77~78年度に約20万トンに近づいたのを除くと10万トンをやや上回る程度である。海外の需要先はオランダ、日本、スペインが大きく79年度ではこの3国でア

ルゼンチン輸出の80%以上を吸収した。1980年度については統計がまだまとまっていないが、上半期についてみると54千トンの輸出を行ったのみで年間を通じると79年を下廻ったものと推定される。

80年の新しい傾向としては、オランダの輸入がもっとも大きいのは変わらないが、従来2～3位の輸入国であった日本に代って西独の輸入が伸びていることで80年上半期ですでに16千トンの輸入を行っている。(同期に日本は14千トン)

表74 コウリヤン：輸出実績

単位 1,000トン

仕 向 先 国	1975	1976	1977	1978	1979
オ ラ ン ダ	485	357	486	440	61.6
日 本	21.5	27.9	23.1	28.4	37.4
ス ペ イ ン	2.9	32.9	58.9	90.2	14.8
東 独	0.7	5.4	1.5	3.4	5.9
ブ ラ ジ ル	1.5	3.4	2.5	3.2	5.5
イ タ リ ー	4.4	6.9	5.7	6.2	5.3
西 独	12.4	10.9	17.7	12.5	4.0
そ の 他 の 国	2.5	1.2	13.7	6.8	4.3
計	94.4	124.3	171.7	194.7	138.8

出所：I. N. D. E. C

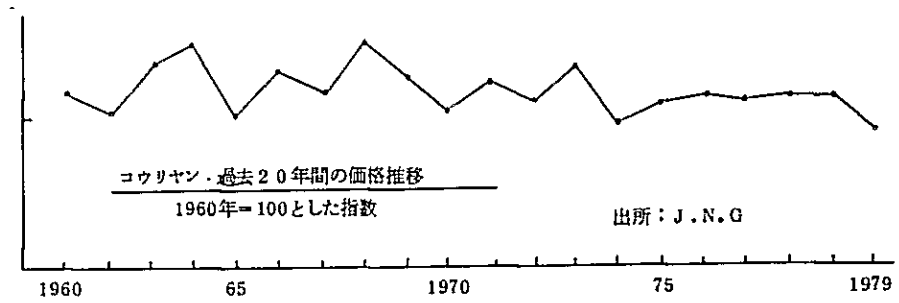
ハ) 国内市場価格

穀物類の中では比較的高値を維持した作物の一つで実際価格及び実質価格とも年間を通じ継続した上昇がみられている。穀物取引委員会が発表した79年8月より80年7月にいたる価格の推移は次表の通りである。

表75 コウリヤン：国内価格推移

月 別	実 際 価 格		実 質 価 格	
	ペソ/Qg	前月比%	1960=100の価格	前月比%
1979年8月	16.468	150	208	3.0
9	17.535	65	210	1.0
10	17.196	- 1.9	2.00	- 4.8
11	17.297	0.5	1.93	- 3.5
12	19.594	13.4	2.11	9.3
1980年1月	20.267	5.3	2.13	1.0
2	24.195	14.3	2.38	11.7
3	24.581	1.6	2.31	- 2.9
4	24.345	- 1.0	2.21	- 4.3
5	26.033	6.9	2.26	2.3
6	29.205	12.4	2.39	5.8
7	37.173	27.3	2.94	23.0

出所：BOLSA DE CEREALES Qg(キントール)=100Kg



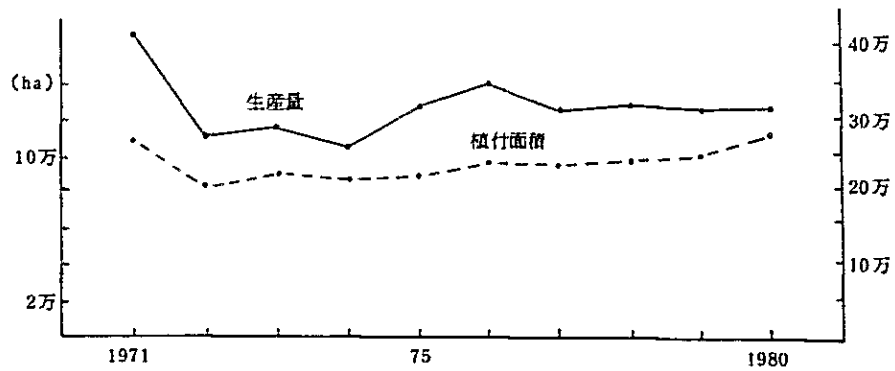
2. 1. 8 米

イ) 国内生産

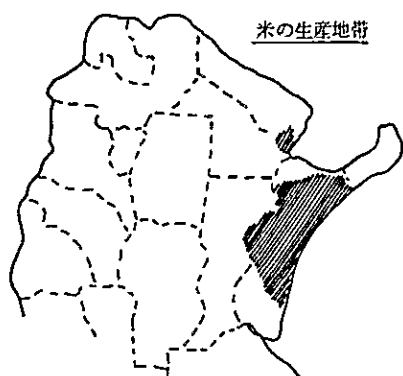
表76 米：過去10年間の生産実績

年度	植付面積 1,000ha	収穫率 %	収穫面積 1,000ha	単収 kg/ha	生産量 1,000トン
70/71	1093	935	1019	3,994	4070
72	812	950	772	3,731	2880
73	932	892	831	3,538	2940
74	864	886	766	3,397	2600
75	887	932	827	3,821	3160
76	965	958	925	3,795	3510
77	911	958	873	3,541	3090
78	960	969	906	3,532	3200
79	1000	950	950	3,263	3100
80	1157	885	1024	3,047	3120
71~80平均	958	928	889	3,562	3167

出所：S. E. A. G.



アルゼンチンにおける米作は今世紀の始めに1万ヘクタールの面積から25万トンの生産をあげたこともあったが、20年代に入るといちじるしく減少し、小麦やとうもろこしの最盛期となった1930年代の始めには農業部門の中で的重要性を失って栽培面積は5千ヘクタール以下、生産量も5～6千トんに落ちた。当時の栽培形態は極めて原始的なもので1ヘクタール当たりの単収も2トン前後の低水準であった。アルゼンチンでの米作が重要視され始めたのは頂度この頃で世界の経済恐慌によるアルゼンチン農業の危機の中で主要農産物の輸出市場が急激な縮小を余儀なくされ外貨収入が激減したことからアルゼンチンも従来他の農産物輸出によって得た外貨で安易に行っていた不足農産物の輸入と抑制せざるを得なくなり、その一環として米の国内生産の必要性が説かれるようになったことが以後の米作発展のきっかけとなっている。



以後生産は拡大され余剰分の海外輸出も伸びて1953年には10万トン以上が輸出されるようになり、1969年には史上始めての10万ヘクタールの植付け規模に達し今日までほぼこの水準の生産が続いている。1970年代10年間の年間平均植付面積は96万ヘクタール、生産量は30万トンを上回る水準にある。

アルゼンチンでは全般的に気象条件が適する麦類と異なり米の栽培条件はその栽培技術とともに麦を中心とする他の穀物類と異質であり、消費の方法も製粉加工する小麦と異り直接食用に依されることなどから統計上も他の穀物類とは別個な取扱いを受けている。すなわち米の播種は9月から10月にかけて行われ5月から6月にかけて収穫されるが気象条件においては発芽より収穫までの間12℃以上の気温を必要とし、気温が6℃以下になると成育は停止する。また年間1,500～2,000mmの豊富な雨量を必要としその水分を保存し得る土壌や水分の補完を行うための灌漑が可能な場所が栽培地帯となる。したがって河川流域に集中し小規模ながら西北部地方が産地となっている。気温が高い河川流域としてはラ・プラタ川とウルグアイ川に挟まれたアントレリオス州(ENTRE RIOS 両河川の間という意味)及びその北部のコリエンテス州が気象条件が適しているばかりでなく灌漑用の水が豊富であり、さらに消費市場(ブエノス・アイレス市、ロザリオ市、サンタ・フェ市等)へ距離的に近い利点があるため、この両州が国内の米どころとなっている。これら河川沿線地帯のほか北部のチャコ、ミシオーネス、サルタ、ツクマン州等でも生産されている。この地帯はそもそもアルゼンチンにおける米作が始められた場所であったが最近では上記河川沿線へと生産地帯は移動している。

要とし、気温が6℃以下になると成育は停止する。また年間1,500～2,000mmの豊富な雨量を必要としその水分を保存し得る土壌や水分の補完を行うための灌漑が可能な場所が栽培地帯となる。したがって河川流域に集中し小規模ながら西北部地方が産地となっている。気温が高い河川流域としてはラ・プラタ川とウルグアイ川に挟まれたアントレリオス州(ENTRE RIOS 両河川の間という意味)及びその北部のコリエンテス州が気象条件が適しているばかりでなく灌漑用の水が豊富であり、さらに消費市場(ブエノス・アイレス市、ロザリオ市、サンタ・フェ市等)へ距離的に近い利点があるため、この両州が国内の米どころとなっている。これら河川沿線地帯のほか北部のチャコ、ミシオーネス、サルタ、ツクマン州等でも生産されている。この地帯はそもそもアルゼンチンにおける米作が始められた場所であったが最近では上記河川沿線へと生産地帯は移動している。

表77 米：州別生産実績

州別	植付面積 1,000 ha						生産量 1,000トン					
	1975	76	77	78	79	80	1975	76	77	78	79	80
コリエンテス	353	365	450	493	574	374	1091	1159	1370	1290	1240	1080
アントレ・リオス	373	284	287	316	327	309	1686	1146	1110	1300	1180	1035
サンタ・フェ	106	115	85	74	89	92	270	330	190	200	230	245
フォルモーサ	68	90	77	67	103	63	270	300	306	190	290	183
チャコ	47	44	47	42	54	31	150	120	185	100	151	99
ミシオーネス	09	08	09	03	04	07	18	22	23	10	12	12
サルタ	07	04	05	05	06	02	18	11	16	10	17	06
ツクマン	02	01	-	-	-	-	07	02	-	-	-	-
全国計	965	911	960	1000	1157	878	3510	3090	3200	3100	3120	2660

出所：S. E. A. G.

国内生産地帯の1ヘクタール当たりの収量については過去20年間を10年別に区分すると次表にみられる如く、全国平均においても主要生産州においてもわずかながらの減少がみられる。このアルゼンチンの単収は79年度の世界の統計を例にとると南米の平均を上廻っているものの世界の主要生産国に比較すると低い水準にある。

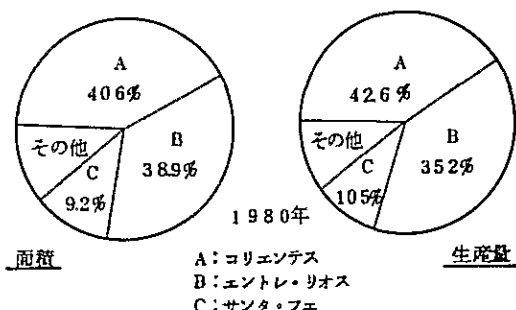


表78 米：全国及び主要生産地帯の単収推移

Kg/ha

期 間	全 国 平 均	コリエンテス州	エントレリオス州	サンタ・フェ州
1959/60~68/69	3,592	3,145	4,554	2,879
69/70~78/79	3,566	3,048	4,400	2,855
減 少 率	1 %	3 %	3 %	1 %
1978/79	3,236	2,951	3,862	2,816

出所：S. E. A. G.

表79 米：世界生産国の単収1979年度

Kg/ha

国 別	世界平均	韓 国	日 本	北 鮮	中 国	パ/グ/デ/ュ	コロンビア	タ イ
単収kg/ha	2,575	6,748	6,240	6,154	3,714	2,628	4,371	2,108

出所：FAO

ロ) 世界の生産需要動向

FAOの統計によると世界の米生産量は78年度で3829百万トンであったが79年は主に単収の減少から前年よりも3%低目の3728百万トンと発表されている。この量は80年3月に同機関が推定した79年度の世界穀物総生産量1533百万トンの24%に相当するものである。同統計によると世界生産の91%はアジアに集中し、アジアの中では中国の生産が1394百万トン(37%)でもっとも大きい。中国では単収の向上はみられないものの栽培面積(3800万ha)の増加から前年の生産量を2%上廻っている。インドは植付面積では常に中国を上廻っているが(3850万ha)生産性は低く生産量は69百万トンで世界生産の185%を占める。その他の主要生産国では、バングラ(194百万トン)、インドネシア(263百万トン)、において増加をみ、ベトナム(105百万トン)、日本(156百万トン)及びタイ(156百万トン)において減産であった。アジア以外ではブラジル(76百万トン)及び米国(62百万トン)が主な生産国である。アルゼンチンの世界生産に占めるシェアは極めて低く0.08%に過ぎない。

米の世界貿易量は生産量の5%程度で78年を例によると約383百万トンの世界生産に対し世界の輸出量は10百万トン弱であった。この比率が小麦における20%、大麦の10%に比して米の場合低いのは、アジアを中心とした世界の生産国の大半が生産のほとんどを国内消費に向けているためである。

世界の輸出国では79年を例とすると米国が全体の19%を占めて大きくアジアの中ではタイの輸出量増大が目立っておりパキスタンも又前年と比べ増加した数少ない国の一つである。

表80 米：輸出実績

単位 トン

仕向先国	1975	1976	1977	1978	1979
オランダ	14,829	18,312	71,966	32,569	12,102
ソ連	13,837	-	13,984	-	10,380
ベルギー	5,986	6,149	2,318	3,420	4,349
西独	3,898	9,362	1,314	2,059	3,135
イスラエル	3,952	13,488	18,392	5,517	2,710
イタリー	-	-	1,914	35,163	1,091
コスタリカ	99	-	-	9,999	-
ドミニカ	-	-	21,553	-	-
セネガル	-	5,520	17,786	4,645	-
日本	-	-	-	5,262	-
フランス	3,069	1,589	1,327	352	817
チリ	1,962	15,269	10,177	-	338
キューバ	-	14,687	18,862	-	-
ンガポール	-	-	9,489	-	-
その他の国	24,188	8,091	3,777	19,667	2,647
計	71,820	92,467	192,859	118,653	37,569

出所：FAO

輸入国の中ではインドネシアが78年に1.8百万トン、79年も9月までに2百万トンを入力してもっとも大きくEC諸国が全体で90万トンの輸入を行ってこれに続いている。

アルゼンチンは世界生産に占める比率は低いがアジア以外では輸出余力を持つ数少ない国の一つで77年に約20万トンの輸出を記録している。主要輸出先国はオランダ、ソ連、ベルギー、西独及びイスラエル等で継続した仕向先国でありイタリー、デンマーク等は散発的ではあるが相当量の買付けを行っている。

75年以降増加してきた輸出は77年を頂点として再び下降し79年は過去5ヶ年間の最低を記録となっている。穀物取引所の資料によるとこの輸出量の減少は78

／79農年の国内生産減少に直接関係するものではなく主要輸入国のオランダやスペインにおいて輸入増大の傾向がないためのものであると説明されている。このため79年8月パソ・デ・ロス・リブレスにおいて開催された外国貿易会議ではとくにアルゼンチン産米市場の新規開拓がテーマとして提出されており、日本、ナイジェリア、中近東諸国でもっとも求められている品種“BLUE BONET”等についての説明が行われている。

急激に停滞した米の輸出市場は80年に入ると更に悪く上半期の船積みはチリ向けの240トンのみという状況にあり今後の成り行きが懸念されている。

米の国際価格についてはタイの輸出価格でみると次表の状況である。

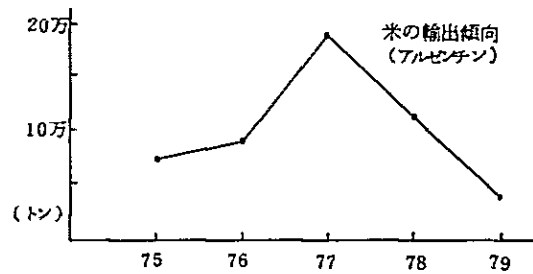


表81 米：タイの輸出価格

区 分	1979年						1980年					
	8月	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7
ト/当たり USS	349	360	363	363	379	395	398	415	418	431	442	442
前月比 %	-	32	08	-	44	42	08	43	07	31	25	-

表82 米：最近6年間の平均価格推移 FOB BANKOK USS/T

年 度	1974/75	75/76	76/77	77/78	78/79	79/80
価 格	439	295	257	337	330	387

ハ) 国内市場価格

アルゼンチンにおける米は他の穀物に比して重要度は低く最近の国内市場もとくにとりあげることもなく低調な取引であつた。ほとんど10月に収穫される米は3月より収穫が開始されるまで毎年取引の対象となるストックはなく3月以降新米の出荷状況に応じて相場が決定する。この買手側は低値をねらい売手の生産者は低価格では手離そうとしない傾向が例年の取引にみられている。

米の取引に関する最近の動きの中で特記すべき事項は出荷時に値下りし端境期に上昇する米価を年間均衡した価格に保とうとする制度の採用である。この制度は他の穀物にも適用すべくテスト・ケースとして実施されたもので収穫後のクレジット制度 (CREDITO DE POSTO COSECHA) 及び単なる裏書きにより譲渡可能な搬入証明書 (DEPOSITO TRANSFERIBLE POR SIMPLES ENDOSOS) のシステムによるものである。このシステムによると生産者は収穫終了後穀物取引委員会が委ねた保管倉庫に生産物 (穀) を納入することにより搬入証明書を受取り、同証明書を本システムに加入している公的金融機関に提示して融資を受けることができる。この生産物担保融資の金利は基本法令にもとづく年利を6.6%、期間は6ヶ月とし融資金額についてはB. LARGOFINO 種の穀について100Kg当たり\$270.00と定められた。(注: 後日80年7月16日付決議2.1.5.9.6によりすべての穀を対象とするように改められた)。このシステムにより生産者は生産物を自己の所有物として一定期間保存し出荷時期の価格下落を避けることが出来る。1980年7月3日穀物取引委員会決議第2.1.5.3.1、2.1.5.3.2及び2.1.5.3.3をもって発令された本制度は収穫後の価格下落を避け生産者を保護するため各国において採用されているメカニズム、たとえばブラジルにおける最低価格保証制度や同価格を基準とした生産物担保融資等の方法を導入したことであり極めて重要な農業政策であるといえる。

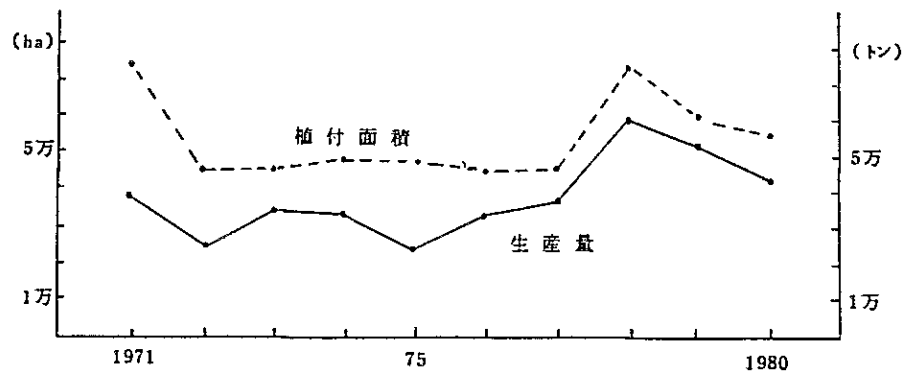
2. 1. 9 アルビステ

イ) 国内生産

表83 アルビステ：過去10年間の生産実績

年 度	植付面積 1,000ha	収 穫 率 %	収 穫 面 積 1,000ha	単 取 Kg/ha	生 産 量 1,000Kg
1970 / 71	739	71.4	582	675	393
72	444	89.5	398	659	262
73	449	95.0	427	821	350
74	497	86.7	431	789	340
75	487	75.8	369	688	254
76	446	91.8	423	775	328
77	466	86.9	405	963	390
78	750	93.3	700	857	600
79	600	95.0	570	895	510
80	560	97.1	544	772	420
71 ~ 80平均	548	88.5	485	793	385

出所：S. E. A. G



アルゼンチンは南米でも数少ない飼料作物アルビステの生産国で、ブラジルの大きな市場を控えているため古くより栽培されてきた。今世紀の始め1910年にはすでに28千ヘクタールの栽培が行われ1915年には1万トンを越す生産をあげている。1931年には5万ヘクタールに拡大されているので今日の栽培規模はその当時より続いていることになる。史上最高の栽培を行ったのは1969/70農年でこの年には125千ヘクタールの植付面積と107千トンの生産を記録し今日まで破られていない。70年代の生産状況についてみると72年より77年まで横ばいの低い生産のあと78年に増加を示しその後再び下降しており、生産量は平均385千トンである。

播種は8月より9月にかけて行われ降雨次第によって11月に結実し12月に収穫の最盛期となり1月にはほとんどの収穫を終了する。成育期間中の虫害、降霜、乾燥、降雪等は単収を大きく左右する。

国内の生産地帯はブエノス・アイレス、コルドバ及びサンタ・フェの3州に限られその他の州は統計上現われていない。

中でもブエノス・アイレス州に集中しており80年を例にとると植付面積で90.3%、生産量で88.6%を占めている。したがってコルドバとサンタ・フェ州の比率は僅少である。

植付面積に対する収穫面積の比率はその年の天候によって左右されるが全般に高く80年度では97%が収穫されている。

表84 アルビステ：州別生産実績

州別	植付面積 1,000 ha						生産量 1,000トン					
	1975	76	77	78	79	80	1975	76	77	78	79	80
ブエノス・アイレス	408	354	365	645	500	506	203	250	314	528	447	372
ゴルドバ	58	67	74	62	65	32	40	56	60	41	38	31
サンタ・フェ	21	25	27	43	35	22	11	22	16	31	25	17
全国計	487	446	466	750	600	560	254	328	390	600	510	420

出所：S. E. A. G

1ヘクタール当たりの単収もほとんど変化がなく、かつて1トンを超えたことはない。1925年の統計では当時すでに98.6kg/haの単収を上げているが、これが今日にいたるまでの最高記録である。今世紀の始めから現在まで単収に変化がみられないというのも非常に珍しい記録といえる。(注：1909/10年の単収79.3kg/ha、1980年の単収77.2kg/ha)

ロ) 市場と価格

次表にみられる通りアルビステは完全な輸出商品で全生産量の65%が輸出に向けられる。輸出も又今世紀の始めから1万トン近く行われており、1932年に3万トン近くに達したあと停滞し、1954年頃よりふたたび回復してきた。その後も上下をくりかえしつつ79年に6万トンを越えたがこの輸出量がこれまでの最高記録となっている最大の外国市場はブラジルで79年には総輸出量の70%を占めている。

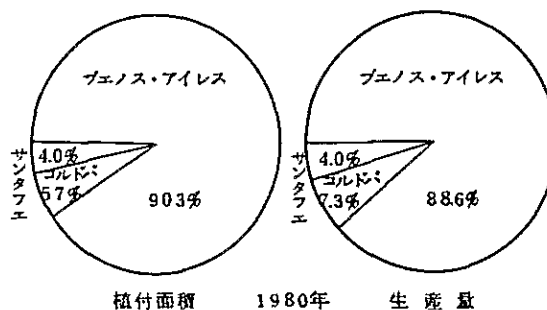


表85 アルビステ：国内生産量と輸出量

年度	生産量トン	輸出量トン
1971	73,900	50,948
72	44,400	20,649
73	44,900	37,302
74	49,700	33,488
75	48,700	11,301
76	44,600	17,802
77	46,600	41,261
78	75,000	61,239
79	60,000	37,811

表86 アルビステ：輸出実績

単位 1,000トン

仕 向 先 国	1975	1976	1977	1978	1979
ブ ラ ジ ル	09	141	173	240	267
西 独	23	-	33	52	30
オ ラ ン ダ	54	08	37	65	14
ベ ネ ズ エ ラ	07	06	08	1.0	1.3
コ ロ ン ビ ア	06	01	08	09	1.3
ス ペ イ ン	-	-	42	77	10
ポ ル ト ガ ル	-	01	10	09	0.6
イ タ リ ー	03	-	24	72	0.6
東 独	03	0.5	-	-	0.5
そ の 他 の 国	08	1.6	78	108	1.4
計	11.3	178	413	642	378

出所：I. N. D. E. C.

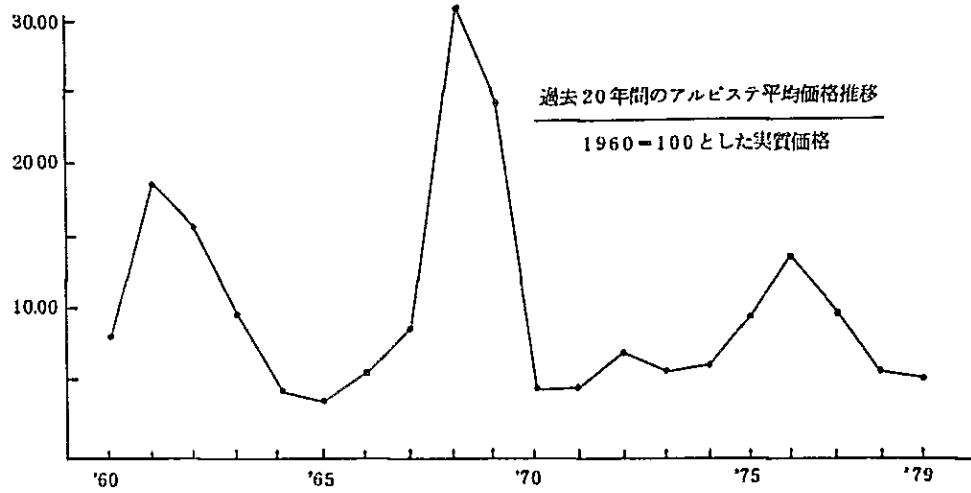
ブエノス・アイレス穀物取引所が発表した79年8月より80年7月までの国内取引平均価格は非常に変動に豊み79年の6月と7月に高値をみたあと、8月には急激に下落、そのまま低値が11月まで続いた。

表87 アルビステ：国内価格の推移

\$ / 1ギンター (100kg)

月 別	実 際 金 額		実 質 価 格	
	ペ ソ	前月比%	1960=100の価格	前月比%
79年 8月	39.705	- 37	501	- 141
9	38.150	- 39	456	- 90
10	36.935	- 32	425	- 68
11	36.918	- 01	411	- 33
12	42.639	155	459	117
80年 1	50.182	177	518	129
2	61.667	229	608	174
3	59.452	- 36	559	- 81
4	57.550	- 32	523	- 64
5	67.571	174	587	122
6	68.500	1.4	560	- 46
7	70.727	3.2	559	- 02

出所：BOLSA DE CEREALES



この価格は79/80年度の取引が開始された12月になってようやく上向きに復活した。これは前年に比して減少した国内生産が影響して買手側がより多くのストック形成を急いだためである。しかし3月になると需要側の買い控えが始まったため価格は再び下降しその状態が年末まで続いた。

2.2 油脂原料作物

A) 食油原料作物

2.2.1 ヒマワリ

2.1.1.1 ヒマワリ果実(種実)

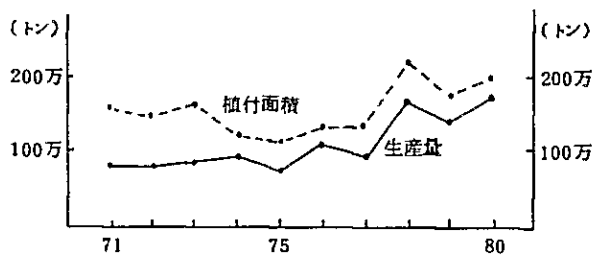
イ) 国内生産

表88 ヒマワリ：過去10年間の生産実績

年 度	植付面積 1,000ha	収穫率 %	収穫面積 1,000ha	単 収 Kg/ha	生産量 1,000トン
1970/71	1,614.2	81.3	1,313.1	632	8300
72	1,532.7	83.9	1,286.5	644	8280
73	1,652.4	81.0	1,337.9	658	8800
74	1,341.9	88.7	1,189.8	815	9700
75	1,196.0	84.0	1,005.0	728	7320
76	1,411.1	89.2	1,258.4	862	1,0850
77	1,460.0	84.0	1,233.0	730	9000
78	2,200.0	90.9	2,000.0	800	1,6000
79	1,766.0	88.2	1,557.0	918	1,4300
80	2,000.0	86.4	1,855.0	890	1,6500
71~80平均	1,617.4	87.1	1,408.6	777	1,090.5

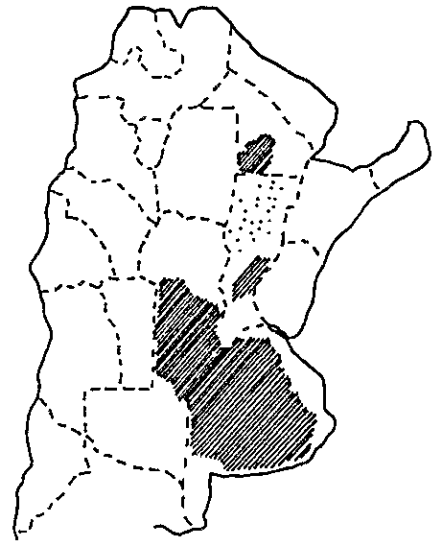
出所：SEAG

隣国のブラジルではつい最近関心が持たれ始めているヒマワリもアルゼンチンではすでに1930年より栽培が開始されており栽培の拡大に平行した搾油工業も当時より発達してヒマワリ油の国内消費を促してきた。ヒマワリ栽培にみられる農工業の統合された発展の経緯は農産加工業発生の1例としてとりあげられており新しく出現した食品は国内



の食料補給をさらに豊にしたものであった。過去の統計をみると1943年には150万ヘクタールの植付面積に達しており以後51年まで同規模の栽培が行われ、この間1943年、48年及び50年にそれぞれ100万トン以上の生産実績を残している。順調に続けられてきたヒマワリ生産も1950年代に入ると供給過剰気味となって生産者の手取価格が下落したのを理由にそれまでの150万ヘクタール台の面積は60万ヘクタールへと激減して一時的な停滞の時期を迎え、55年頃より再び100万ヘクタール台へと復活する。以後100万~160万ヘクタールの間を上下する生産が続き今日にいたっているが、1978年に始めて200万ヘクタールを超える生産規模の拡大がみられ79年もこの水準を保持している。生産量は79/80年に達した165万トンが史上最高の記録となっている。

国内の生産地帯は全国の12州にわたって広く分布するが中でもブエノス・アイレス州が全国植付面積の半分以上を占めて大きく、これに続くコルドバ及びチャコ両州を合わせると全国の80%がここに集中する。これら12州の生産はサンタ・フェ州を除いてすべて増産傾向にある。中でもブエノス・アイレス州が達した79/80農年の植付面積120万ヘクタールは過去10年間の平均を40%上回るものであり同州におけるヒマワリ栽培への関心の強さを示している。アルゼンチンにおける栽培は天候に恵まれた場合8月より播種が開始され播種後に降霜があると発芽を妨げ害虫の発生は以後の発育に大きく影響する。ブエノス・アイレス州では11月まで播種が続けられるが北部のチャコ州では10月には早くも開花結実を開始する。強風、豪雨、降霜、乾ばつ等は結実期に悪影響をあたえ生産を左右するばかりでなく品質を低下させ、とくに油の含有量に關係する。



サンタ・フェ州の北部やチャコ州など北部地方では1月にほとんど収穫を終了する。サンタ・フェ州南部やブエノス・アイレス州等中央部では4月から5月にかけて収穫が完了する。

表89 ヒマワリ：州別生産実績

州 別	植 付 面 積 1,000ha						生 産 量 1,000トン					
	1975	76	77	78	79	80	1975	76	77	78	79	80
ブエノス・アイレス	6539	7254	8000	11950	9810	12000	3580	5950	4900	9800	9000	8820
コ ル ド バ	1390	1785	2080	2930	2440	3100	1020	950	1700	1900	2200	2530
チ ャ コ	1674	2460	1060	2400	1700	2660	1325	1900	480	1340	590	2230
サ ン タ ・ フ ェ	37.8	217	227	320	353	565	252	107	180	110	220	310
ラ ・ パ ノ バ	14.5	264	460	1000	723	1200	112	214	350	600	600	760
サ ン ル イ ス	37.8	217	227	320	353	565	252	107	180	110	220	310
フ ォ ル モ ー サ	8.3	57	60	130	42	150	94	52	40	100	28	140
エ ン ト レ ・ リ オ ス	100	94	100	200	175	190	58	63	62	90	94	110
ブ ク マ ン	0.4	01	-	19	08	20	05	01	-	18	08	20
コ リ エ ン テ ス	01	02	02	3.2	40	25	-	0.1	01	2.7	30	19
サ ン チ ャ ゴ ・ デ ル ・ エ ス テ ロ	07	08	08	11	12	1.8	0.5	0.2	0.5	0.8	1.0	1.4
サ ル タ	-	-	0.3	0.8	27	1.2	-	-	0.2	0.7	2.0	0.6
全 国 計	1,1960	1,4111	1,4600	22000	1,7660	22000	7320	1,0850	9000	1,6000	1,4300	1,6500

出所：S. E. A. G

1ヘクタール当たりの単収は過去10年間の平均が777kgとなっているが、1938年と1940年には1,100kgの記録を残していることからみると以後の生産性ははるかに低下したことになる。州別ではフォルモーサ州とコルドバ州の単収が比較的に高くそれぞれ1トン以上の収穫を上げた年もある。しかし最近一代雑種による抵抗性の強い品種の栽培が普及し始めているので今後の単収増大が期待されている。

世界における単収はユーゴスラビ、フランス等がもっと高く2,000kg以上、平均は1,200kg前後となっている。

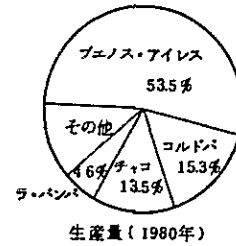
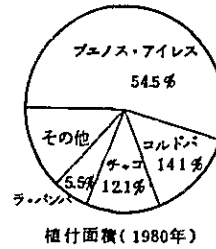


表90 ヒマワリ：主要生産州における単収比較

州別	ブエノス・アイレス	コルドバ	チャコ	サンタ・フェ	ラ・パンパ	フォルモーサ	全国平均	世界平均	ソ連
1975	669	739	809	787	1,000	1,177	728	1,086	1,234
1976	875	662	900	918	982	992	862	1,106	1,164
1977	760	850	485	615	909	889	733	1,208	1,291
1978	891	731	593	733	750	769	800	1,140	1,165
1979	996	970	536	788	946	667	918	1,243	1,182
1980	882	1,008	856	811	745	933	868	---	---

出所：S. E. A. G/FAO

ロ) 世界の生産需要動向

“OIL WORLD”によると75年以降増加を続けてきたヒマワリの世界生産量は、79年に前年の130百万トンを20%上回る155百万トンに達しており、世界の10大生産国の油脂作生産量1762百万トンの中でヒマワリはその88%を占めている。一方FAOの統計でみると1978年の生産量は127百万トン、79年は151百万トンと推定されている。以上のいずれにしてもこの生産増大は収穫面積の増加と単収の向上によるものである。

世界の生産量はソ連、米国、アルゼンチンの主要3国によって70%が占められており、中でも世界最大の生産国ソ連は1974年に68百万トンの生産を行って世界生産の60%を占めたが79年には55百万トンの生産で36%に落ちている。世界のヒマワリ生産の中で特に注目されるのは米国の急激な増産で70年当初世界のわずか12%にすぎなかった12百万トンの生産は77年より飛躍的に伸び始め同年にはそれまで2位の生産を行ってきたアルゼンチンをしりぞいで125百万トンの生産を上げ次年度は170百万トン、79年には366百万トンに達して世界総生産の24%を占めるにいたっている。これに続くアルゼンチンの他にはルーマニア、トルコ、スペイン、ブルガリア等があるが、その生産量はアルゼンチンの半分以下にすぎない。

“OIL WORLD”が行った推定によると世界の輸出（ネット輸出）は78年の世界生産量の14%、79年は11%に相当する176万トン及び166万トンであった。最大の生産国ソ連は生産の全量が国内で搾油されるため果実としての輸出は世界輸出の80%が米国に占められている。アルゼンチンは78年に果実の状態ではじめての大型輸出（20万トン）を行って米国に次いだが79年に再び減少したため、ハンガリーがこれに代っておりオーストラリヤが続いている。

他方、世界の輸入国をみると79年総量はネットで164万トンとなっており西欧諸国が合計でその80%を占め、その83%はEC諸国に集中し中でも西独（67万トン）イタリー（16万トン）が二大輸入国である。78年に30万トンの輸入を行って世界2位の大型輸入国であったメキシコは79年には9万トンに止まり世界の総輸入に占めたシェアは前年の20%より56%に縮少した。

表91 ヒマワリ：世界の生産 百万1,000トン

生産国	1977	1978	1979
ソ 連	5,904	5,310	5,500
米 国	1,252	1,700	3,660
アルゼンチン	900	1,600	1,430
ルーマニア	807	792	792
ユーゴスラビア	479	544	600
スペイン	388	460	498
ブルガリア	423	390	400
その他	1,803	3,709	2,255
世界計	10,956	12,705	15,135
大陸別			
ソ 連	5,904	5,310	5,500
中 北 米	1,337	1,808	3,778
ヨーロッパ	2,501	2,621	2,832
南 米	950	1,702	1,515
ア ジ ア	614	559	903
ア フ リ カ	576	537	404
大 洋 州	75	158	203
世界計	11,956	12,705	15,135

出所：FAO

表92 ヒマワリ：世界の輸出入 単位1,000トン

輸出国	1978	1979	輸入国	1978	1979
米 国	1,3166	1,3259	西 欧 諸 国	1,1075	1,3336
ハンガリー	552	1257	メ キ シ コ	3045	91.4
オーストラリア	524	933	チェコスロバキア	67.0	800
カナダ	741	892	南 ア フ リ カ	-	543
ブルガリア	75	80	東 独	250	300
ユーゴスラビア	20	80	日 本	24	29
アルゼンチン	2022	25	そ の 他 の 国	450	500
その他の国	493	11.1			
世界計	1,7593	1,6637	世界計	1,551.4	1,6421

出所：“OIL WORLD”

表93 ヒマワリ：アルゼンチンの輸出

仕向先国	1978	1979
西 独	41,112	-
フランス	6,315	-
オランダ	60,289	-
イタリー	13,920	2,465
メキシコ	69,800	-
ポルトガル	8,423	-
その他の国	-	-
計	199,859	2,465

出所：J. N. G 単位：トン

アルゼンチンにおける原料(果実)輸出は78年を最高としてその以前には(47年以降)70,71年を除いてほとんど行われていない。この基本的にはイ)国内搾油工場の規模が大きく生産物の全量を加工処理する能力を有していること及びロ)世界の原料需要が減少している。ことに由来している。このため79年の輸出もイタリーのみであり80年上半年期には輸出は行われていない。

なおヒマワリ果実の輸出に関しては79年12月20日付経済省決議第1,412号により従来の課税対象より除外されることとなっている。

ヒマワリの国際価格については相場決定の要素となる世界のストックに対する需要量の比率が79/80年にかけて増加したため価格の下落を引きおこした。すなわち79年初頭の世界在庫は前年比60%増の80万トンであったが79年度の生産が前年比183%の増加となったため総供給量は前年を270万トン上廻った。これに対して需要の伸びは緩慢で生産増をたまる148%増に止まったため年度末におけるストックは前年を倍加することになり総需要に対する在庫の割合は78年の6.2%から79年には10.9%へと増大した。これを反映した価格はロッテルダム市場において79年9月以降80年4月まで継続して下落している。

表94 ヒマワリ：世界の需給関係 単位100万トン

区分	78/79	39/80	%
期首ストック	0.5	0.8	+ 60.0
世界生産	13.1	15.5	+ 18.3
総供給量	13.6	16.3	+ 19.9
世界需要	12.8	14.7	+ 14.8
期末ストック	0.8	1.6	+100.0

出所：OIL WORLD

ハ) 国内市場価格

ヒマワリは原料のままでの輸出は僅少であるが、加工されたヒマワリ油は約半量が輸出されるため国内市場においても国際価格の影響を直接受ける高品である。ブエノス・アイレス穀物取引所は80年3月に79/80農年産ヒマワリの取引を開始したが当初の価格は1キントル(100kg)あたり32,200ペソで前年と同水準であった。(1979年12月19日の価格30,500ペソ)。インフレ率を除外した実質価格で見ると80年の価格は前年の50%の価値に過ぎなかったことになる。これは79/80年産物の品質が悪く油の含有量が少なかったことをもつとも大きな理由としている。79年8月以降の価格をみると国際価格の場合と同様に8月を頂点とした価格は減少を続け80年5月にはキントル当たり26,295ペソの低値となった。

この様に79/80年度ヒマワリについては惨憺たる結果に終わっているが国際市場における油脂原料需要の増加、とくに植物性油脂の需要が常に増加傾向にあること、米穀においては80/81農年産ヒマワリの減産が伝えられていることなどにより81年度の国内市場は再び活気を取り戻すであろうというのが穀物取引所の推定である。

表95 ヒマワリ：ロッテルダム市場価格の推移

月別	トン当たりUSS	前月比 %
79年8月	311	-
9	312	0.3
10	294	- 5.8
11	284	- 3.4
12	289	1.8
80年1	288	- 0.3
2	287	- 0.3
3	267	- 7.0
4	257	- 3.7
5	271	1.8
6	276	5.4
7	328	18.8

出所：OIL WORLD

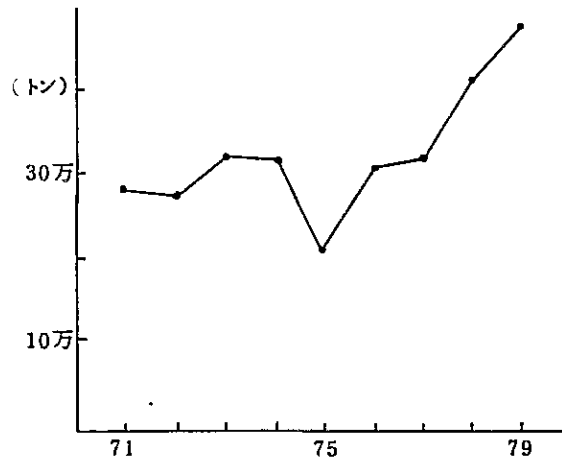
2.2.1.2 ヒマワリ油

イ) 国内生産

表96 ヒマワリ油生産推移

年度	生産量 1,000トン
1971	2848
72	2763
73	3373
74	3280
75	2089
76	3067
77	3207
78	4103
79	4707

出所：BOLSA DE CEREALES



アルゼンチンで生産されるヒマワリはほぼ全量が搾油されヒマワリ油及び副産物としての粕を産出する。ヒマワリ油の国内生産は75年を除いて毎年増産が続いており79年には史上最高の470699トンに達した。このために加工された果実の重量は1,362,358トンで搾油率は35%であった。この生産量は世界生産量の10.3%を占めてソ連に次ぐが輸出余力は世界最高の位置にある。1980年は最終的な数字は発表されていないが1~5月間にすでに30万トンの生産をあげており79年同期の50%増に相当するもので80年も又記録更新の年となった筈である。

ロ) 世界の生産需要動向

世界のヒマワリ油生産は76年以降毎年増加しており79年には454万トンに達した。世界最大の生産国は原料生産が圧倒的に大きいソ連であるが原料生産にみられる生産の下降を反映して79年の生産量は176万トンで前年比9%の減少で、76年、77年と続いた49%のシェアは79年には38.9%へと下降した。これに対しこの4年間に世界生産の中におけるシェアを高めた国としてはアルゼンチン、西独の顕著な伸びがある。とくに西独は76年度における92千トンの生産を79年には252千トンへと170%の増産を続けている。これによって従来のヒマワリ油の輸入を50%に減少したと伝えられている。

再びアルゼンチンに戻るとその輸出量は76年の世界輸出の6.2%に当たる38千トンから79年には226千トンを輸

出して世界の28.8%を占め世界貿易における圧倒的な地位を築いた。アルゼンチンの世界貿易におけるシェアの拡大は国内生産量の拡大が大きく作用しているが、他方76年に世界輸出の4.8%を占めたソ連の輸出量29.3千トンが79年には10.0千トンに減少しそのシェアを12.8%に落したことも影響している。アルゼンチン産ヒマワリ油はアルジェリヤ、西独、オランダ及び東独等を76年以降の顧客としているほか79年にはベネズエラ及びエジプトが新しい市場として現われている。

表97 ヒマワリ油：アルゼンチンの輸出 単位 トン

仕向先国	1975	1976	1977	1978	1979
ベネズエラ	-	-	-	21,357	78,946
アルジェリア	-	2,996	16,741	45,039	45,876
エジプト	-	-	-	-	32,494
オランダ	-	23,515	66,329	22,109	11,392
東 独	-	3,000	10,666	1,963	5,566
西 独	-	3,073	3,059	3,943	4,718
スペイン	-	-	-	35,940	2,784
フランス	-	-	7,150	8,289	6,916
イ ン ト	-	-	-	24,843	-
その他の国	-	5,489	25,235	19,398	32,323
計	0	38,073	129,180	182,881	221,015

出所：I. N. D. E. C

このアルゼンチンの輸出にとって極めて有利に展開したのはFOB価格の上昇で78年のトン当たりUS\$516-が79年には38.2%増のUS\$713-と伸びた。この他西欧諸国も最近世界輸出に対するシェアを高めており77年の12.8%は79年に25.9%と増加している。

他方世界の輸入国についてみると輸入総量の18.4%を占めるフランスは78年に引続き79年も13万トンの輸入を継続したが、他の輸入国にはとくに大型のものはなく西独、スペインが76年及び78年に10%以上のシェアを占めたのを数少ない例外としている程度である。

ロッテルダム市場にみられる最近の国際価格は下表に示される通り急激な下落がみられる。これは原料の場合と同様に供給が需要をオーバーし世界の在庫が増加した結果を反映したものである。79年度の最高価格は9月にみられたトン当たりUS\$832.50最低は4月のUS\$550.53でこの間44%の大幅な下落であった。これも7月以降ようやく上向きに変った。

表98 ヒマワリ油：ロッテルダム市場価格の推移

区 分	1979					1980						
	8月	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7
トン当たりUS\$	8025	8325	7156	6895	6557	6329	6479	5734	5505	5668	5576	6301
前月比%	-22	37	-111	-37	-49	-35	24	-115	-40	30	-17	137

出所：BOLSA DE CEREALES

表99 ヒマワリ油：世界の輸出入

区 分	1976		1977		1978		1979	
	1,000トン	%	1,000トン	%	1,000トン	%	1,000トン	%
輸 出 国								
アルゼンチン	38	6.2	131	18.9	184	22.4	226	28.8
ルーマニア	87	14.3	158	22.8	131	15.9	122	15.6
ハンガリー	32	5.2	38	5.5	45	5.5	48	6.1
ソ 連	293	48.0	231	33.2	148	18.0	100	12.8
米 国	50	8.2	16	2.3	44	5.4	30	3.8
西欧諸国	81	13.3	89	12.8	190	23.1	203	25.0
その他の国	29	4.8	31	4.5	80	9.7	55	7.0
世界計	610	100.0	694	100.0	822	100.0	784	100.0
輸 入 国								
フランス	81	13.6	99	15.8	136	17.3	131	18.4
ベルギー	29	4.9	32	5.1	43	5.5	40	5.6
オランダ	27	4.5	32	5.1	33	4.2	36	5.1
西 独	66	11.1	61	9.7	28	3.6	30	4.2
オーストリア	26	4.4	29	4.6	29	3.7	29	4.1
スペイン	15	2.5	28	4.5	83	10.5	23	3.2
ス イ ス	26	4.4	23	3.7	23	2.9	20	2.8
東 独	50	8.4	40	6.4	35	3.2	20	2.8
アルジェリア	10	1.8	27	4.3	55	7.0	39	5.5
キューバ	66	11.1	73	11.6	68	8.6	50	7.0
その他の国	198	33.3	183	29.2	264	33.5	294	41.3
世界計	594	100.0	627	100.0	787	100.0	712	100.0

出所：“OIL WORLD”

ハ) 国内市場価格

79年8月より80年7月までの国内価格は下落を続けようやく上向きに転じたのは80年の7月からであった。上にみた国際価格と全く同様の推移を示しているのは本商品が完全な輸出商品であり国際相場の影響をまともに受けるからである。国内価格の推移は次表の通りである。

表100 ヒマワリ：国内価格の推移

1俵あたりペソ

区 分	1979年					1980年						
	8月	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7
実際価格	100,386	104,600	87,000	95,136	96,556	101,568	110,190	98,000	89,950	95,857	93,947	118,045
前月比%	-0.2	+41	-7.3	-1.9	+15	+52	+8.5	-11.1	-8.2	+6.6	-2.0	+25.7
1960=100 の価格	1268	1251	1117	1060	1039	1048	1086	922	817	833	768	933
前月比%	-11.1	-1.4	-10.7	-5.1	-2.0	+0.9	+3.6	-15.1	-11.4	+2.0	-7.8	+21.5

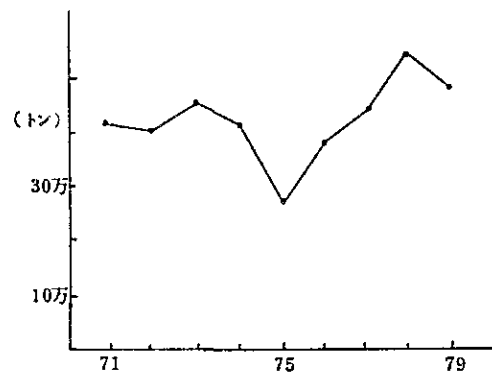
出所：

2. 1. 3 副産物

粕の生産は年々減少気味で79年には前年比5.9%減の9,172トンに終わっている。国内生産は1947年の268千トンが最高記録となっており79年の生産量は当時の3.4%に過ぎず47年以降最低の生産であった。80年度も1～5月の統計でみると79年と同水準に止ったものと推定される。

表101 ヒマワリ副産物の生産推移 単位1000トン

年度	粕	粉	計
1971	41.7	384.8	426.5
72	21.9	382.1	407.0
73	12.3	455.6	467.9
74	13.7	409.2	422.9
75	15.5	259.6	275.1
76	14.3	356.8	371.1
77	18.8	423.5	442.3
78	22.5	523.6	546.1
79	9.2	470.7	479.9



出所：BOLSA DE CEREALES

ペレットを製造する粉の方は粕とは逆に79年の生産量は78年の最高記録には及ばなかったが(-10.2%)これに近い生産量となっている。この2製品を合わせた副産物の合計は75年を除いて増加傾向にある。

粉の世界生産をみると76年以降増加をたどっており79年度には前年を5%上回る5.2百万トンであった。世界最大の生産国は原料の場合と同様にソ連となっており世界生産量に占めるシェアは76年で4.1%、79年は3.0%であり、これに次ぐアルゼンチンの生産量は79年度で世界生産の11.2%に相当する。世界の生産国の中で大巾な増産を記録しているのはEC諸国で76年における2.13千トンは79年に6.92千トンへと増加しており、このため世界生産に占めるシェアも5.8%より13.2%と増大している。

表102 ヒマワリ(粉)の世界生産

単位 100万トン

国又は国別	1976		1977		1978		1979	
	生産量	%	生産量	%	生産量	%	生産量	%
ソ連	1,532	11.4	1,690	41.6	1,740	3.50	1,581	30.3
アルゼンチン	371	10.1	494	10.9	559	11.2	584	11.2
EC諸国	213	5.8	264	6.5	506	10.2	692	13.2
ルーマニア	360	9.7	383	9.4	386	7.8	403	7.7
トルコ	226	6.2	216	5.3	210	4.2	235	4.5
スペイン	169	4.6	169	4.2	201	4.0	226	4.3
ユーゴスラビア	120	3.2	155	3.8	204	4.2	222	4.3
米 国	85	2.3	44	1.0	160	3.2	219	4.2
南アフリカ	109	2.9	152	3.8	221	4.4	173	3.3
その他の国	512	13.8	548	13.5	788	15.8	887	17.0
世界計	3,697	100.0	4,065	100.0	4,975	100.0	5,222	100.0

出所：OIL WORLD

世界の貿易面ではアルゼンチンが世界輸出の約90%を占めて圧倒的な立場にありアルゼンチンで生産されるベレットの80%は輸出に向けられる。輸出市場は主に西独、デンマーク及びオランダでそれぞれアルゼンチン総輸出品(1979年)の32.8%、29.1%及び20.5%の比率であった。79年度におけるアルゼンチンのベレット輸出は前年を3%上回る518.437トンに達しトン当たり平均価格(FOB)はUS\$140-であったので計72,688千ドルの外貨を得ている。80年の輸出も8月15日までに51万トンに達して、前年同期の38万トンを大巾に上廻っており年度全体で従来の記録を上廻ったものと推定される。しかしながら国内価格は低く実質価格では1970年の水準に達していない。

表103 ヒマワリ副産物：ベレットの輸出実績

仕向先国	トン				
	1975	76	77	78	79
西 独	75,041	61,621	81,464	155,076	169,978
デノマーク	6,137	54,377	104,172	139,953	150,874
オランダ	83,949	94,756	139,952	107,260	106,044
フランス	1,265	12,960	20,390	27,947	18,969
ポーランド	-	-	-	-	13,357
東 独	-	500	16,661	19,233	5,075
その他の国	55,391	43,643	47,670	53,792	54,140
計	221,783	267,857	413,309	503,261	518,437

出所：I. N. D. E. C

表104 ヒマワリ副産物 ベレットの国内価格

区 分	1979年					1980年						
	8月	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7
実際価格 ペレット/トン	194,773	196,850	205,870	213,909	228,611	234,318	252,619	215,000	196,550	206,286	193,895	220,227
前月比	+28	+11	+46	+39	+69	+25	+78	-119	-86	+50	-60	+136
1960=100 の指数	2459	2355	2371	2383	2461	2418	2489	2023	1785	1793	1585	1741
前月比	-84	-42	+07	+05	+33	-17	+29	-187	-118	+04	-116	+98

出所：BOLSA DE CEREALES DE BUENOS AIRES.